

令和4年度 文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

令和4年度 文部科学省委託「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究報告書

編集・発行●重度障害者・生涯学習ネットワーク

「重度医療的ケア者対象の 訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究 報告書



重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和5年3月10日

令和4年度 文部科学省
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

「重度医療的ケア者対象の
訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究
報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

目次

項目		頁
はじめに		1
I 研究計画		2
1. 目的		2
2. 方法		4
3. 事業経過		6
II 結果・考察		7
1. 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム		7
(1) 訪問カレッジの活動を通して分かったこと		7
(2) 訪問型学習における効果的な学習プログラム 実践記録		10
2. 人材育成		26
(1) 日野市障害者訪問学級		26
(2) NPO 法人ひまわり Project Team		30
(3) NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会		32
(4) 「人材育成」に関する考察		36
3. 運営・地域連携		41
(1) 先行事例の研究		41
(2) 自治体と民間団体が組織的に運営するための運営・地域連携モデル		45
(3) 「運営・地域連携」に関する考察		49
4. 理解啓発		52
(1) 「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」の概要		52
(2) 「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」開催結果		54
(3) 訪問カレッジ学生・家族の満足度調査		75
(4) 「理解啓発」に関する考察		78
III まとめ・今後の課題		80

はじめに

重度障害者・生涯学習ネットワーク 代表 飯野順子

「人間は、生涯にわたって、自分の良さや可能性を求め続ける存在」(2018「学びの哲学」)です。重い障害のある人も、「学びたい」「楽しいことをしたい」等の「思い」や「願い」をその内面に豊かに持っています。しかしながら、その心のさけびは、「声にならない声」です。傾聴の時と場が必要です。そのため、「訪問カレッジ」活動を通して、私たちは、「思い」や「願い」を実現するために、その人の持てる力を発揮し、「できる」ことを生かした「学び」を追求しています。生きることは、学ぶこと、学ぶことは生きる喜び、その喜びが生命を強め、生きる力を育てています。この度の「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習に向けた実践研究」におきましては、内面の願いや思いなどの声を、多くの方々に届ける良い機会とするために、取り組みを進めました。

目指す社会像「誰もが障害の有無にかかわらず共に学び、共に生きる共生社会」を目指すために、障害者の生涯学習推進において特に重視すべき視点として、有識者会議の報告書では、(1)本人の主体的な学びの推進 (2)学校教育から卒業後における学びへの接続の円滑化 (3)福祉、労働、医療等の分野の取組と学びの連携の強化 (4)障害に関する社会全体の理解の向上、をあげています。(1)から(3)については、現状では推進可能な視点ですが、特に、今後に向けては、(4)の「障害に関する」ではなく、「重い障害のある方の学びの必要性」に関する社会全体への理解を、広めること、深めることを、なお一層重視すべき視点として、強調したいと考えています。

重い障害のある方の「学び」は、学習プログラムを総覧すると、個別性・固有性且つ多様性・多義性に富み、「包括的な学び」として展開しています。今後も、一人一人に応じて、ライフステージに応じて、その実績として蓄積していく必要があります。そこにネットワークの存在意義があります。今、直面していることは、運営面での諸課題です。今後、各団体によって事情は異なりますが、困難な課題は、講師料等の安定した運営資金と人材の確保です。生涯学習のニーズは、年々高くなっています。その期待に応えて、「訪問型の学びの場」を拡充する方途は、何らかの形での法制度の確立であると切実に感じています。

「障害者の権利に関する条約」は、その理念を「人間の潜在能力並びに尊厳及び自己の価値についての意識を十分に発達させ、並びに人権、基本的自由及び人間の多様性の尊重を強化すること」と謳っています。この理念の実現に向けて、小さな力の集積が大きな力になり、社会を動かす日の招来を心待ちにしています。

*参考文献 嶋野道弘「学びの哲学」2018 東洋館出版社

I 研究計画

1. 目的

平成29年4月7日に発信された松野文部科学大臣メッセージ「特別支援教育の生涯学習化に向けて」の中で、「中でも印象的だったのが、特別支援学校での重い知的障害と身体障害のある生徒とその保護者との出会いです。その生徒は高等部3年生で、春に学校を卒業する予定であり、保護者によれば、卒業後の学びや交流の場がなくなるのではないかと大きな不安を持っておいででした。」と紹介された保護者は、「重度障害者・生涯学習ネットワーク」の副会長である。

「重度障害者・生涯学習ネットワーク」（以下、「ネットワーク」）は、「医療的ケアを必要とする障害の重い方の多くは、在宅生活を余儀なくされている。心豊かな生活の実現のために、学校時代に学んだことを継続し、更に、新たな知識等を身につけたいと希求している。このような生涯にわたり学び続けたいという夢や願いに応えるために、これまで『カレッジ』等の名称を冠した学びの機会と場を創出してきた。（中略）関係団体が連携して『重度障害者・生涯学習ネットワーク』を結成し、生涯学習の充実を図る。」を目的に平成29年12月25日に発足した。会員団体は、令和5年3月10日現在12団体である。「ネットワーク」は、発足時期（平成24年から現在）も、活動地域（事務局所在地）も、事業母体の形態（NPO、一般社団、国立学校法人等）も異なるが、いずれも「医療的ケアを必要とする重度障害者対象の訪問型生涯学習支援」（以下、「訪問カレッジ」）に取り組んでいる団体によるコンソーシアムである。

一方で「訪問カレッジ」は、福祉や教育などの制度的な背景のない、独自の事業であり、事業継続を行うための財政基盤が無いというのが大きな課題となっている。そこで社会の制度に位置づけたいというのが「ネットワーク」の願いである。

本事業では、会員団体が行っている「医療的ケアを必要とする重度障害者対象の訪問型生涯学習支援」の効果的な学習プログラムや、地域の中での支援者人材育成のノウハウを提供する。また、事務局のある神奈川県、「日野市障害者訪問学級」（昭和56年から）を委託実施する日野市生涯学習課、近年会員団体と協議して支援を始めた新宿区障害福祉課担当者を含めた連携協議会を開催することで、自治体が民間団体と組織的に連携して障害者の生涯学習支援に取り組むための組織体制づくりや連携方法を検討する。併せて、その成果は事業モデル及び実践事例集（成果報告書）としてまとめ、地方公共団体等と共有する。さらに、共生社会及び生涯学習社会の実現に向けた啓発事業として「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」

訪問型の保育・療育・教育等

就学前	福祉	居宅訪問型保育	平成27年度～
	福祉	居宅訪問型 児童発達支援	平成30年度～
学齢期	福祉	居宅訪問型 児童発達支援	平成30年度～
	教育	訪問教育	昭和54年度～
学校 卒業後	福祉	生活介護事業所からの 居宅訪問	自治体・法人
	教育	訪問型生涯学習	民間（法定外）
	教育	青年学級（訪問）	自治体事業

根拠となる制度・
事業は現在ない

を事務局のある神奈川県で開催し、神奈川県を核として本事業の普及を図る。その活動の中心を担う事務局は、「NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」に置く。

「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律（医療的ケア児支援法）」（令和 3 年 9 月 18 日施行）により、「医療的ケア児」（日常生活及び社会生活を営むために恒常的に医療的ケアを受けることが不可欠である児童）への支援について現在注目が集まっている。本事業では、18 歳以上の「医療的ケア者」に対する生涯学習の実践を通じて、障害が重度であっても生涯学習の対象であり、そのニーズがあることを明らかにする。社会生活をおくる上で最も困難を抱える重度障害者に対する社会理解を深めることは、あらゆる障害のある方々への理解推進を図ることにほかならない。したがって本事業は、共生社会・生涯学習社会の促進に寄与できると考える。

(1) 重度障害者・生涯学習ネットワーク

(a) 会員団体

	事業名	法人等事業者名
①	日野市障害者訪問学級	日野市障害者問題を考える会
②	訪問療育 いるか	NPO 法人かすみ草
③	訪問カレッジ@希林館	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所
④	ひまわり Home College	NPO 法人ひまわり Project Team
⑤	訪問大学おおきなき	NPO 法人訪問大学おおきなき
⑥	訪問事業 i.porte(あいぽると)	NPO 法人あいけあ
⑦	訪問カレッジ静岡	静岡県障害者就労研究会
⑧	在宅訪問学習支援事業「SHJ 学びサポート」	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン
⑨	みんなの大学校	一般社団法人みんなの大学校
⑩	訪問カレッジ Enjoy かながわ	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会
⑪	訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学	愛媛大学
⑫	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト

(b) 役員等

氏名	所属・役職等	備考欄
飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事長	会長
成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	副会長
藤原 千里	NPO 法人ひまわり Project Team・代表理事	副会長
相澤 純一	NPO 法人訪問大学おおきなき・理事長	会計
下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	事務局長
安部井聖子	東京都重症心身障害児(者)を守る会・会長	顧問
柿沼 亮介	社会福祉法人天童会秋津療育園・医師	顧問
新井 雅明	田園調布学園大学・教授	顧問
奥野 康子	神奈川県立スポーツセンター・専門員	顧問

(2) 事業推進担当者

氏名	所属・役職等	備考欄
成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	
繫 里織	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・経理	
新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
奥野 康子	神奈川県立スポーツセンター・専門員	
片山 由美子	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	
下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	

2. 方法

「ネットワーク」会員団体は、効果的な学習プログラム作成に向け、年間を通して以下の①～④の4つの項目で実践する。なお、各会員団体は4つの項目をすべて行うのではなく、各会員団体のこれまでの経過や地域の実情を踏まえて、実施内容はそれぞれが決定する。

本事業では、今後同様な活動を行う民間団体や地方自治体が新規に事業に取り組み始めるに当たって参考となる学習プログラム等をまとめる。

(1) 訪問型生涯学習支援

医療的ケアを必要とする重度障害者対象の訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」は、障害や病気のために通所施設等の毎日の利用が難しい 18 歳以上の者（以下、「学生」）の自宅等へ学習支援員を派遣して、障害者等の豊かな地域生活を目指した生涯学習を支援することを目的としている。学習内容は、個の学習ニーズに応じた学習プログラムを提供することを基本としている。

本事業では、各会員団体による「訪問カレッジ」の実践の蓄積をもとに、個別化された学習プログラムを類型化して効果的な学習プログラムの提供を行う。

(2) 人材育成

医療的ケアを必要とする重度障害のある「学生」は、身体障害や知的障害、その他に認知特性なども見られ、個のニーズに応じた適切な支援が必要である。そのため、学習支援員には特別支援学校の元教師が担当になる場合が多いが、会員団体の中には人材育成を通じて、地域で活躍されているさまざまな人材に関わっていただく取り組みも行っている。

本事業では、日常的に学習を支援する学習支援員やゲストティーチャー等の活用の方法及び育成プログラムについてまとめる。

(3) 運営・地域連携

「訪問カレッジ」は、福祉や教育などの制度的背景のない独自の事業であるため、財政的基盤が整っていない。そのため運営費を「学生」の学費、法人内他事業から経費の工面、福祉関係の助成金を活用している場合がほとんどである。

一方、日野市は、自治体が事業化して民間に委託している。このように今後の方向性としては、国や都道府県による補助事業として自治体による事業化と民間への事業委託が考えられる。

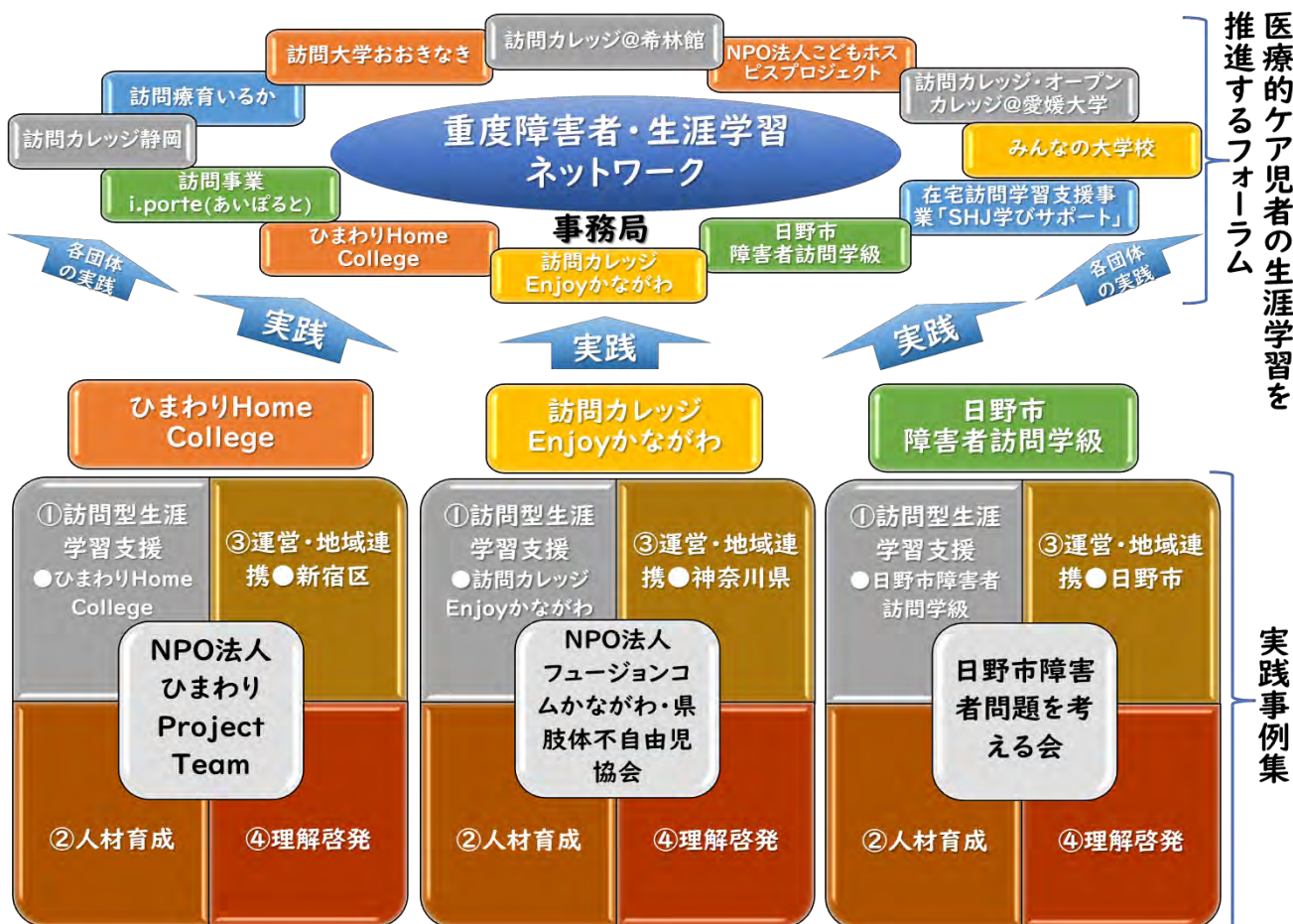
本事業は、「ネットワーク」会員団体の他、自治体生涯学習担当、教育と福祉団体、当事者で構成する連携協議会が担う。自治体として訪問型生涯学習支援を事業化している自治体からも参加いただくことで、事業のノウハウを共有し、社会教育・生涯学習を踏まえた「重度医療的ケア対象の訪問型生涯学習支援」のモデルケースとして普及を図るために、安定的な事業展開を目指す上で必要とされる経費を明らかにし、財政的な課題と課題解決策に向けた自治体との連携の在り方を検討し、他の自治体に参考になるモデルを提案する。

(4) 理解啓発

「ネットワーク」会員団体の中には、外国大使館やJAXAなどの公的機関が行う教育プログラムの出前授業を活用したり、生活介護事業所と連携したり、障害者スポーツイベントなど、地域の資源の活用に取り組む会員団体がある。また、医療的ケアが必要な方々の地域生活を豊にしていけることを目的に、訪問型生涯学習等を含めたフォーラムを開催してきた。

本事業では、地域資源の活用やフォーラムを通じて訪問型生涯学習に対する理解啓発プログラムとしてまとめる。

【研究の全体像】



3. 事業経過

期日	内容
4月	会員団体による訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」の令和4年度開始
5月10日	第1回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議役員会議
6月 5日	令和4年度「第1回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議」
7月31日	第1回 連携協議会
8月	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ネットワーク会員団体は、効果的な学習プログラム作成に向け、年間を通して4つの項目で実践する。</p> <p>①訪問型生涯学習支援 ②人材育成 ③運営・地域連携 ④理解啓発</p> </div>
9月	
10月	
11月25～ 27日	訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」3日間 第3回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム ミュージアム最終日
12月13日	第2回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議役員会議
1月15日	令和4年度「第2回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議」
2月18日	第2回 連携協議会
3月	会員団体による訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」令和4年度修了 最終報告書提出



Ⅱ 結果・考察

Ⅰ. 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

(Ⅰ) 訪問カレッジの活動を通して分かったこと

(a) はじめに～右手の親指の動きは、言葉（気持ちの表現）なのではないか？

右手の親指の動きは、始めは偶然の動き、不随意の動き？と思っていましたが、訪問を重ねる中で、親指の動きには、意図があり、Rさんの好きなことや気持ちを伝えていると思えるようになったそうです。小さな動きですが、貴重な動きの発見です。この事実は、重い障害のある人の学びのエッセンスそしてミッションそのものと、感銘を受けました。自分でできる喜び、自分の力で表現する喜びを、たくさん増やすことは、障害の重い方々の学びの基盤です。

(b) 訪問型生涯学習支援とは～「学びの扉を開く鍵」を

訪問型生涯学習支援とは、学校卒業後、重い障害のために外出が困難な方を対象に、家庭や入所施設等に学習支援員等が訪問して、「学び」を実現する仕組みです。その基本理念は、「生きることは学ぶこと、学ぶことは生きる喜び、いつでも、どこでも、いくつになっても、『学びたい!』『もっと知りたい!』」という願いに応えることです。

「訪問カレッジ」は、「余暇活動」ではなく、一人一人の学びをライフステージに応じて、可能性にチャレンジし、「キャリア発達」を促す場です。かけがえのない人生のかけがえのない「時」を、学びたいことを、学ぶ「時」とすることをモットーとしています。そして、その人の人生の「学びの履歴」を創ることを大切にしています。

学校卒業後は、「学びの機会と場」が閉ざされがちですが、「訪問カレッジ」には、「学びの扉を開く鍵」（渡部淳「教師学びの演出家」旬報社）があります。その扉を開けた学生さんやご家族から、関係する私たちは多くのことを教えられました。

(c) 「訪問カレッジ」の活動を通して分かったこと

「訪問カレッジ」を通して、分かったことは、次のことです。それは、週 1 回の学びであっても、回数ではないことを示しています。

- ① 学校時代に身に付けたことを、ゆっくりと、自分のペースで、自分らしさ・その人らしさを育てている。
- ② 何歳になっても、緩やかではあるが、成長・発達し続け、ライフステージに応じて、その内面を豊かにしている。興味・関心が広がり、深まっている。
- ③ 取り組みが始まると、学校時代に蓄積した力を発揮し、顔が輝き、「学ぶことは生きる喜び」を体現している。
- ④ 一週間に一度の訪問であっても、その日を心待ちにし、生活リズムや体調を整えている。カレンダーにしるしをつけて、次の時を、期待感をもって待っている。
- ⑤ 年齢に応じて、筋緊張や拘縮が亢進するため、身体の変化を予防するためにも、身体の内組は、この

上なく大切である。

⑥年間を通じて、体調の変化があり、生命と向き合い、その力を精一杯発揮できる「時」は、かけがえのない時間であり、「学び」によって、生命を強めている。

⑦家族がともに学び、家族の相談にのるなど、家族支援の場になっている。

上記のことは、学校生活の中で培われた基盤が、しっかり根付いていることを証明しています。学校時代との切れ目のない接続性と発展性について、意味付けが必要です。

(d) 訪問型学習のスタイル

訪問型学習は、概ね次のようなプログラムです。

①学習の機会 週1回～月1回 1回2時間程度

「コロナ」以後は、訪問型には限界があり、オンラインによる学習が中心となっている。

②訪問する学習支援員は、1名～2名 ボランティアや学生も同行している。同年代の学生の訪問は、喜ばれている。

③原則一対一の個別対応 一人一人に応じた個別プログラムによる展開である。

④プログラムは、おおむね次のように展開している。

はじまりのあいさつ ⇒ 歌(季節にちなんだ歌が多い) ⇒ 身体の取り組み

その人に応じた学び① ⇒ その人に応じた学び② ⇒ 終わりのあいさつ

⑤親御さんも、授業に参加し、本人を励まし、場を盛りあげ、その活動に共感している。

⑥入所施設の場合は、施設側の了解と理解が必要である。

(e) 学習支援員の役割と取り組みの姿勢

学習支援員の方々には、元特別支援学校の訪問教育担当など、その経験が、生かされています。学習支援員の役割は、①「学びのプロセスのデザイナー」⇒②「学びの伴走者」⇒③「学びの履歴の作成者」⇒④「関係をつなぐ者」(渡部淳「教師学びの演出家」一部改変)です。特に、学生一人一人は、多様ですので、一人一人に応じてきめ細かな配慮のもとにプログラムをデザインしているその実践は、「訪問カレッジ」ならではの素晴らしいものです。学習支援員の方々の実践等から、「訪問カレッジ」の取組の基本姿勢を、次のように考えています。

①本人が学ぶ「喜びや楽しさ」があり、成就感や自己肯定感を培う活動がある。

②五感をフルに活用して、本人自らの力で、取り組めるようにする。

③その取り組みで、本人が何を学ぶのか、明確になっている。

④「分かった!できた!」と自分で気づけるよう、自己選択・自己決定の活動を設定し、意思決定能力を育てている。

⑤学びは、本人が分かるシンプルな展開、活動内容を受け止めて、イメージをつくり易いスリムな内容、心に届くシンプルな言葉かけを心がける。

⑥自己有能感を持てるようにするために、できたことを認め、褒める、賞賛することを大切にする。

⑦声のトーン・リズム・スピード・声色・大きさ・柔らかさ等の表現の工夫をする。

⑧本人の困難性に目を向けて「できない」と捉えるのではなく、一人一人のもつ「よさ」や「可能性」に

目を向けること。

⑨「ありたい」「なりたい」という本人の「思い」や「願い」、「好きなこと」を尊重する。

⑩学びの内容は、本人の興味・関心や好みややりたいことを尊重しながら進める。

(f) 「訪問カレッジ」の学習を進めるにあたって留意すること

重い障害の方は、表出が困難であり、その表出方法は、一人一人異なります。本人の精一杯の微細な内面の表出に気づき、受け止め、返せることは、コミュニケーションの第一歩です。学修を進めるにあたって、次のことに留意しましょう。

①「訪問カレッジ」の学びは、その人、一人のものであり、他の誰とも取り換えることができないこと。したがって、個別のプログラムである。

②本人主体の取組とすること

③学びは、本人のペースで進めること。本人が分かることを尊重すること

④学びは、本人のその日の体調によって、柔軟に対応する

⑤親ごさんの願いや期待に寄り添えるプログラムとすること

⑥学校で学んだこととの継続性・発展性があること

⑦ライフステージに応じた内容であること

⑧季節感を盛り込むこと

⑨学びの履歴が明確になっていること～修了証・評価表

⑩スイッチの開発等表出・表現手段の獲得やコミュニケーション能力の可能性を意図的に行うこと

(g) 訪問型学習のプログラムの類型化の試み

「学びのかたちは無限大!」です。一人一人に応じた学びは、無限に広がっています。

その類型化は、やや困難な作業ですが、「カレッジ」或いは「大学」を謳う限り、類型化を試みる必要があります。当面の作業として、大学と同様な分類を試みたいと思っています。今後の研究・検討が必要と考えています。

【自然科学分野】	【人文科学分野】
物理学・化学 生活に身近な実験 科学 動物(好きな動物・恐竜等の古代の動物) 生物学 植物 栽培活動(野菜・草花・樹木) 天文学 宇宙や星空の学習 プラネタリウム 数学 ICT機器の活用(視線入力・スイッチ操作)	文学 読書活動(絵本の読み聞かせ) 創作活動(俳句・短歌・詩・絵本・小説) 外国語(英語) 哲学 宗教学 言語・コミュニケーション学(トーキングエイド・文字盤・視線入力による表現・メール操作・SNSの活用方法)
【社会科学分野】	【家政学分野】
社会学 政治学 経済学 心理学 地理(日本・世界～世界遺産) 歴史学(古代の歴史・時代の変遷 絵本による日本の歴史)	調理実習 栄養管理 摂食指導 手工芸 染色 物づくり 生花 縫製(ミシンでエプロンづくり)

【文化・芸術】 音楽 歌唱 器楽演奏 鑑賞 作曲 身体表現・ダンス 創作発表 美術 絵画 粘土 版画 シルクスクリーン 鑑賞 美術館巡り(オンライン) 書道 制作 鑑賞 演劇 映画鑑賞	【リハビリテーション分野】 身体訓練 感覚統合訓練 アロマセラピー スヌーズレン
【保健体育】 体操 健康管理 体への取り組み ボッチャ ハンドサッカー	【校外学習】 社会見学 自然観察

(2) 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム 実践記録

(a) 「訪問カレッジ@希林館」訪問記録例 支援員1名 自宅への訪問

①令和4年4月9日 14:30～16:30

新年度の学習がスタート。年間学習予定(シラバス)を渡し、学習内容を話しました。今年度のスタートは、多色刷り版画です。どういう順番で、何をするか。それはどうしてか等を説明しました。

①スチレン版画に凹をつけます。

ピエゾスイッチをマヒューにつなぎ、ボクシングロボットを動かしました。右目の上にセンサーを付けたのですが、操作に手間取っている様子でした。後でわかったのですが、目が痛くて、センサーを動かさづらかったようです。それでも、スチレンボードの版にボツボツ小さな穴がたくさんあきました。次に、電動肩叩きを操作し、車の型を使って凹跡をたくさんつけました。スイッチ操作と同時に、左手と一緒に動かして、鉄ブラシでボード版に跡もつけました。学習支援員との一緒に作業でも、自分で作業をしたという成就感がもてるようで、表情が柔らかくなります。

②色を使って刷る。

色選びは、黄色を選択。そして、それにゴールド(金色)を混ぜて色付けをしました。ローラも一緒に持ち、版に色を塗り、和紙に写し取りました。それを2枚刷り、そのうちの1枚に、波段ボールの素材に色付けをし、重ね刷りをしました。はじめは、何をするのか分かりづらく、意思表示が全くありませんでした。試しにやってみようと、誘い、重ね刷りをしてみました。その出来栄をお母さんから褒められると、目が大きく開き、俄然やる気になりました。一通りの過程を再体験したことで、作品作りの流れを見通せるようになったようです。それまでフリーズしていたように 反応が少なかったのが、口を良く動かし、感想を話してくれているかのようでした。「今日は、練習。次回またやるよ。」と伝えると、嬉しそうに笑顔も見られました。

②令和4年9月10日 14:30～16:30

学習内容は、前回染めた和紙を団扇に貼る活動と、新たにステンシルで和紙を染める活動です。

①団扇に貼り付けるために、水溶きボンドを筆につけ、左手で団扇に塗ります。

白い台紙に白い糊なので作業内容が確認しづらかったのですが、目を閉じずに活動しました。次に染めた和紙を貼り付け、一緒にてのひらで押さえつけました。さらに和紙を四角や丸の形に切り抜いたものを団扇と一緒に貼り付け完成させました。全体が薄い黄緑の涼しそうな団扇が出来ました。

②ステンシルで和紙に色付けをする。

今度は、ピエゾスイッチを右目の端につけてもらい、電動の肩叩き機を動かしました。ステンシルの上にカラースタンプのスポンジ土台を乗せ、スイッチ操作で機器を動かし、スタンプの土台を上から叩きます。はじめは、動かしませんでしたが、何度かやった結果をみせると、見通しがもてたらしく、スイッチを自分から動かすようになりました。特に、豪華な金色の操作の時には積極的に、お母様から「昔からお金持ち色が好き」と、笑われていました。

③令和4年9月24日 14:30~16:55

前回超電導リニアモーターカーに興味があるという情報を聞いたので、学習前に、折り紙のリニア玩具を見せ、学習意欲に働きかけました。それまで目をつぶって「勉強はしたくない」という態度でしたが、薄目を開け、組み立て玩具を確認している様子が有りました。

①布の染色の学習

色を抜くための糊をのせる活動をします。まずは、ピエゾスイッチを右目にけ、太鼓叩き機を動かします。トントンと動かし、1回ごとに糊が布に付着し、その部分が色止めをします。はじめは、あまりスイッチ操作をしませんでしたが、少ない操作を褒め、出来上がりが凄く良いことも褒めると、気持ちが前向きになって、積極的にスイッチ操作をしました。ラッチタイマーを使わなくても、自分から動かそうとしました。四角や楕円の面白い模様が出来ました。次に、指筆を左手中指につけ、布地の上に指で直接に糊を乗せていく活動をしました。指そのものの動きは、難しかったのですが、筆先につけた糊が布地に垂れ、流れ、しずくの模様になっていきました。これもまたお母さんと一緒に褒めると、目をしっかり開けて意欲的に活動しました。

②次の活動は、前回の続きで、多色染めをした和紙を団扇に貼り付ける活動です。

この辺りになると、口先が尖がってきてしまい、「いつリニアの玩具を組み立てるんだよ」「やると言ったじゃないか」と、あきらかに文句を言っている表情になってしまいました。「お父さんにあげる団扇をつくるという約束をしたでしょ」「せっかく紙染めをしたのだから、完成させよう」と必死に説得して、大急ぎで団扇の作業をしました。左手に糊の付いた筆を持ち、紙や団扇の土台に塗り、和紙を貼り付けていきました。本人の自力での作業というよりも、一緒に手を動かし作品を作っていく感じになりましたが、何とか完成させました。

③最後、リニアモーターカーの映像を観て、玩具を組み立てました。

細かく難しい所は大人の作業ですが、じっと目を開け興味津々でした。組み立てたりニアの立体を、満足そうな表情でみていました。

④令和4年12月10日 14:30~16:45

【スイッチを使って、クレヨンアートでの万華鏡作品づくり】

ピエゾスイッチを付けて、いつものようにマブスイッチを操作します。クレヨンの色は、オレンジ・ピンク・黄緑と2者択一の中で3色を目の動きで選び、決めました。ところが、この後、私が「スイッチスタート」と、声をかけると、口が尖がってしまって（不平・不満の意思表示）、学習活動拒否ポーズ。さて困りました。（多分、学習活動より、好きなリニアモーターカーの映像を先に見たいという心理のようです）いろいろ説得をして、再び学習のスタートです。「スイッチ。お願いします。」と声を掛けました。なんとか活動を再開しました。Oさんの意図でスイッチ操作をする様子が、初めの頃に比べると上手になりました。何とか3本を削ってクレヨンの粉を作りました。そして、それを和紙の上に散らします。一緒に入れ物をもってポンポンと叩き広げました。それを一緒にアイロンを手に持ち、溶かします。とりどりの色の用紙が出来上がりました。最後にアルミ板を丸めて、覗くと万華鏡のように先ほどの色に変化した景色を見せてくれました。Oさんに見せると少し目を開け確認している様子。お母さんにも見てもらい一緒に「綺麗」と褒めると、また目を開け確認していました。完成です。休憩タイム。約束のリニアモーターカーの映像を見せると、さっきの倍の大き目で目を見開いてみていました。疲れたようなのでベッドに移り、仰臥位の姿勢で、「宮沢賢治の朗読：セロ弾きのゴーシュ」を、振動するスピーカーを使って聴きました。この時には、表情も柔らかくなり、朗読をととてもよく聞いています。座位の機会が少ないので、出来るだけ座位での学習活動をと試みてきましたが、体力と相談しながら寝た姿勢での学習も必要かなとお母様と話しました。

今回は、クリスマス作品を作る約束をして終わりました。

⑤令和4年12月24日 13:30~17:00

会ったときから何か口元に微笑みが有ります。「何かいいことが有ったの?」と、聞くと目を開けて何か言いたそうな表情です。「通所先でビンゴ大会があって、なんと1等を当てたんです。賞品がこれ。」と代弁してくれました。しばし、祝福の賛辞。おめでとうと伝えると、嬉しそうでした。

①絵本の読み聞かせ

クリスマスイブにちなんで、関連する学習をすることにしました。

「一人ぼっちの子猫」の絵本を、パワーポイント画像にして、物語の進行にあわせて、ピエゾスイッチを操作して「それからどうしたの」という声を録音機から出し、物語の進行を催促するという学習です。物語は、日本語の次に英語の朗読を重ねました。いざ始めようとする、口を尖らせる「これ勉強したくない」のポーズが出ました。しばしお母さんと一緒に説得。その後で「仕方なくやるか」の表情。それでも、物語を朗読していくと、静かに聞いて、口尖がりポーズは無くなりました。でも、ピエゾスイッチは動かしません。朗読のいよいよクライマックス。主人公の猫が幸せになれる瞬間。すると、それまで無表情だったOさんが、突然、笑顔になり、しかもしきりに口を動かし、何か話をしています。全く興味を示さず、仕方なしに付き合っていると、思わせておいて、実は物語をよく聞いていて、可哀そうな主人公がハッピーエンドで終わった瞬間「良かった!本当に良かった!」という感情を出したのです。このことに逆に感激しました。

②宮沢賢治 「セロ弾きのゴーシュ」長岡輝子の朗読劇

朗読時間が長いこともあり、いつも途中で終わっていました。「今日は、思い切って全部聴こう」と、疲れないようにベッドに移動して臥位姿勢で聴きました。長い朗読ですし、画面が多様に変化するわけでもなく、長岡さんの独特な東北訛の語りに聞きなれないことも多くあるはずですが、ところがOさんは、今までにない目の表情と集中している様子を見せます。眩しくないように少し部屋を暗くしました。朗読に目を開け、聞き漏らすまいとしているようです。結局50分近くの時間を、じっと集中していました。終わっても、目を開け、余韻を楽しんでいるかのようでもありました。

(b) 訪問カレッジ Enjoy かながわ 訪問記録例

①令和4年10月27日(木)15:00~16:00 支援員:2人

- ①採血等頑張ったご褒美のマンゴー(マンゴージュース)を味わったことを、口元を動かしながら伝えられた。もぐもぐして食べる様子に母はとても嬉しかったとのこと。
- ②前回新聞紙を詰めたビニール袋に光沢のある赤色紙を途中まで貼った物との実物りんごを目を大きく開けて見ていた。赤色紙の剥離紙を挟んではりつけて完成できた。ハロウィンかぼちゃに口や目や鼻を貼って、りんごと一緒にフルーツバスケットに盛り完成。
- ③ウクレレの音に表情がよりはっきり。年末に向けて「よろこびのうた」の練習を始めた。付け爪をはめて先生と一弦ずつ弾いた。左手担当の先生が間違えると視線を向けてくることもあり、楽しく練習できた
- ④ティラノサウルスシリーズラスト「やさしさとおもいやり」今回も物語の展開に視線や表情で応えながら集中して楽しんでいました。シートの15冊目にもシールを貼り、全冊制覇に皆から拍手。

②令和4年11月30日(水)16:00~17:10 支援員:2人

学生の様子:①英文の手紙を訳しながら内容を確認し、第一次世界対戦で亡くなった人を思い出すためにポピーの花をつけるという内容から社会問題を学習した。内容を良く聞いていてSDGsは、以前も学習していたので特に興味を示していた。本人とお母さんが相談して書いたペンフレンドへの手紙を先生に託した。②箏がどういう形状かは分かっていなかったが、箏の音色は知っていた。春の海の曲は聞いたことがある様子だった。集中して演奏を聞いていた。

家族の様子:学びの実りのイベントで支援機器に出会い、これから使用を検討している。イベント終了後晴天の中、みなとみらいを散歩することも出来た。イベントに参加して本当に良かったとおっしゃっていた。

③令和5年1月20日(金)14:00~15:15 支援員 2人

- 学生の様子:①デザインは、恐竜を選択。今日は、自分でよりも支援員と一緒にやりたいとのこと。途中経過を、目を開けて確認していた。②詩はよく聞いており、終わると説明前にクリックしていた。③地球に接近しているZTF彗星について解説すると、知っているキーワードに「はーい」の返事がどんどん出てきた。④「動物園に行って、いちご狩りをしたい。」母が何度確認してもこれだそうだ。

●家族の様子：成人式について、写真を見せていただきながら、様子を伝えてくださった。羽織袴は本人に負担が少なく着やすいようにお母さまが改良したとのこと。

(c) 「T療育センターとのリモート」訪問記録例

①令和5年1月10日 14:00～14:30

(1) 折り紙制作

何を折るのかを聞いていなかったため、今年の干支のウサギを提案したが、本人は桜の花がおりたいと言っていた。私が折り方を知らないというので、次回でよいとのこと。折り紙の色は紫を選んだ。紫色が好きだと再確認。ウサギは簡単な折り方だが、介助の先生と一緒に折り目に力を入れて折っていた。出来上がって、顔を書いてもらったが、目鼻の位置は自分で考え、見本にはひげをつけたが、ない方がよいとのことにつけなかった。出来上がった折り紙は、私が用意した小さめの色紙に貼って出来上がりなので、私がセンターに色紙を届けて貼ると約束した。

(2) 音楽

今回も選曲はAさんに任せたが、歌謡曲を選んで、曲に合わせて、ツリーチャイムを鳴らしていた。鳴らすところは自分で考えていたようで、休むところ鳴らすところと区別していたようだ。ツリーチャイムはiPadのアプリを使用した。次回は、桜の花の折り紙、私が提案した俵万智さんの短歌、英語を学習することにした。通信に載っていたアート&ミュージックミュージアムの写真を見せて、説明する。周りの人の方が「すごいね」と言っていたが、本人の反応はわからなかった。

(d) 「訪問療育いるか」訪問記録例

①令和4年9月26日(月) 14:00～16:00

眠っていたが、お母さんと話している間に目を開けた。声をかけ、始めますヨという目パチパチさせてお返事をした。良くできました～とほめると、目をこちらに向けてじっと見ていた。次はお天気調べとテーマソングのどちらをやりたいか？と聞くと目を窓の方に移したので、天気調べをする。外は晴れて、明るい陽射しが首元まで照らしていた。「はれ」と「くもり」のペープサートを見せて聞くとすぐに「はれ」と目パチパチさせて返事をする。今日のスタートははっきりしてよい感じだったが、テーマソングを歌い終わる頃には目が細くなってしまう。それからは眠ったり、目を覚ましたり…覚醒できるようにとイヤな手のマッサージをすると、目を開けてくれたが、発作になることはなかった。続けますヨという目パチパチさせてお返事をした。「実りの秋」の話は、♪みのりの秋を歌うことから始めた。リズムカルな歌は好きなので、よく聴いていた。その後、絵本を見たり、フェイクのクリヤカキを見せながら話をした。見ているうちに又眠そうに目が閉じていく。2～3分位してハットと目が開いた時には、鮮やかな色の物を見せたり、リズム楽器を入れて歌を歌ったりした。その後起きていて、♪村まつりの歌を聴きながら、タンブリンの動きを見ていた。とんぼの赤や金色の折り紙をじっと見ていたので、見やすい所に貼り付けた。よく見ている。♪夕日の歌は、色セロファンを使った夕焼け空の

かけ絵を見せるとよく見て聴いていた。その後、訪問医が来られたので、おはなし絵本は、無しとした。今日は、眠たいこともあり、目や口の表出が少なかった

②令和4年10月1日 14:00～16:00

はじめ、お母さんと生涯学習のフォーラムの話をしていると、こちらに目を向け聴き入っていた。

話も終わり、近づいて声をかけると、視線を合わせて見ている。名前を呼ぶと、目をパチパチとさせて、お返事をした。ほめると、また目をパチパチとさせ、久しぶりに張り切ったスタートとなる。その後窓の方に目をやり、お天気調べをやる気です。外はどんよりとした空模様、「はれ」「くもり」のペープサートを交互に見せて聞くと、二度目に「くもり」で目をパチパチとさせる。少し、弱々しい返事だ。

テーマソングを歌うと、ペープサートを良く見て聴いている。終わりに近づくと、口角をモゴモゴと動かして歌っている。歌い終わると目をパチパチとさせて、終わりだと伝えた。今日は、しっかりと起きているので、表出も多く、楽しんでいるのを感じる。

10月はハロウィンで遊ぶことにした。まずは、ハロウィンの話をした後、キラキラモールの飾りつけや、折り紙のパンプキンやコウモリも見やすい位置に貼ると、よく見ている。光るパンプキン風船は目を見張って見ている。そして、Jさんも仮装メガネで変装し、子供になって「お菓子をくれなきゃ～いたずらするぞ」と言うと、大好きなコーラが飲めるよと伝える。一緒に言ってみよう!と誘い掛け、3回目では口角がモゴモゴと動き、目もパチパチさせたので、お母さんからコーラをスプーンで飲ませてもらう。コーラは久しぶりらしく、口角がピクピクと少し緊張気味だった。

今月の歌は何を歌う?と聞き、2曲の中から選んでもらう。直ぐに♪虫の声で目をパチパチする。曲の中で演奏するリズム楽器を一つずつ提示し、右手に持って一緒に音を出してみる。緊張しないようにゆっくり動かす。歌を聴きながら次々に変わっていくリズム楽器を見ている。曲の終わりに、目をパチパチさせていた。もう一回やりたいとリクエストもして、好きな曲を楽しんだ。2曲目は♪ドングリ坂のドングリ、3曲目は♪おどろろ・楽しいポーレチケを選び、ペープサートに目をやったり、一緒にリズム楽器をしたりして聴いていた。後の2曲は終わってから目のパチパチはなかった。お話し劇場は、落語絵本「めぐろのさんま」を読む。インパクトのある絵に目を大きくして見入っていた。読み方も声色を変え、リズムを付けてみた。読み終わった後の感想は、目をパチパチさせてよかった!と言っていた。(気に入らない時は、無言です)終わりに♪さよなら あんころもちの歌を歌う。その後、すぐ眠った。

③Jさんのお母さんの言葉

息子は感情や意思の表現が、余り周りに理解される形で出来ず、療育訪問のように個別で丁寧な繰り返しの時間の積み重ねがとても大切なのだと教わりました。それぞれその日のメニューで好きなこと、苦手なこともあると分かり、それなりの意思表示もしようとしているようです。いつも関わってくださる先生にしか分からない表情もありますが、好き嫌いも少しずつ表現して、楽しみにしているのが分かります。少しずつ本人の好きなこと(好きな声、好きな歌、好きなお話し、好きな音・・・)が増えていくことを息子も家族も楽しみにしています。

(e) ひまわり HomeCollege 活動記録

①令和4年10月22日

プログラム

13:00～あいさつ 日付と年齢の確認

13:10～新聞(日常のニュースを知り情報を得ることで視野を広げる)

13:20～書き写し(学生時代から継続のひらがな)

13:45～パズル(簡単なナンバープレース)

14:00～メニューとお金(商品の写真を見ながら金額を確認する)

14:20～仕事仲間の名前を覚える(顔写真を見て名前を書く)

14:45～スリーヒントゲーム

※学習は全て手話にて行う

- ①あいさつ: 日付の確認は毎回カレンダーを見ながらスムーズに行えるが、年齢を間違えることが多い。時間経過の認識が難しい様子。説明するとしっかり納得できるので、繰り返し確認したい。保護者によると、毎回活動を楽しみにしているとのこと。
- ②新聞: 毎回テレビで観た覚えのあるニュースを見つけては教えてくれる。今回は新国立競技場で観戦したサッカーの記事を見つけ、とても嬉しそうに伝えてくれた。
- ③書き写し: ひらがなの書き写しは学生時代から続けている学習なので、指示された量をスムーズにしっかりとこなせていた。字も大きくきれいに書けるようになってきている。保護者によると、書き写しに関しては、本人がやらなければいけないという意識があるので、活動が終わった後も、指示されることなく自ら書き写しの練習をしていることが多いとのこと。
- ④パズル: 今回初めて行った活動なので、最初はルールが理解できなかったが、後半はしっかり絵合わせができるようになっていた。最後はできたことへの満足感が見て取れた。
- ⑤メニューとお金: 実際に仕事で関わっている商品の写真と金額表を使って、商品の金額を理解する学習。買い物をするときにお金を支払うと言うことは理解しているが、机上では商品の写真と金額が一致しないことが多い。楽しそうに取り組んでいるが、継続しながら学習方法を工夫したい。
- ⑥スリーヒントゲーム: 二回目の活動と言うこともあり、当たる確率は半分程度だが、根気強く推測し、判断をしている。継続していくことで当たる確率は上がっていくと思われる。本人も、当たった時にはとても嬉そうな表情で、満足感もあるようなので、成功体験を積み重ねたい。
- ⑦家族の関り: 体調も良く、吸引等の心配もなかったなので、母子分離で自立した学習をしっかりと行っていた。

②令和4年11月20日

- ①あいさつ: この日もいつも通りやる気満々で表情良く挨拶ができた。時間経過の認識が難しかっためか年齢を間違えることが多いが、今回は正しく答えられた。理由ははっきりしないが、回を重ね

成功率を上げていきたい。保護者によると、今回は特にテンションが高く、いつも以上に楽しみにしていたとのこと。

- ②新聞：今回は皆既月食について手話で説明を受けた。実際に11月にあった皆既月食を見ていたので、とても集中し真剣に興味をもって説明を聞いていた。今後もできるだけ実体験に沿ったニュースを提供していきたい。
- ③書き写し：前回に続き字を大きくきれいに書けていた。書き写しに関しては、本人がやらなければいけないという意識があるので、今回も活動が終わった後、指示されることなく自ら書き写しの練習をしていたとのこと。
- ④パズル：前はなかなかルールが理解できなかったが、今回は最初からしっかり絵合わせができるようになっていた。パズルを作成するためのハサミを使う作業では、上手くしっかりとカードを切ることができていた。
- ⑤メニューとお金：実際に仕事で関わっている商品の写真と金額表を使って、商品の金額を理解する学習では、これまで商品の写真と金額が一致しないことが多かったが、今回はヒント無しで一致させることができた。買い物をするときにお金を支払うと言うことはきちんと理解しているので、継続しながら正解率を上げていきたい。
- ⑥仕事仲間の名前を覚える：顔写真と名前を見て書き写す学習では、しっかりと正しく書けるが、写真を見ただけでは名前を正確に伝えることはできない。日頃から名簿を見て名前を書く練習は行っているため、記憶するのに時間がかかりそうではあるが継続していきたい。
- ⑦スリーヒントゲーム：当たる確率は今回も半分程度だが、根気強く推測し、判断をしている様子は変わらない。継続していくことで当たる確率は上がっていくと思われる。今回テンションが高いせいか、当たった時にはガッツポーズを見せるほどの喜びようだった。
- ⑧家族の関り：今回も体調良く、母子分離で自立した学習をしっかりと行っていた。学習意欲を強く感じられる回になった。
- ⑨生涯学習も二年目に入り、難しかったことが少しずつできるようになってきて嬉しく思っている。

(f) Yさんが意欲的に学べるための訪問カレッジ@希林館のカリキュラム

①シラバス

1 前期(4月～9月)と後期(10月～2月)とする。

2 単位について

1 単位は90分×10回=900分(15時間) 15時間学習したら1単位とする。

※文化フェスタで「訪問カレッジ@希林館 単位修得証明書」を授与する。

3 訪問カレッジの学習内容(案)

・新年度に「学びたい学習内容」を以下の表から選び、学習を開始する。

・単位については、前期・後期それぞれで計算する。

※Yさんの学習は、30分毎に内容を変え、一回の訪問時にだいたい4領域を行っている。以下の学習内容は担当者が指導するのには難しい領域もあるが、いろいろアレンジしながら行う予定。

分野	科目	学習内容(例) ※今後詰めていく
自然科学	物理学	宇宙飛行士のニュース
	数学	生活費・小遣いの計算
	科学	日食、月食
	生物学	人体の構造。植物の観察
	コンピューター	伝の心の操作
社会科学	社会学	障害者問題(新聞の記事を参考)
	政治学	国会のニュース(新聞の記事を参考)
	経済学	自立生活と必要経費
	歴史学	日本史、世界史
	倫理学	思想家の名言など
	心理学	心とからだの健康
人文科学	文学	文学作品の鑑賞(DVDや朗読カセットを活用する)
	創作	体験したこと、考えたこと、を自分の言葉で文章表現する
	哲学	人生とは何か、倫理社会、有名な哲学者と言葉
	宗教学	世界の宗教について知る
	外国語	身近な英語 他
芸術	音楽(鑑賞含む)	いろいろな領域の音楽に触れる
	美術(鑑賞含む)	有名な画家の作品を観る(インターネット)
	創作	作曲やパソコンによる絵画制作
	演劇・映画鑑賞	DVDを活用して、気になる作品を観る
健康	体育実技 保健	身体への取り組み
選択科目	本人の希望	本人と相談して決める。

②令和2年9月15日(火)

①体の取り組み・始まりからゆったりしていたので肩を動かすことができた。

凸の方の背中やお腹をゆったり触れることができた。脚を持って、動かすことはできるが、首については触れるだけで、動かすところまで行っていない。

交感神経・副交感神経の話は、本人の体の状態がどちらが優位であったかを理解出来たと思う。

② 創作、文章表現、情報

「五郎」は句読点が少なく文章がなめらかで読みやすい、里子が自立した女性として描かれている点を評価すると笑顔が出ていた。さらに工夫が必要な点として「」{}が混在、借金の額(簡単に借金はできない)、主治医の呼び名について説明した。借金のルールは知らなかったとのこと。良い作

品を書くためにはいろいろな作品を鑑賞し、自分の中に蓄えることが大事であると話したが頷いていた。本人の希望を確認しDVD「イムジン河」貸し出した。伝の心のスイッチが接触不良?で注文したとのこと。

③所見

前回説明ができなかった、低気圧と高気圧の違いを密度のことで行った。

体の取り組みでは、ゆったりしているので、預けることから動かすことを中心に行うことができた。「イムジン河」を通して朝鮮半島の歴史を簡単に説明し「悲しくてやりきれない」の歌が生まれた背景についても触れた。韓国ドラマが好きで韓国旅行の経験があるので、関心を持って集中して聞いていた。物語を書きたい、との意欲に寄り添い、よりよい作品にするため必要な事について丁寧に具体的に説明していきたい。将来の自立生活などの相談をしたく、

③令和2年10月6日(火)

①体の取り組みと科学

手・足を触れると体がゆったりして、脈拍がゆっくりになった。授業の間に70台後半から50台後半になった。寝返りなどの姿勢変化ができなかったが、脚を持って、股関節や腰を動かすことができた。気象病については、気圧の変化を感じているので興味を持って聞いていた。

②創作、文章表現、情報

「五郎」での里子が自立した女性として描かれている点を再評価すると笑顔が出ていた。誤入力減らすためには読み直して正しい漢字を選ぶこと、間違いはすぐに訂正すること等を具体的に伝えると頷いていた。「あとがき」を自分で書く場合は「作者」の表現は避けたほうが良いとの説明にも納得していた。作品を鑑賞することが大事であることを意識しており、DVDの貸し出しの継続を希望した。伝の心の買い替えを申請し、市役所がすぐに対応してくれて10月7日に届く予定。とても嬉しそうであった。障害者総合支援法の学習とライフスタイルカルテの作成には非常に意欲的である。

③所見

体の取り組みでは、ゆったりしているので、預けることから動かすことを中心に行っている。ただし、いつも同じ方向を見ているので、首を動かすことは難しい。時間をかけて、首のリラックスと頭を預けることを取り組んでいきたい。

障害者総合支援法の制度を学習し、ライフスタイルカルテを記入することから始めようとの提案に希望を持ったようで、意欲的に受け止めていた。また、「伝の心」の更新の申請が認められたことで、行政への対応や要望の出し方などを具体的に学ぶことが出来て励みになった。



(g) 日野市障害者訪問学級 活動記録

①シラバス

①身体へのアプローチ

- ・ストレッチ: 普段動かさないところをほぐし、可動域を広げる (3~4回/年)
- ・音楽を聴きながら体を動かす: 身体をほぐすとともに音楽を楽しむ (3~4回/年)

②感覚 (五感) へのアプローチ

- ・動画をみる: 新たな関心ごとを発見する (6~8回/年)
- ・パズル: 最後まで完成させることで集中力、持続力を養う (3~6回/年)
- ・紙芝居・絵本を読む: ストーリーを追いながら発見したことを相手に伝える (3~6回/年)
- ・絵を描く、物を作る: 表現力と生み出す楽しみを知る (2回/年)

③コミュニケーションへのアプローチ

- ・イベントに参加: 地域住民との関わりを持つ (1回/年)
- ・お散歩: 身体を継続して動かすことや周りの人にも挨拶できること (1回/年)
- ・買い物: 物を選ぶこと、店員さんとのやりとりを持つこと (1回/年)
- ・報告ノートを講師に渡す: 役割を担うことで責任感を持つ (毎回)
- ・挨拶 (訪問時と帰り): 家族はもちろん、他者との関わり方を身に付ける (毎回)

②令和4年9月10日

1. 活動記録

①紙芝居を見る

Yさんの注目を引くよう、絵本でなく今回は紙芝居を用意。「働く車(ゴミ清掃車)」「アンパンマンとらくがき小僧」「どんぐりころころ」の3本用意してみる。最初に選んだものは働く車。集められたごみがクリーンセンターへ持って行ったその後を聞きながらいる。次に選んだのはアンパンマン。らくがき小僧によって顔に落書きされた友達の顔を見て笑ったり、らくがきに沿って指で追ってみたりしていた。

②動画をみる(・デザイン「あ」・ピタゴラスイッチのこんがらかっち)

デザイン「あ」は物の作業工程を追ったものだったが集中してよく見ている。普段から動画を自分で検索し、楽しんでいるが、今回をキッカケにデザイン「あ」を見るようになったとのこと。その後のこんがらかちはいろいろな動物が上下で分かれており、ルーレットで合体し、様々な動物が出来上がる内容。次に行うパズルの導入に向けての関心度を高める目的。

③パズル

パズルは2ピース、3, 4, 5ピースの4種類。車好きな〇〇さんに合わせて乗り物を提供してみる。2ピースは難なくクリアし、1ピースごとに時間をかけてゆっくり完成させてみる

2. 家族の関わり・感想

紙芝居は〇〇が好きな「車」と「アンパンマン」。どちらも興味を持って飽きることなく楽しく観ていました。動画は日頃から大好きで、しかもEテレもよく見ており、テンポも良く集中して見ているようでした。パズルも2ピースからスタート。以前私もパズルを買い、〇〇とやりましたがすぐに飽きてしまいました。先生の今回の授業と何が違うのか?と考えるところ、ピースが多いものを選んでいただけだと思いました。〇〇が出来たことを喜べるそんな時間が大事であることを感じました。

3. 講師より(その日の変化や成果)

紙芝居では乗り物好きなYさんは最初に働く車を選択する。写真も大きいこともあり、集中して聞くことが出来ていた。動画に対してもいつもより集中して見る事が出来ている。最後のパズルではこんがらかちのように2分割からスタート。2ピースは難なく成功させている。3ピースと徐々に1ピース増えるごとに考えてはめてみる姿もあった動画・パズルと集中力がしっかりと継続することが出来ていた。以前から動画が好きでYouTubeを自分で見ているのもあるが、関連の動画だけでなく、提案することで関心の幅を広げていくキッカケになっていくよう提案していきたいと思う。アンパンマンの紙芝居は気に入ってくださったようで、帰り際に自分のスマホでアンパンマンの主題歌をYouTubeで出して講師の腕をトントン叩いて「んーんー!」と指さして見せてくださった。次回もパズルは継続して行い、今回の様子と比較してみる。

③令和4年10月2日

1. 活動記録

①紙芝居を見る

今回は10月(ハロウィン)というのも意識して、アンパンマンシリーズ「アンパンマンとおばけちゃん」を選んで読んでみる。以前のらくがきこぞうの時にはらくがきに合わせて指でなぞる仕草があったが、今回はないのもあり、キャラクター達がどこにいるか指をさしてもらう。指でなぞっていた時の方が関心が強くあった。話の最後まで持続した集中力がみられなかった。次回の紙芝居選びのヒントとなった。

②動画をみる(・デザイン「あ」・ピタゴラスイッチのこんがらかっち)

今回はこの後のパズル導入においてこんがらかっちを2本視聴する。他の動画を見ようとする行動があるところから2本続けるより違うものが良い様子。お母さまより「デザイン「あ」を気に入って自分でも見ていました」とお聞きする。〇〇さん自身、音にとっても興味があり、CM や気象予報のタイトル音楽を繰り返し聴いているとのエピソードもあったので、次回は音について関心を持つような動画をセレクトしてみたいと思う。

③パズル

前回使用した乗り物パズルを使用。上下に分かれた2ピースはすぐに完成させることが出来ていた。3, 4, 5ピースは悩みながらではあるが特徴のある丸い突起部分を合わせようとしてみたり、パズルのピースではなく、台紙を回して合わせようと工夫する姿が見られた。

2. 家族の関わり・感想

紙芝居はアンパンマン。前回に比べると後半飽きてしまっているようでした。しかし、家だとこんなにゆっくりと〇〇とかかわって紙芝居や絵本を読んであげる時間もないので、本当に授業のありがたさを感じています

動画は前回の授業後も自分で観ていたりしました。デザイン「あ」を動画から出しては私に教えてくれたりしていました。パズルでは前回とちがう工夫が見られ、私自身も〇〇を知る良い時間となっています。

3. 講師より(その日の変化や成果)

前回のパズルの時より合わせ方が早くなり、合わせる際の工夫が増えているように感じた。紙芝居はアンパンマンであってもストーリーの関心度で変わることをアセスメントすることが出来た次回は視覚での楽しさや指をなぞるような関心度を上げられるようなものを選んでみたい。動画ではデザイン「あ」の関心が高いことから、違うストーリーや気象、音が面白い動画をセレクトして本人の関心度を計ってみようと思う。

④令和4年11月13日

1. 活動記録

①挨拶・今日の目的を話す

本日訪問すると外出に向けて少し興奮気味であった。すぐに出かけるのではなく、今日は外に買い物にでかけること出かける際には〇〇さんが普段使っているお財布、商品をいれるレジ袋を持ち出かける事を伝える。始めは電話に残された祖母の声を聴きながら徐々に興奮が落ち着いてくる。

出かける際のヘッドギアやマスクについては嫌がることなく付ける事が出来ている。母に行ってきたすの挨拶をして出かける。

②往路での様子

嬉しさが高まって、喜びながら大きな声が出ている。歩行に関しても問題なく、むしろどんどん歩いていく様子が見られた。途中分かれ道では〇〇さんに選択してもらおう。行き止まりで戻ることがあっても順応し、先ほど分かれ道だった場所まで行ってもう一つの道を進んでいく。始終手はつないでバランスをとって歩く。往復それぞれ一回ずつつないでいる手を変える。慣れた様子でつないでいる手を変えて歩いている。

③買い物をする

駅前コンビニに到着し、店内に入る。その際のアルコール消毒についても自分から近くに行って、手を出して消毒液を待つことが出来ていた。緑のかごを腕にかけて、コーヒーとサンドイッチそれぞれの場所に行き、好きなものを選ぶように伝える商品を倒したり、いくつも取ってしまうことなく、缶コーヒーは手前から1本、サンドイッチも迷うことなくこれ!と一つとって買い物かごへ入れていた。合計は430円。講師が530円を〇〇さんの財布から取り出し、店員さんに渡すよう伝え、しっかり渡すことが出来、お釣りの100円も自分で受け取って財布にしまうことが出来ていた。レシートを店員に渡そうとしたので欲しいと伝えるとはいと手渡す。ありがとうございますと一緒伝え、店を出た。

④帰りの道で電車を見学、帰宅

帰りは中央線が見える場所を通り、フェンスに貼られた電車の写真の前で撮影を提案すると、ちゃんはこちらに向き変えて撮影を行う。途中のベンチで一休みして電車を1本見送り、再び帰路へ。こちらもペースは行きと変わらずしっかり歩く事が出来ている。

途中で〇〇さんのうちはどちらですか?と質問すると、ママ、ママ、と自宅の方向を指さす。お母さんと呼ぶ際の「ママ」と呼ぶ感じとは違って「ま」で会話をしている感じでの「ママ、ママ」であった。家の横に止まる自転車にも「ママ」と「うちの車だよ」と教えてくれた。

⑤帰宅後お母さんに報告する

帰宅すると笑顔がさらに大きくなり、ただいまの表情をみせる。購入したサンドイッチとコーヒーを出すと、偉いでしょ、と言った感じで頭を撫でるよう手を持っていく。記録ノートを〇〇さんからいただき記入し、返す。帰る際に「ありがとうございました」と伝え、「はあい」とお辞儀しながら返事を返してくれた。

2. 家族の関わり・感想

買い物から帰ってきたときの〇〇の達成感にあふれた表情が本当にうれしかったです。つい、家だと、車でスーパーに行ってしまうので、近隣を歩いて買い物に行くという体験は〇〇にとっても新

鮮で楽しかったと思います。地域とのつながりが全くないので、これを機に少し近隣を歩いてみたいでしょうと思いました。

3. 講師より(その日の変化や成果)

買い物は初めての試みであったが、車いすを使うことなくペースも早いくらいにしっかり歩行が出来ていた。また、購入時も落ち着いて選んでカゴに入れる事が出来ている。

店員さんとのやり取りにも物怖じすることなく、逆にはしゃぎすぎてしまうこともなく、しっかりとしたやり取りが出来ていた。また歩行中の声掛けでは、写真を撮るのでこちらを向いてほしいことや家はどちらの方角かの問いに答える等、しっかりと対応であり、こちら側の伝えている事の理解がしっかり出来ている様子がうかがえる。これからも外出は挑戦していきたい。

(h) 学生の家族からの声

①「重い障害を持つ息子の学びの場（訪問カレッジ 希林館）」

息子(27歳)はNPO法人地域ケアさぽーと研究所の生涯学習支援「訪問カレッジ希林館」の学生として週1回、自宅で約2時間の授業を受けています。

人工呼吸器の装着や経管栄養の注入、気管切開など濃厚な医療ケアが必要で、体力的な問題もあり訪問カレッジを利用して7年目です。

学習内容は、体のリラクゼーションと紙すきや草木染、お菓子作りなど季節を感じられる「ものづくり」の体験です。原料や材料を実際に触れ感触を体で感じ、出来上がった作品を眺め達成感を味わっています。

ベッド上での限られた環境で作業を行いますが、支援者の工夫で、学びを楽しみ充実した時間を送っています。訪問カレッジとの出会いは、息子に生きる力を与えてくれました。そして、経験の積み重ねは息子にとっての財産です。現在、わずかな年会費はお支払していますが、運営は奉仕活動の状況です。

障害者本人のための生涯学習の機会が確立されたいことを願っています。

②重症心身障害者の潜在能力を伸ばす生涯学習(おおきなき)

重症心身障害の息子は今年30歳になります。青年期に入って体調が安定し、感情表現が豊かになり、周囲への興味や関わりたい意欲が高くなりました。その成長をさらに伸ばしてあげたいと思い、今まで経験してこなかった、視線入力に取り組んでみてはと考えました。

ところが指導を受ける場がありません。検索してやっと、訪問学級卒業生への生涯学習を行う活動と出会い、息子は視線入力の指導をしていただけることになりました。センサーとソフトを購入し、普段も取り組めるようにしました。2年間で、視線が画面内に集まるかどうかの状況から、画面内の対象物を追いかけて、2秒弱の注視ができるところまで進歩することができました。同時に、日常生活においても、アイコンタクトが取りやすくなり、耳を傾けて注意を払う様子だけでなく、見て注意を払う様子

を多く見かけるようになりました。成長期といわれる時期を、とうに過ぎた息子の進歩に家族も大変驚きました。

息子は自ら動いて探索することが困難です。必要な刺激や適切な教材を得られれば、見る力を伸ばせるのに、得ることができずに、力を眠らせていたのです。私は私で、息子には見る力がないと思い込んでいました。視線センサーという新しい技術は、息子の潜在能力を見出し、成長させてくれました。この経験を通して、重い障害があっても学習を続けられる環境があれば、成長し続けることができ、学び続けることはとても大切だと思うようになりました。

自分の力を伸ばして、より良い社会参加を実現することは、障害の有無にかかわらず、誰しも望むことではないでしょうか。生涯の学びの場は、新しいことに出会い、成長や夢を叶え、より豊かな人生を実現するために、重い障害を持つ人には特に必要なものと考えています。

③重症心身障害者生涯学習支援 ひまわりHomeCollegeの取り組み

改正教育基本法第3条では、『国民一人一人が自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。』とされており、「生涯学習の理念」として、生涯学習社会の実現に努めることが規定されています。

残念ながら、特別支援学校の訪問学級を卒業した生徒や、障害が進行したために生活介護事業所等への通所が難しくなり、在宅生活を送っている方々の学習の機会は、現在ほとんどありません。

NPO法人 ひまわり Project Team では、そのような方々の、生涯にわたり学び続けたいという夢や願いに応えるために、講師を自宅に派遣し生涯学習を支援しています。

以前、居住地の区役所に生涯学習の理解を求め、区の何らかの支援はないものかと話しに行ったことがあります。趣味や生きがいも目的として活動していると話すと、“支援を必要としている人達はたくさんいるのに、趣味や生きがいは二の次で贅沢だ”と、言われました。生きる力につながることを理解していただかず、とても残念でした。

今後、重症児が高等教育終了後も、学ぶ機会を持ち続け、地域や社会との接点を持ち、豊かな時間を過ごす事ができるようにするためには、行政の理解と協力が不可欠であり、その点が大きな課題だと考えています。

2. 人材育成

(1) 日野市障害者訪問学級

(a) 創設の1981年から2015年ころまで

①内部の人材育成（講師の研修）

日野市障害者訪問学級の草創期、授業を行う講師（以下、講師）は、日野市立七生中学校の訪問学級の講師経験者、養護学校の退職教員、その他それぞれの専門家（書道、手芸、英語など）が担い、訪問学級生の学びを支援してきた。

その他に、1981年～2015年までは近隣の明星大学のボランティアグループ“めばえの会”のメンバーが講師（以下、大学ボランティア講師）として参加していた。学級生と年齢的に近いことで、学級生も楽しく、また、大学ボランティア講師にとっても、福祉・教育専攻の良い経験を積む場として機能していた。福祉祭りや運動会、移動教室や遠足などにも参加し、学級の大きな力になっていた。特に毎年夏に行っていた移動教室（日野市の山の家「大成荘」利用などに1～2泊）では、大学ボランティア講師が4～5名参加し、大変活躍していただくとともに、学級生もとても楽しみにしていた。行事では、事前の打ち合わせと帰ってきた日の反省会に参加し、緊張と頑張りからお互いの成長を確認したものであった。また、「大学生は、保護者の方々から直接、お子さん（学級生）の性格や介助方法などを学ぶことができ、長い時間を一緒に過ごすことで、多くの学びを得た」（当時の学級新聞記事+40周年記念誌等から）と、後に障害福祉の仕事に就職した元大学ボランティア講師が述べている。



<移動教室の写真 2014年>

大学生ボランティアグループ内で学習会も行っていただいていたようだが、訪問学級としても年に2回以上、大学ボランティア講師と懇談会を開き、学級生の日常の訪問授業の内容などをアドバイスする機会も設け

ていた。東日本大震災の後、大学内で災害支援ボランティアが盛んになり、障害者支援のボランティアサークルが解散したため、2015年を最後に学生ボランティアの日野市障害者訪問学級への参加が無くなったのはとても残念である。

その他、2000年以前には、他障害の方から手話・点字を学んだり、社会見学として施設見学したりして、講師、学級生、学級生の保護者を対象にした研修会を実施していたこともある。

②外部の人材育成（講師募集の活動）

2007年から、市の教育委員会生涯学習課と共催で、「講師養成講座」を開催するようになった。内容としては「身体障害者の生活」「障害者の福祉制度について」「発達障害とは何か」「聴覚障害者の生活・簡単な手話を学ぶ」「重度障害者について」「発達障害について」「いのちのことづけ」など、障害に関する多岐にわたる学習的な内容も多く、研修会という位置付けが強かった。そのため一般市民の方にとっては参加へのハードルが高かったかもしれない。

(b) 現状（最近6年間）

①内部の人材育成（講師の研修など）

講師対象の研修会は、ここ数年は実施していないが、2019年と2022年の2回、講師懇談会を実施し、悩み相談や協議を行った。具体的には、毎回訪問した後に書く授業記録の形式、保護者と一緒に担当しているもう一人の講師との連携、年度末に学級生に渡す「あゆみ」を紙ベースからパソコンでの記入を可能にする方法などである。

日野市障害者訪問学級の講師は23名で、そのうち特別支援学校等の退職教員は6名、学校指導員・保育園など教育・医療・福祉関係者11名、市民講師（障害児の保護者も含み）6名となっている。特別支援学校での記録やあゆみなどの書式になじみのない講師もいるので、現在は各講師が書きやすい方法で作成しているが、具体例を出し合ってまとめていこうとしている。また、新規に講師になった方は、長年講師で活動している方とペアになるように組むことで、実践的な人材育成も考慮して設定している。



<ラインの授業 グラスハーブ実演動画>



<視線入力授業の様子動画>

コロナ禍で対面の授業が難しくなった時期(2020年から)に、訪問学級 LINE を作成して、講師、保護者 36 名が参加している。訪問学級 LINE に 4 分間弱の授業の動画を時折アップして、お互いに見合い、授業づくりの参考にしている。講師が授業(実演も含み)するもの、教材の使い方、学級生との授業の様子など、様々な情報交換をして学び合うことができている(現在も進行中)。

また、新しい講師を募集することが主な目的で開催している「講師養成講座」に、すでに講師として活動している人にも参加を呼び掛けて、研修の場になっている。

②外部の人材育成(新規講師募集)

年1回、日野市教育委員会生涯学習課と共催で、日野市障害者訪問学級の「講師養成講座」を実施している。日野市の広報や公民館、その他にチラシを置くなどして、広く市民に呼びかけることで、「講師養成講座」参加者から毎年数名、市民講師が生まれている。コロナ禍でオンラインを活用するなどして、対象が広がったことによる効果と考えている。

「講師養成講座」の内容は、訪問学級の授業事例の発表、工作や美術作品の教材紹介、映画「普通に死ぬ」の映画監督の講演、ICTによるコミュニケーション支援の実際、日野市の聴覚障害・視覚障害・肢体不自由の方々のお話し、など多岐にわたっている。2022年度からは、「講師養成講座」の名称を「ハートフルのサポーターの会」に変更し、多くの市民の参加を目指している。内容としては日野市障害者訪問学級の普段の授業の様子の発表と、ICTを使ったコミュニケーション支援(視線入力による学習例)を予定している。

日野市障害者訪問学級の講師には、特に資格を設定していない。本人の「障害者へのかかわりに意欲的であること」が唯一の条件となっている。実際に講師になっていただいて活動する中で必要なことはお伝えしていて、今のところ大きな問題はなく41年経過している。実際は福祉関係、看護師、支援学級指導員経験者など障害への理解の深い方が多く、訪問学級講師経験が10年以上の講師が7割近くとなっている。



2019年度の講師養成講座
訪問学級講師による学習の様子の発表



2020年度の講師養成講座
コロナ禍でオンラインによる映画監督の講演

(c) 今後の課題

①内部講師の人材育成

講師懇談会などの場での情報交換を通して、それぞれ持っている専門的知識や教材などを学び合い、それらの活動を通して組織全体として楽しく、有意義で継続的な人材育成ができるとういのではないかと話し合っている。日野市の場合は市民講師を大切に考えているので、さらに内容の充実も重要な課題となっている。

②外部の人材育成

2015年まで行っていた大学生ボランティア講師がとても良かった記憶をもっている保護者や講師も多い。今後、どこかの大学に働きかけて、ぜひとも参加して欲しいと考えている。

コロナ前の2018年と2019年、移動教室にボランティアとして理学療法士の養成学校から学生に参加してもらった。保護者の方が、お子さん(学級生)の治療に当たっている理学療法士に依頼し、その方が教員をしている理学療法士養成学校に働きかけてくださったことで実現した。反省会では、訪問学級と養成学校双方にとって大変に有意義だったと評価された。しかし、養成校との日程調整が難しいため、継続的な取り組みになっていない点が大変残念である。

今後、大学や養成校との継続的な取り組みにしていくためには、行事实施時期の日程調整だけでなく、参加形態の検討が必要と考えている。例えば、大学生や養成校の学生にとって、単なるボランティアとしてだけでなく、実習のような形で授業の一環として設定できないかなどである。日野市教育委員会生涯学習課の担当者も近隣大学に同行して、協力を求めることについて積極的な意向を持っているので、ぜひ来年度には実行に移したいと考えている。



<移動教室 2018年 理学療法士学生ボランティア2名参加>

(2) NPO 法人ひまわり Project Team

(a) 訪問型

20歳代の受講生の保護者から、本人の年齢に近い人たちと交流を持たせたいという希望があった。そこで、ひまわり Project の連携校で同じ新宿区内にある「日本福祉教育専門学校」の学生（以下、学生）に、特別支援学校の訪問学級の経験のある先生とペアで、「ひまわり HomeCollege」に専門学校の授業の一環として参加していただいた。

授業中はいつもより賑やかになり、受講生にとっては、このような活動を継続的に行うことによって、活動性も上がり、社会との接点をより広げる機会となった。また学生にとっては、社会に出てから即戦力になりやすいといった、障害者に関わるための人材育成と言う位置づけにもなり、双方にとって貴重な経験を積む機会となっている。なお、現在はコロナ禍のため、自宅への学生の派遣は行っていない。



(b) 集合型

新宿区立新宿養護学校をお借りして行っている共同学習では、大学や専門学校の学生の受け入れを2022年9月から開始した。参加する学生は、専門性の高い学生に絞っている。

現在参加している学生は、東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻1年生1名と、以前から新宿区内で連携を取っている医療福祉の専門学校「首都医校」から授業の一環として、毎回作業療法科と看護学科の学生4~5人に教員1~2名が同行する形で活動に参加していただいている。

参加する学生の動きの流れは以下の通り。


①活動前準備

- ・チェックリストにて体調チェック、検温手指消毒。
- ・参加する受講生の詳細が記載されている顔写真付きのカードを確認し、受講生の禁忌事項や好きな事・嫌いな事を確認。

ふじわら ももは
藤原 百葉



呼び名：ももちゃん・ももはさん
好きな事：音楽・スポーツ
嫌いな事：突然の大きな音・暗がり
注意事項：突然の大きな音で発作を誘発
SNS掲載：可
医療的ケア：胃ろう・吸引



☆ひまわり HomeCollege にご参加いただく皆様へ☆
セルフチェックのお願い

[ご参加いただく際は必ずマスクの着用をお願いします。](#)

当日以下にあてはまるものがあれば参加はご遠慮ください。

- ・ 37度以上の発熱（もしくは解熱剤の服用）
- ・ 数日以内の呼吸器症状・感冒症状（咳・咽頭痛など）
- ・ コロナ患者との1週間以内の接触
- ・ 同居人の発熱・呼吸器症状
- ・ 1週間以内の海外渡航歴
- ・ 1週間以内にイベントやカラオケ、家族以外との大人数での食事会に参加
- ・ 繁華街・歓楽街への頻繁な出入り

子どもたちの安全のため、ご協力よろしくお願いいたします。

・当日使用する用具の設置。

②活動中

- ・マンツーマンで受講生に付き添い、受講生に同行している保護者やヘルパーさんの助言を受けながら介助をする。
- ・同行の教員は学生のフォローに入りながら、作業療法に関する助言や、受講生の体調の変化を見守り、呼吸介助やスクイーミング等に入ることもある。

③撤収

- ・使用した道具の除菌。
- ・道具の片づけ。

共同学習は、人材育成という位置づけでもある。学生が参加している活動には、次の二つの活動がある。一つは、重症心身障害児者のための集団競技ハンドサッカーである。ハンドサッカーは、都立の特別支援学校では体育の授業や部活動で積極的に取り組んでいる競技であり、大きな大会も行われるため、目的意識をしっかりと持ちながら行える活動である。ここでの学生の役割は、ハンドサッカー競技を理解したうえで、障害の重い受講生たちがどのようにスポーツを楽しむかを、実際にゲーム形式の練習にも一緒に参加してもらうことで理解を深めてもらいながら、作業療法的視点から道具の調整やボールの投げ方の工夫を保護者やヘルパーさんと一緒に行っている。



ハンドサッカーの練習

二つ目の活動は、音楽療法である。2023年4月にひまわり HomeCollege に入学予定で、現在高等部の訪問学級に在籍中の生徒が、「スクーリングのような形で体調の良い時に共同学習にも参加できるように」と言う願いから活動を開始した。内容は、中学校・高等学校の音楽教師経験があり、生活介護事業所の音楽療法活動を長く続けている音楽療法士による音楽活動で、学習指導要領や療育を意識した内容にしている。ここでの学生の役割は、一緒に音楽を楽しむとともに、楽器の使い方や介助の仕方を保護者やヘルパーさんと一緒に検討である。まだ始まったばかりの活動なので、今後は回を重ねることで学生との関わり方を工夫したいと考えている。

以上のように、ひまわり HomeCollege の共同学習には、多くの学生が関わっているためとても活気があり、受講生の学習意欲や集中力も高く、充実した活動が行えている。今後も感染対策に取り組み、引き続き新宿養護学校や連携校と情報共有しながら、学生の受け入れを継続していきたいと考えている。

※ひまわり HomeCollege の利用者は全員重症心身障害者で、重度身体障害者の利用はありません。

※別事業の放課後活動『ひまわりHAUS』では専門性の高い学生の受け入れを始めて10年になる。

(3) NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会

2019年に訪問型学習支援事業を立ち上げる際に、事業発展の方向として次の3点を考慮した。

ア. 「学習支援員の研修体制の充実」

イ. 大学生の同行訪問を実現するための「大学との連携」

ウ. 神奈川県内に様々な学びの場が育つような「地域との連携」

これらは、人材育成の取組であり、その経過や課題を整理する。

(a) 学習支援員の研修体制

①現状(経過)

受講生の増加に伴い学習支援員の増強は必須である。学習支援員の増加と質の維持は、立ちあげの時点から課題として意識してきた。そこで、大学教授にスーパーバイザーを依頼し、年2～3回の全体打合せ(研修会)を設定した。また、訪問時の学習支援員は、2人体制とした。これにより、互いに切磋琢磨できることや、新人の学習支援員が先輩の学習支援員と訪問することが可能になる。受講生の様子や学習内容等を現場で伝えあうことができ、学習支援員チームがスムーズに形成できた。

訪問後は、受講者の様子や学習内容をメールアプリで報告し、学習支援員全員が情報の共有を図った。この訪問の記録は、受講生の学びの履歴であり、私たち「訪問カレッジ Enjoy かながわ」の財産となって学習支援員の助け・参考として活用している。2022年6月から、自由記載から項目を立て記載するように工夫した。そう

1	日付・時間	2022/11/7 (月) 10:30~11:30
2	支援員名	和田
3	学生の体調	体調は安定
4	カレッジの内容	①マッサージ ②りんごについて(種類、生産地、栽培の歴史など概要) ③読書
5	教具や教材	①近況報告をしながら和やかに会話しながら行う。②3種類の実物の手触りや香りを比べ確かめる。日本地図にシールを貼って産地を確認。③「りんごかもしれない」ヨシタケシンスケ
6	学生の様子	②りんごを顔に近づけるとミュージックピアノを鳴らし続ける。どのりんごにも強く反応。「りんごが好きなんだ! シャキシヤキのね!」とお母さん。③静かに聞いていた
7	家族の様子	楽しんで参加。単身赴任のお父さんがりんご2個買ってきてくれた話題など次々と
8	次回への引き継ぎ	
9	その他	

することで、読みやすくなり、記録としてもまとめやすくなり、それらを一覧表にすることで、そのまま学習記録集に編集できるようにした。

②今後の課題

現在は、県立特別支援学校教職時代の後輩に口コミで声をかけ学習支援員の数を確保している。今後は、卒業生の生涯学習支援を特別支援学校教員の退職後の地域貢献の一つとして位置づけられることが必要であり、そのためにも、特別支援学校との連携体制を充実する必要がある。また、現在は、再任用等の勤務を行う中で、休日ボランティアとして月1~2回学習支援員を担当しているケースが多く、今後、関わる人数は30名~40名と大規模化することが予想される。各受講生の支援チームの形成、Web会議等による日々の情報共有、年2~3回の全体会等の研修体制について一層充実していく必要がある。

(b) 大学との連携

「カレッジなのに同年代の語らいがない」ことは、事業立ち上げ時から気がかりであった。ベテラン教員の味とは異なる「今時」や「同世代との関り」も受講生に感じてほしいと考えていた。田園調布学園大学の鈴木文治先生がこの思いを受け止めてくださり、大学生の同行訪問の道が開けた。

①現状(経過)

後任の新井雅明先生は大学での展開を丁寧に考慮され、「訪問カレッジ」の周知のために、大学の公開講座やボランティア専門講座のテーマに「障害の重い人たちへの生涯学習支援」を取り上げてくださった。そして、学生の育成を、ゼミを中心に文献を通して障害の重い人と関わりあうための知識・技能を学び、教員になるための実践的資質を磨く場として訪問カレッジを活用する基本方針で臨まれた。2020年は新型コロナウイルス蔓延で訪問は開始できず、学習支援員が大学に行き、ゼミの学生に講義を行った。その後、ゼミ生が「ゼミ生紹介動画」を作成し、受講生に訪問を予告し、翌年の2021年から受講生のお宅への同行訪問が開始できた。その際のゼミ生の感想は、「最初は緊張から何を話せばいいかわからなかった」「2回目には、見えなかったものが分かってきた。瞬きで、はっきりと意思表示をしていることがわかった」「ゼミ生には支援員と後輩の二つの顔がある」等だった。その中で、多くの課題はあるもののこの喜びをつなげていくことを最優先課題とし、ゼミ生が継続的にできることとして主体的にサークル「Bonds」を結成し、後輩に引き継がれた。私たちの活動を彼らなりに理解し、継続の



道を切り開いてくれたことに心から感謝するとともに、彼ら学生の教員生活の原点に関わりを持ってたことは、学習支援員の喜びにもなっている。

②今後の課題

受講生の増加により、田園調布学園大学以外の他大学へのアプローチも必要になった。2022年に学生ボランティア（サポーター）募集案内パンフを作り、鎌倉女子大学の教員志望の学生に紹介していただいた。2名の学生から希望があり、事前に面接・事業説明を行い、その後同行訪問を体験してもらった。

また、今年度は11月に理解啓発活動として、「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」をパシフィコ横浜で開催した際に募集した学生ボランティアからも同行訪問の希望があり、今後、体験的に学習支援員との同行訪問の機会を設定する。大学生の同行訪問の間口が広がりつつある。

大学との連携には、この事業に賛同して頂ける教授陣が不可欠である。また学生は、時間に限りがある。多くの時間を大学生に求めることはできないが、体験的であろうとも、受講生とのかかわりは双方に意義があると考えている。障害の重い方とかかわりは、機会を設定しないと体験しにくいのが現実である。

また、今後も更に大学の公開講座や文化祭等に、色々な形で障害者の生涯学習支援について取り上げ広報していただく必要があり、そのことは広く人材育成に繋がると考えている。



2022年度
訪問カレッジ Enjoy かながわ
学生ボランティア（サポーター）募集

NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会

あなたも障害の重い方と一緒に学びを楽しんでみませんか？
ICTに関心のある方や楽器、読みきかせ、スポーツ、芸術など好きなことある方大歓迎です。気になる方は、ぜひ説明会にご参加ください。

■サポーター登録説明会

7月9日（土）
10:30~11:30

7月23日（土）
10:30~11:30

神奈川県社会福祉センター

1 住所
横浜市神奈川区反町3-17-2
1 アクセス
・東急東横線「反町駅」より徒歩1分

■お申込み方法
下記メールアドレス宛に、氏名、連絡先をご記入の上、説明会参加希望と連絡ください。

問い合わせ先
NPO法人 フュージョンコム神奈川
・県肢体不自由児協会
住所：〒221-0825 横浜市神奈川区反町3-17-2
神奈川県社会福祉センター5階
TEL：045-311-9742（10：00～18：00）
FAX：045-324-9986
Mail：jimukyoku@kenabikyoku.jp

「特別支援学校卒業後も学びたい」という思いに込め、3年前に「訪問カレッジ Enjoy かながわ」を立ち上げました。訪問教育のように自宅に向き、学習の機会を提供しています。特別支援の経験のある退職教員が学習支援員となり、3～4名でチームを組み、各家庭を訪問しています。学習の内容は、カレッジ生と支援員で相談し、お互いに学びを楽しんでいます。

大学生のサポーターの参加には、表情が輝き、同世代とのかわりを楽しんでいるのがわかります。大学生も「始めは緊張したが、少しずつ表情の変化がわかった」との感想もかれます。何より本人・家族が大学生の訪問を楽しみにしていることがわかり、感激したそうです。

活動に際しては、傷害保険に加入し、交通費相当額をお支払いします。

■訪問カレッジ事業とは？事業展開

生涯学習の訪問サービス事業として「訪問カレッジEnjoyかながわ」を立ち上げました。

その人らしく生きる支援

■訪問カレッジの授業風景

(c) 地域との連携

受講生を核に、それぞれで地域との連携を広げていくことを考えている。

①特別支援学校との連携

受講生の多くは高校2～3年生の進路決定の際に私たちの事業について知り、入学の相談を受ける事が多い。学校からの紹介のほか、保護者間の口コミ紹介もある。入学希望の方には、在学中に授業見学等を実施し、特別支援学校との引継ぎをしている。また卒業後のフォローアップとして、教員が訪問カレッジを見学する機会もある。2022年は、県内特別支援学校2校から教職員・PTA 対象とした、豊かな生き方の支援としての生涯学習支援事業について講演する機会を得た。今後は特別支援学校の中で、進路先の決定に留めず、豊かな生き方の支援として「生涯学習の支援」を積極的に醸成する必要があると考える。

②福祉との連携

受講生の数名は、サービス等利用計画の中に訪問カレッジが組み込まれ、モニタリングに参加している。また、訪問時にヘルパーさんも同席され、一緒に学びを盛り上げてくださる家庭もある。卒業後数年を経て、ケアマネジャーからの問い合わせもあり、障害の重い方の豊かな生き方の支援は、福祉の現場にも少しずつ浸透し始めている。2022年9月には重症児・者福祉医療施設「ソレイユ川崎」の入所者からも入学の希望があり、試行的に訪問を開始している。主体的な学びの時間として開始したが、施設の中に、この動きを取り入れようとする前向きな姿勢が感じられる。

③社会教育資源との連携

これまでも、バイオリン演奏に来ていただく方や、英語の勉強にイギリス在住の元教員をゲストティーチャーとして招いていた。今後は、更に地域で活躍されている方をゲストティーチャーとして招きたいと考えている。ゲストティーチャー習支援員がセットでゲストティーチャー各受講生が興味を持つ様々なゲストティーチャー触れることができる。得意分野を持つ人と受講者の興味関心のマッチングを、進めていきたいと考えている。2022年は、新たに一般社団法人「ピッカ」の協力を得て、学習支援員と「ピッカ」のメンバーの同行訪問を実現することができた。その時の様子をオンライン配信することで、受講生の横のつながりの形成できないかと考えている。

※ピッカとは：「福祉の現場に本物のエンターテインメントを！」を目的とした活動をより充実させ、且つ発展させる為に、レコード会社出身で音楽プロデューサーでもある岩永浩二氏（代表理事）と、音楽制作会社代表兼アーティストの JENI 氏（ジェニ）、音楽家の磯部玲子氏が理事の一般社団法人です。

また、社会教育資源の活用としては、学習場所の提供も検討している。現在、ランドリー喫茶を活用している受講生もあり、月1回の定期利用だが、地域に根付く感がある。自宅近くの公共施設の利用や、個別の校外学習など、コロナ禍収束後の展開が楽しみである。

さらに企業の社会貢献活動とのコラボレーションなど、連携先の拡大を図っていきたい。



<ピッカの JENI さんとの音楽とお話の会:Zoom で他の受講生も参加>

(4) 「人材育成」に関する考察

(a) はじめに

各訪問カレッジは毎年新しい受講生を受け入れていて、受講生は毎年増加している。これに対して学習支援員を十分に確保することが緊急に必要なようになってくる。

(b) 学習支援員の現状

学習支援員としてどのような人材で訪問カレッジを運営しているのかについて重度障害者生涯学習ネットワーク(*1)の中で調べてみると以下のように多くの訪問カレッジが特別支援学校元教員を採用していることがわかる。

	事業名	法人等事業者名	受講生数	発足年度	学習支援員数	学習支援員資格等	大学等の連携(ボラ)
①	日野市障害者訪問学級	日野市障害者問題を考える会	17名	1981年	23名	資格は無し。特別支援学校退職教員6名、福祉・教育・医療関連11名、市民6名	現在無し。過去に35年間あり(明星大学)
②	訪問療育 いるか	NPO 法人かすみ草	幼児13 成人2名	2011年	—	特別支援学校退職教員	—
③	訪問カレッジ@希林館	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所	19名	2012年	22名	特別支援学校退職教員	2名
④	ひまわり Home College	NPO 法人ひまわり Project Team	2名 集団6名	2013年	3名 3名	特別支援学校教員元+現特支教員・音楽療法士	大学生・専門学校生
⑤	訪問大学おおきなき	NPO 法人訪問大学おおきなき	10名	2014年	8名	特別支援学校退職者5名、福祉関係3名、	行事の時のみ
⑥	訪問事業 i.porte(あいぼると)	NPO 法人あいけあ	5名	2017年	2名	教育ボランティア(支援学校教員?)	—
⑦	訪問カレッジ静岡	静岡県障害者就労研究会	70名(集合型)	2018年	コア4名	大学教授・特別支援教員	大学ボラ20数
					13名	特別支援教員+元教員	
⑧	在宅訪問学習支援事業「SHJ学びサポート」	認定NPO法人スマイリングホスピタルジャパン	9名	2018年	6名	特別支援学校教員1名、退職教員2名、イラストレーター、音楽家、ST	—
⑨	みんなの大学校	一般社団法人みんなの大学校	—	2018年	—	大学講師、元支援学校教諭	ウェブ
⑩	訪問カレッジ Enjoy かながわ	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会	16名	2019年4月	21名—	特別支援学校退職教員	2 大学と連携(田園調布学園大、鎌倉女子大)
⑪	訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学	愛媛大学	20名?	2019年	—	大学教員、研修を受けたスタッフ	愛媛大学生
⑫	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	—	2021年	—	—	—

(お詫び:筆者の力及ばず不明部分一印しています。筆者)

学習支援員を特別支援学校退職教員で構成している訪問カレッジは多く、文科省の聞き取り調査の資料等(*2)でも、約8割以上のカレッジが特別支援学校の退職教員、中には現職の特別支援学校教員の協力を得ているところもある。

特別支援学校の退職教員であれば、医療的ケアを必要とする重度重複障害児者の受講生に対して、医療的な知識も身体介護の知識・技能もすでにある程度持っていて、その上で教育的な指導として適切な内容選択・教材準備などのノウハウを持っている。実際に受講生は障害の程度も様子も一人一人大きく

異なるので、そのような経験値をもってしてもその受講生に学びながら学習を準備しなければならないのが実情であるが、やはり一定の知識、ノウハウがあることは心強い。

①学習支援員に特別支援学校元教員を採用している訪問カレッジの例

フュージョンコムかながわは発足当初より、学習支援員の確保、増強、質の向上をめざして学習支援員は殆どが特別支援学校の退職教員で構成されている。今後増え続けていくと考えられる受講生に対しては、神奈川県の特設支援学校教員の退職後の地域貢献の一つとして位置づけられることが必要であると提言している。現在再任用等で学校勤務を行っている退職教員が、休日ボランティアとして月に1-2回学習支援員を担当しているケースが多いとのことであり、大変積極的に働きかけている点が注目される。

②特別支援学校教員以外の場合

1) 市民

一方で特別支援教育の経験者に限定すると、その数は限られていて、ロコミや友人などのつながりで運よく見つかることもあるが、なかなか難しい現実もある。そこで広く市民に呼び掛けて募ることも考えられる。しかし、初めてこのような受講生に出会うような市民の場合は、専門知識などを持っている場合でもなかなかすぐには学習支援員を引き受けることが難しい。そのため一般市民を学習支援員として参加を募る訪問カレッジは少ないのが実情である。(※1)(※2)

日野市では市の教育委員会が、障害者訪問学級(訪問カレッジ)を委託している「日野市障害者問題を考える会」と共催で、年に一回「講師養成講座」を15年以上実施して来ている。この講座に参加して学習支援員(講師)になる人が毎年何名かある。その方々をよく見てみると、福祉施設職員、保育園、学校の指導員経験がある人などが多く、実際に医療的ケアを持つ重度障害児者には初めてでも、そのことが大きなバリアーになっていない場合が多い。このような市民の参加に対して、受講生の保護者の中には、市民としての関わりを喜ぶ声もある。(※3)このような重度障害児者に対して慣れていない市民の学習支援員の場合は支援学校退職教員などとペアになり訪問することで重度障害についての知識などを現場で直接学んでいただくこともある。その意味ではオンザジョブトレーニングとでもいう研修となり、「人材育成」とも言えるかもしれない。

愛媛大学は、訪問カレッジのスタッフ募集というオンラインでの研修を企画して、それに参加して研修を受けた人をボランティアとして訪問カレッジのスタッフとして採用する活動を実施している。このような研修の提供は一つの人材育成の新しい形となるかもしれない。

http://treasure.ed.ehime-u.ac.jp/syogai_gakusyuu/wp-content/uploads/2021/09/07822af1e796eabeb7943c342fa8af03.pdf

2) 専門家

専門的な知識を持った人を定期的な学習支援員としてではなく「ゲストティーチャー」として参加してもらうという画期的な提案もフュージョンコムかながわから出ている。地域の芸術団体などとの連携という形へも発展させられる可能性が示唆されている。他の訪問カレッジでも音楽療法士やICT支援の専門家を随時依頼しているところがある。(※2)

今後、定期的に訪問する学習支援員の集団の外側に、それを支援する専門家集団が緩いつながりで存在してくれたら、受講生もそして学習支援員もとても心強いし、学びがより豊かになると期待が高まる。

3) 学生

重度障害者生涯学習の「人材育成」について考える時、上記 3 団体の例でもそれぞれの団体の成り立ちと規模等によって「人材育成」のとらえ方も少しずつ異なっているようであるが、共通して取り上げられているのは大学生・専門学校生などの若い人に体験的に参加してもらうことでの「人材育成」だ。この場合は即戦力になるということより、むしろ長期的な展望での人材の育成である。

ひまわり Home College では、発足当初より、大学および、専門学校に働きかけて、学生のボランティアを積極的に受け入れてきている。訪問カレッジの共同授業では大学の学生、作業療法士・看護師の専門学校の学生が参加して行い、個別の家庭へは福祉の専門学校の学生が通常の学習支援員に同行して訪問を実施している。この訪問の際に、学生が重度の障害を持った受講生に対する理解を深めたり、その受講生への学習支援員（講師・教員）の指導の実際を見学して学びを得たり、また直接に受講生に関わることで人間同士のやり取りの手ごたえを感じたりすることが、学生を人間として豊かにし、将来重度障害者に関わる人材への育成になっているということである。一方で、同時に受講生が同年代のボランティア学生との関りを貴重な経験として大変喜び、学習に意欲的になるという面ももつ。それは受講生の社会人としての人材を育成しているとも言え、双方向の「人材育成」と言えるかもしれない。

学生を育成しているのはそれぞれの訪問カレッジというよりは大学や専門学校であり、その育成に大きく協力しているというのが正確な理解であろう。また育成の主たる内容は受講生の存在であり、受講生と学習支援員が関わる密度と人間関係の温かさである。

重度の障害を持った受講生が、それぞれに異なる重度の身体状況の中でも興味関心を持ち続け、学習を希求する姿が根底にある。「生きることは学ぶこと。」という重度障害者生涯学習ネットワークのローガンがそれを表わしている。

(c) 学習支援員の学び

「人材育成」を、誰が誰を何のために、どのような活動でどのように育成するのか、を考えていくと、いろいろな形で実践されているのが実情であることがわかる。

人材育成は、出発は受講生のために人材をと考えを進めて来たが、その中で翻って学習支援員自身を育成する必要があることに気づき、そして地域を巻き込んで、地域社会を変えていく必要へと発展してきている。そのような広い「人材育成」の力を実は受講生自身が持っていることが見えてくる。それを一番よく知っているのが学習支援員であり、受講生に最初に育成されるのが実は学習支援員なのであるといえるかもしれない。

(d) 「人材育成」に関しての今後

前述の文科省の聞き取り調査（*2）のなかで、多くの訪問カレッジがあげている今後の課題二つのう

ちの一つが学習支援員の確保である。障害者の生涯学習を継続するための必須課題は次のようにいくつかの段階で考えられる。

①特別支援学校退職教員の協力

今後、重度障害者の生涯学習をより充実していくためには、学習支援員の確保、拡充、進化が欠かせない。特別支援学校の退職教員は即戦力として、この道の専門家としてぜひとも参加していただきたい人材である。そのためには、各地域の特別支援学校に働きかけて、その地域の重度障害者が生涯学習を希求しているというニーズを伝えて、それに対応していただけるように、退職教員の方のご協力を切にお願いしたい。

また、今後特別支援学校を卒業してくる受講生は、文科省の進めている GIGA 構想の中での教育を受けてくるので、ICT 機器利用の教育のニーズが高まることも想定される。特別支援学校の退職教員の学習支援員の中にも、その面での情報が十分ではないケースもあり、学習支援員自身が生涯学習としてお互いを育成していく必要も出てくるだろう。

②地域社会の理解と協力

前述のように地域によっては特別支援学校退職者だけに頼ることができないので、新たな人材を少しずつでも育成していかななくてはならない。そのために重度障害者へのかかわりに対して意欲的な市民に、例えば初めは「絵本読み」や「音楽鑑賞」のような参加しやすい活動からでも参加していただきながら、経験豊富な学習支援員から少しずつ重度障害者の身体状況、医療的ケア、精神発達の特徴なども伝えあっていけると良いのではないかと考える。このことは一朝一夕には難しいことであるが、それぞれの地域での重度障害児者の存在をまずは知っていただき、生涯学習の成果を発表することなどを通して、少しずつでも訪問カレッジを各地に広げていくような努力が必要だろう。今年の横浜での「アート&ミュージックミュージアム」のような大きなイベントではなくとも、地域のアート展への出展などもよいかもかもしれない。

③大学・専門学校等の理解と協力

かつて学生の時に、ボランティアで訪問カレッジを経験したことで、後に福祉施設に就労した元学生ボランティアの感想（日野市障害者訪問学級）にあるように、若い時期に短い間でも経験することが学生にとってはかけがえのない学びになっていることを再度確認しておきたい。

ひまわり Home College では「日本福祉教育専門学校」の学生に、特別支援学校の訪問学級の経験のある先生（学習支援員）とペアで、専門学校の授業の一環として（下線筆者）参加してもらっている、との事例がすでにある。単なるボランティアとして、一種の余暇活動という捉えではなく、例えば大学の教員養成課程の実習の選択肢に入れることや、心理学関係、福祉関係など他領域のゼミなどの活動として認定してもらうことなども要望していくことはできないだろうか。そのためには大学・専門学校の教授・スタッフの方々に重度の障害者の生涯学習についての現実を知っていただき、ご理解とご協力を要請したいと思う。

④社会全体からの理解と協力

この事業も含み、文科省が調査、研究事業を始められたことは大きな前進であることを評価しつつ、

さらに受講者の「声」を広く社会にお伝えいただき、様々な人の豊かに生きる共生社会を築くことを進める先頭に立っていただくことを、最後に強くお願いしておきたい。

*1 「医療的ケアが必要な重度障害者の生涯学習」理解推進パンフレット

*2 (令和3年度「生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究」に於ける

＜重度重複障害児者等の生涯学習に関する実態調査＞報告書 2022年4月)

*3 2022年「肢体不自由教育 9月号 256」生涯学習の基礎知識2 「社会教育としての障害者訪問学級四十周年を超えて」名取潮子 P.49

3. 運営・地域連携

(1) 先行事例の研究

第1回 連携協議会を以下の通り開催し、先行事例として日野市及び新宿区から報告いただいた。

1. 日時 令和4年7月31日(日曜日) 10:30~12:30

2. 開催方法・場所 会議室にて対面およびオンライン会議システム(Zoom)のハイブリッド会議

(1) 対面参加 会場名:安協サービスセンター 馬車道駅前 部屋:Room2

(住所 神奈川県横浜市中区元浜町4丁目36 みなとみらい線 馬車道駅徒歩1分)

(2) オンライン会議システム(Zoom)参加

3. 連携協議会名簿

	氏名	所属・役職	備考
委員	飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事長	
	白川 和彦	日野市教育委員会生涯学習課	
	石丸 明子	新宿区福祉部障害者福祉課支援係・主査	
	尾上 夏子	神奈川県教育委員会生涯学習部生涯学習課	
	磯部 恒雄	神奈川県特別支援学校校長会・武山養護学校長	
	小林 保子	鎌倉女子大学・教授	
	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
	奥野 康子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	
	山口 秀子	明治学院大学・非常勤講師	
	名里 晴美	社会福祉法人訪問の家・理事長	
	岩永 浩二	一般社団法人ピッカ・代表理事	
	橋詰 理香	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	
	小林 芳枝	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	
事務局	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	委員兼務
	奥野 康子	神奈川県立スポーツセンター・専門員	委員兼務
	山口 秀子	明治学院大学・非常勤講師	委員兼務
	片山由美子	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	
	下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	
	成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	
文科省	鈴木 規子	文部科学省障害者学習支援推進室長	
	今井敏之助	文部科学省障害者学習支援推進室第2係長	
	阿部 圭但	文部科学省障害者学習支援推進室第1係長	

3. 次第 司会:下川和洋(NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事)

(1) ご挨拶

①飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク代表)

②鈴木規子様(文部科学省障害者学習支援推進室長)

(2) 連携協議会委員のご紹介

(3) 協議事項 座長(案):山口秀子(明治学院大学・非常勤講師)

①訪問型生涯学習支援の紹介:「訪問カレッジ Enjoy かながわ」の取り組み

成田裕子(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長)

②本実践研究事業の概要と連携協議会で検討いただく内容

下川和洋(NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事)

③先進事例の紹介:

- ・東京都日野市の取り組み:白川和彦様(日野市教育委員会生涯学習課)
- ・東京都新宿区の取り組み:石丸明子様(新宿区福祉部障害者福祉課支援係)

④事業についての意見交換

(4) 当日資料

ア. 東京都日野市

令和4年度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
 重度医療的ケア対象の
 訪問型生涯学習支援に向けた実践研究

事例紹介
**東京都日野市の
 「日野市障害者訪問学級」**

日野市教育委員会生涯学習課 白川 和彦
 2022年7月31日

日野市障害者訪問学級について

事業の目的
 だれに:1人で外出することが困難で、義務教育や特別支援学校を卒業後も引き続き『学習したい』と意欲を持つ、市内在住及び入院中の障害者(長期間病気等の者も含む)
 どんなことをする:学級生に合わせた学習機会を設け、社会参加を促進することを目的とする

日野市障害者訪問学級について

国際障害者年最初の年 1981年(昭和56年)スタート

事業スタートの経緯

- ▶日野市立七生中学校「訪問学級」で学んでいた生徒の「卒業後も学び続けたい」という強い希望。
- ▶日野市が「日野市障害者問題を考える会」に委託し「日野市障害者訪問学級」が発足

日野市障害者訪問学級について

当初は、学級生 5名、講師 7名からスタート。

令和4年4月現在
 学級生 17名(女性8名、男性9名)
 医療的ケア・・・ 6名
 肢体不自由(車いす) 15名
 知的障害・・・ 16名
 18歳～45歳。平均年齢 30.2歳
 平成11年4月から学び続けている方も
 講師 23名(女性 16名、男性 7名。平均年齢59歳)

これまでの学級生は延べ約300名 講師は 延べ約420名

日野市障害者訪問学級について

学習内容

- *学級生・保護者の希望で年間に1つの講座を原則として学級生宅で。
- *教材や内容については、学級生・家族の意向をもとに、講師の創意工夫で。絵本の読み聞かせ、書道、図工、音楽鑑賞・演奏など。コミュニケーション支援も
- *プールや散歩、ショッピング、ハイキングなどの外出も。
- *受講料は無料。

学習の様子



日野市障害者訪問学級について

特徴 40年間、活動を継続している。

- *保護者の授業料負担がない
- *講師それぞれの「横のつながり」も大切にしている
 学級生1人に対して講師1人～3人で実施している。可能な範囲で個別の活動とならないように、「交流会」や「遠足」などのイベントをおこなっている。LINEを活用(コロナ禍の学習機会の保障)。
- *講師養成講座を年1回実施している
 年に1度、講座を開催。訪問学級のPRを行いながら新たな講師を増やすように努めている。
- *市担当者が年に1度自宅へ修了証をもって訪問し、障害理解につながっている。

交流会・遠足



講師養成講座

日野市障害者訪問学級について

これからの課題①

* 講師・スタッフの拡充が必要

- ・学級生と同年代の講師の力が、学習意欲向上のために重要。
- ・市内周辺の大学に声をかけて、若い力を取り入れたい。
- ・特別支援学校等でかかわった経験がある講師と合わせて、市民講師の養成にも力を入れていきたい。地域で活躍している皆さんに、訪問学級への力添えをいただけないか、事業のPRをしながら依頼する。

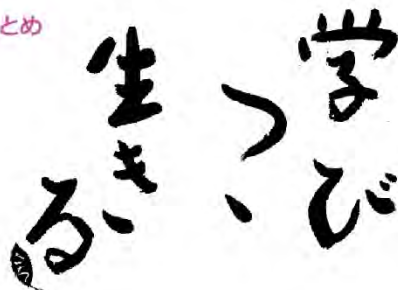
日野市障害者訪問学級について

これからの課題②

* 事業継続のために

- 現在、市の委託料から講師謝礼のほか、教材費、研修費、交流会費などを支出している。
- 学級生の増は講師謝礼の増となる。謝礼も市の委託料から支出しているが、限られた予算の中で、事業を継続していくための工夫が必要。現在、講師料、教材費、市としても、庁内で行われている同種事業との調整や国・都などの補助金を探し、活用するなど、事業を継続的に支援したい。

まとめ



Ⅰ. 東京都新宿区

令和4年度 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進
『重度医療的ケア対象の訪問型生涯学習支援』に向けた実践研究

第1回 連携協議会資料 令和4年7月31日

新宿区の重度医療的ケア児の支援体制について



新宿区福祉部障害者福祉課支援係主査
新宿区基幹相談支援センター
主任相談支援専門員
東京都医療的ケア児コーディネーター

石丸 明子

1 新宿区の障害者の状況

(1) 身体障害者手帳

身体に障害がある方が、身体障害者福祉法に定める障害程度に該当すると認められた場合に、本人の申請に基づいて交付しています。また、手帳は同法に定める各種の保護を受けるための証明となるものです。

手帳所持者数 (各年度4月1日現在 単位:人)

年度	合計	1級	2級	3級	4級	5級	6級
2	11,033	3,769	2,012	1,958	2,384	468	461
3	11,050	3,800	1,985	1,939	2,370	486	461
4	10,878	3,716	1,960	1,901	2,363	488	450

(2) 愛の手帳

知的障害者の保護と自立更生の奨励などを図るため、国の障害手帳に相当する手帳として東京都が交付しています。

18歳未満の方は東京都児童相談センター、18歳以上の方は東京都心身障害者福祉センターの判定が必要になります。

手帳所持者数 (各年度4月1日現在 単位:人)

年度	合計	1度	2度	3度	4度
2	1,717	65	356	393	873
3	1,744	66	337	387	894
4	1,790	66	405	399	920

【参考値】

(5) 重症心身障害児等在宅レスパイト等サービス

年度	申請者数 (人)	延利用回数 (回)
元	36	249
2	46	344
3	47	383

※各年度末日現在。ただし、令和3年度は令和4年2月末現在。

(3) 精神障害者保健福祉手帳

精神障害者の自立と社会参加の促進を図るため、一定の精神障害にある方が、精神保健福祉法に定める障害程度に該当すると認められた場合に、本人の申請に基づいて交付しています。

また、交付された手帳は、各種の支援を受けるための証明になります。

有効者数 (各年度3月末現在 単位:人)

年度	合計	1級	2級	3級
元	3,512	159	1,581	1,772
2	3,427	158	1,581	1,698
3	3,775	190	1,771	1,814

※精神障害者保健福祉手帳は、2年毎に精神障害の状況の認定を受けるため、手帳の有効者数はその有効者数となる。

2 日常生活における支援等の取り組み

(1) 日常生活における支援について（法第11条関係）

- ・医療的ケア児の保護者の就労を支援するために、従来の在宅レスパイト事業（休養目的の利用）に、就労目的の利用も追加します。
- ・障害児用の放課後ひろばを利用する障害児に対し、移動支援の利用を認めます。
- ・**自宅や屋外で生涯学習を利用する障害児・者に対し、移動支援の利用を認めます。**

(2) 相談体制の整備について（法第12条関係）

基幹相談支援センター及び子ども総合支援センターに、東京都医療的ケア児コーディネーターを配置し、保健センターと連携しながら、医療的ケア児及びその家族、その他の関係者からの各種の相談に対応しています。

(3) 情報の共有の促進について（法第13条関係）

新宿区医療的ケア児等支援関係機関連絡会を開催し、行政、医療、福祉、保健、当事者が一堂に会、顔が見える関係を作っています



3 障害者の生涯学習の取り組み

・新宿未来創造財団「レガス新宿」

- ・生涯学習の機会を提供、地域の活性化を支援する。歴史、文化、芸術、学習、スポーツ、子ども、多文化共生、地域などの幅広い内容の事業を総合的に行っている。
- ・障がい者支援事業（障がい者支援講座、イベント、新宿青年教室）
- ・障がい者スポーツデー（プール、卓球等）※施設開放、疑似体験講座

・新宿区立障害者福祉センター

- ・講座講習 絵手紙・料理・体操・パソコン等の講座の実施
- ・自主活動として音楽療法グループの運営

課題

ADL自立で、自分で参加する場所へ来られる人向けのプログラムがほとんど

4 移動支援の広がり

- (1) プール開放などを利用する際プール内に関しても、移動支援の利用を認める。
- (2) 移動支援にグループ支援を導入し、移動支援事業所企画のおでかけプログラムでの利用を認める。
- (3) 区立障害者福祉センターの講座や音楽療法に参加する際に移動支援の利用を認める。
- (4) ひまわりホームカレッジの活動に移動支援の利用を認める。
- (5) 区立障害者福祉センターの講座活動を、自宅でインターネットを通じて参加できるように体制を整備した。

※生涯学習の施策で補えない部分を、制度の運用で埋めていけないか、今後も利用者の声に耳を傾けていきたい。

(2) 自治体と民間団体が組織的に運営するための運営・地域連携モデル

1. 日時 令和5年2月18日(日曜日) 9:30~11:30

2. 開催方法・場所 会議室にて対面およびオンライン会議システム(Zoom)によるハイブリッド会議

(1) 対面参加 会場名:ウイリング横浜(ゆめおおおかオフィスタワー9階 研修室901

(住所 神奈川県横浜市港南区上大岡西 京急・市営地下鉄線 上大岡駅徒歩2分)

(2) オンライン会議システム(Zoom)参加

3. 連携協議会名簿

	氏名	所属・役職	備考
委員	飯野 順子	NPO法人地域ケアさぽーと研究所・理事長	
	白川 和彦	日野市教育委員会生涯学習課	オンライン
	石丸 明子	新宿区福祉部障害者福祉課支援係・主査	オンライン
	尾上 夏子	神奈川県教育委員会生涯学習部生涯学習課	
	磯部 恒雄	神奈川県特別支援学校校長会・武山養護学校長	
	小林 保子	鎌倉女子大学・教授	欠席
	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
	奥野 康子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	欠席
	山口 秀子	明治学院大学・非常勤講師	欠席
	名里 晴美	社会福祉法人訪問の家・理事長	
	岩永 浩二	一般社団法人ピッカ・代表理事	オンライン
	橋詰 理香	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン
小林 芳枝	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン	
事務局	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	委員兼務
	奥野 康子	神奈川県立スポーツセンター・専門員	委員兼務
	山口 秀子	明治学院大学・非常勤講師	委員兼務
	片山 由美	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	協議会記録
	下川 和洋	NPO法人地域ケアさぽーと研究所・理事	
	成田 裕子	NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	

3. 次第

(1) ご挨拶 司会:新井 雅明(田園調布学園大学)

飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク代表)

(2) 令和4年度文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究の報告書(概要)の説明

下川和洋(NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事)

(3) 協議事項

①訪問カレッジ Enjoy かながわの事業体制(モデル)について

成田裕子(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長)

②持続可能な事業運営について

・訪問型生涯学習地域連携リーフレット案について

片山由美(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会)

・持続可能な事業運営について

(4) 当日配付資料

①令和4年度文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究の報告書(概要)の説明

下川和洋(NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事)

1. 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム
5箇所の実践記録の分析
 訪問型学習は、概ね次のようなプログラム。
 (1) 学習の機会 週1回～月1回 1回2時間程度。「コロナ」以後は、オンラインによる学習である。
 (2) 訪問する学習支援員は、1名～2名
 (3) 原則一対一の個別対応 一人一人に応じた個別プログラムによる展開である。
 (4) プログラムは、おおむね次のように展開している。
 はじまりのあいさつ ⇒ 歌(季節にちなんだ歌が多い)
 ⇒ 身体の手組み ⇒ その人に応じた学び①
 ⇒ その人に応じた学び② ⇒ 終わりのあいさつ
 (5) 親御さんも、授業に参加し、本人を励まし、場を盛りあげ、その活動に共感している。
 (6) 入所施設の場合は、施設側の了解と理解が必要。

2. 人材育成
3団体「日野市障害者訪問学級」「NPO法人ひまわりProject Team」「NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」の取り組みの分析
ア. はじめに
イ. 学習支援員の現状
 ①学習支援員に特別支援学校元教員を採用している訪問カレッジの例
 ②特別支援学校教員以外の場合
ウ. 学習支援員の学び
エ. 「人材育成」に関しての今後
 ①特別支援学校退職教員の協力
 ②地域社会の理解と協力
 ③大学・専門学校等の理解と協力

3. 運営・地域連携
 (1) 先行事例の研究
ア. 東京都日野市
イ. 東京都新宿区
 (2) 自治体と民間団体が組織的に運営するための運営・地域連携モデル
ア. 神奈川における事業体制
イ. 運営・地域連携モデル
 仮称: 訪問型生涯学習地域連携パンフレット
 (3) 「運営・地域連携」に関する考察

4. 理解啓発
 (1) 訪問カレッジ「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」

 (2) 記録及びアンケート調査結果

 (n=103)

②神奈川における事業体制

訪問カレッジ Enjoy かながわの事業体制(モデル)について

成田裕子(NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長)

令和4年度 学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「重度医療的ケア対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究

第2回連携協議会



訪問型生涯学習支援の紹介 訪問カレッジEnjoyかながわ

<持続可能な事業運営について>

NPO法人フュージョンコムかながわ
・ 県肢体不自由児協会
成田 裕子

訪問カレッジenjoyかながわの事業の仕組み



- 年間授業料 5,000円
- 訪問時間 (60分~120分)
- 学習支援員 2名体制で訪問
(ニーズに応じて)
- 訪問回数 1~4回/月
- 訪問時間
10時~、10時半~、14時~、
15時~、16時~
- 訪問場所
自宅・病院・ラントリーキッサ

持続可能な事業運営について

- ① 主体的な学びを支える
学習支援員の体制
- ② 大学との連携
- ③ 地域との連携

学習支援員の現状・課題

<現状>

- ・ 特別支援学校退職教員で構成され、現在21名
- ・ 月1~6回のボランティア
- ・ 再任用者半数、介護等で在宅者半数

<課題>

- ・ 受講生の増加に伴う数の確保
- ・ 教員退職後の社会貢献活動としての認知の低さ
- ・ ゲストティーチャーの掘り起こし

2人体制・複数体制の意義

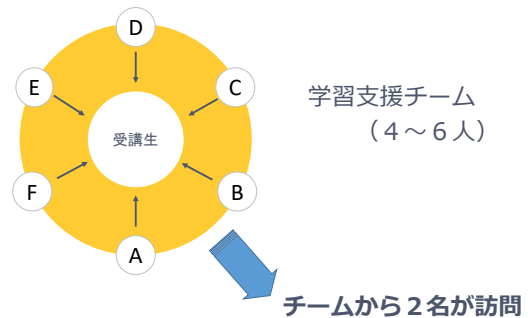
メリット

- ・ 受講生の主体的な学びへの対応
- ・ 学習内容・方法のバリエーションが増える
- ・ 新人やゲストティーチャー・大学生の受け入れ
- ・ 授業記録をとりやすく、互いに研鑽しやすい
- ・ 支援員の急な休みにも対応できる

デメリット

- ・ 運営費（謝金・交通費・教材費）がかかる
助成金が必要

① 主体的な学びを支える学習支援員の体制



② 大学との連携 (現状)

田園調布学園大学	鎌倉女子大学	明治学院大学
2019年から開始 ・ゼミ生へ説明会、 →カレッジ生へ ビデオレター	2022年開始 サポーター募集の案内を ゼミ生に配布してもらった	
2021年 ・訪問同行開始 ・大学生のサークル立ち上げ ・公開講座 (障害の重い人たちの生涯 学習支援の現状と課題)	希望者2名 ↓ 面接(カレッジの説明)	
2022年 ・ボランティア講座 ・大学祭を活用した学習 発表会	訪問同行開始	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 学びの実り 学生ボランティア </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 同行訪問開始 </div>		
2023年1月訪問同行開始		

同世代との関わりの効果

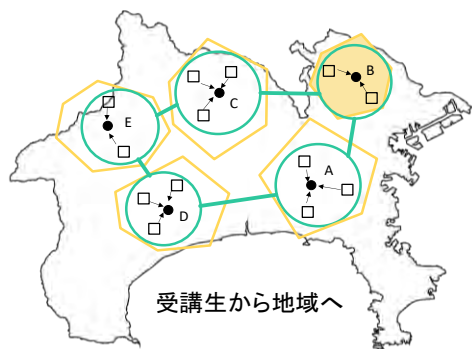
<カレッジ受講生・家族>

- ・ 同世代の関わりがなくとも楽しみにしている
- ・ 大学の様子や趣味などの話題の広がり
- ・ 今どきの風（外部の風）が新鮮

<大学生>

- ・ 障害の重い方の生活や家族と知り合う機会となる
- ・ 障害の重い方と初めて関わる体験となる
- ・ 自分の訪問（存在）を喜んでもらえる体験となる

③地域との連携



受講生から地域へ

・ 特別支援学校在学中の授業見学



・ サービス利用計画



・ 社団法人ピッカゲストティチャー



・ ランドリー喫茶の授業



・ 企業との連携



③地域との連携（現状）

1. 特別支援学校との連携
 - 引継ぎとフォローアップ ○理解啓発（講演）
2. 福祉との連携
 - サービス利用計画 ○授業同席 ○施設入所者
3. 社会教育資源との連携
 - ゲストティチャー（ピッカの活用） ○授業場所
4. 自治体との連携
 - 神奈川県（かながわボランティア基金21）3年間

③地域との連携の今後の方向性（協議）

1. 特別支援学校との連携
2. 福祉との連携
3. 社会教育資源との連携
4. 自治体との連携（協働事業へ）

イ. 運営・地域連携モデル 仮称: 訪問型生涯学習地域連携リーフレット

<A3 両面刷り 表面>

生涯学習を応援しよう

地域で生涯学習を応援するには

重度重複障害のある方は、自分で自分自身が学びたいことを表現するのが難しい人、地域の活動の場への参加には特別なサポートが必要の人など、学習のために支援が必要な人がほとんどです。地域には、障害のある方の生活を支援する人もいれば、学習や文化活動活動に関わる人もいます。関係者それぞれが持つ経験・協力を活かして、連携することで、多様な生涯学習の場を作ることが可能になります。

学生サポーターの活動

フュージョンコムかながわでは
サポーターを募集しています

- 特技があるという方
(楽器演奏/歌/読み聞かせ/書道/美術/手芸/短歌/ICT/等々)
- 地域の行事への参加を紹介できるという方
- 作品展示の場所を提供できるという方
- 一緒に文化祭を企画したいという方
- その他一緒にやってみたいアイデアがある方

地方自治体との連携例

- 日野市「日野市障害者訪問学校」
- 新宿区「障害者の生涯学習普及移動支援のサポート」
- 神奈川県「かながわボランティア活動推進 基金21」

一般社団法人「ピッカ」歌のプレゼント

セイコーエアソン(株)CSR:ファンタスカイ体感会

企業・大学等との連携例

- 企業のCSR活動との連携
- 大学や学校での公開講座
- ボランティア講座への協力

お問い合わせ先 NPO法人 フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会
 住 所: 〒221-0825 神奈川県横浜市神奈川区反町3-17-2 神奈川県社会福祉センター5F
 電 話: 045-311-8742 FAX: 045-324-8985
 メール: jimukyoku@kenshikyoku.jp
 URL: <http://www.kenshikyoku.jp/>

メール
HP

学ぶことは 生きること

生涯にわたって 学び続ける喜びを

令和4年度 文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」
～『重度医療的ケア対象の訪問型生涯学習支援』に向けた実践研究～

<A3 両面刷り 裏面>

(3) 「運営・地域連携」に関する考察

第2回の連携協議会での研究協議を踏まえて、この連携協議会の役割である「自治体が民間団体と組織的に連携して障害者の生涯学習支援に取り組むための組織体制づくりや連携方法」について、考察したい。その際に、成田理事長が報告した「訪問カレッジ Enjoy かながわの事業体制(モデル)について」で、まとめとして示された課題の「1. 特別支援学校との連携 2. 福祉との連携 3. 社会教育資源との連携 4. 自治体との連携(協働事業へ)」項目毎に述べていく。

(a) 特別支援学校との連携

「訪問カレッジ Enjoy かながわの事業体制(モデル)」では、引き継ぎとフォローアップ、「重度医療的ケア対象の訪問型生涯学習支援」についての啓蒙のための講演会を2022年度は行った。

協議の中では、特別支援学校卒業後の進路先の一つとして位置付けること、在学時の学習をその時限りではなく、生涯学習も見据えて行うことも大切という指摘があった。

「訪問カレッジ Enjoy かながわ」の支援員が特別支援学校の定年退職者が主であることから、特別支援学校が人材の供給源であるといえる。持続可能な「組織体制づくり」では欠かせない。

そのことを踏まえて、2022年度は横浜市立の特別支援学校に限られていた本事業の理解促進等のための講演等を県立や他の市立の特別支援学校にも広げていくことが必要である。

また、2022年度も行っていった引き継ぎについては、個別の支援計画や個別教育計画などの内容について

て学校と公式的に行えるようになると良いと思う。

その前提になるのは、協議にもあったように訪問教育を受けている生徒の卒後の進路先として認知されることである。そこで、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」のモデルケースについて特別支援学校での理解を促すことが重要になる。以降で触れる第2回の連携協議会で示したリーフレットはまさに時機を得たものといえる。

進路先として認知されることは大切なことであるが、一方で、生活介護などの福祉施設の進路先不足を安価に補う進路先になっては不本意である。あくまでも「重度医療的ケア者対象」で、生命維持上の理由から在宅を余儀なくされている方のニーズに応える進路先として位置づけるべきと考える。

(b) 福祉との連携

医療ケアを必要とする重度重複障害者の生活を長年支えてきた委員からは、訪問カレッジという仕組みができてきたということの評価するという発言があった。しかし、その仕組みは、ボランティアによって支えられている。持続可能な組織体制とするためには、いつまでもボランティア頼みという訳にはいかないのではないかという意見もあった。

このこととも関連して「サービス等利用計画」に訪問カレッジが入っていると良いという意見もあった。前項でも取り上げた特別支援学校卒業生の進路先の一つとして位置づけることとも関連があると思われる。

また、カレッジ生の保護者から「訪問看護などの利用範囲が広がり、本人から離れる時間が持てるとよいと願っている」という意見があった。背景には、カレッジ生の多くは、医療的ケアが欠かせない。にもかかわらず外出先には訪問看護師は、派遣されないので、常に医療ケアのできる家族の付き添いが必要になるということがある。この課題の解決としては、訪問看護の制度に柔軟性を持たせる、医療ケアの可能なヘルパーが付き添うことがあると思われる。さらに、重度訪問介護のサービス内容が広がるとよいという意見も出された。

11月に実施したフォーラムのシンポジウムでは、「教育」という言葉を使うと、途端に福祉サービスとは関係なく思われてしまうのではないかと指摘もあった。「学ぶことは、生きること」であり、生きる上で重要な事項である。そうであるならば、福祉の一環として取り組むことに支障はない。ボランティア頼みから脱するためには、なんらかの制度的な支援が欠かせず、そのためにも、理解者を増やしていく必要があると考える。

(c) 社会教育資源との連携

今年度(2022年度)には、プロの歌手の方が、訪問カレッジの支援員に同行して、歌を披露するということがあった。一般社団法人ピッカ・代表理事 岩永氏の協力により実現したものである。

筆者もその記録動画を拝見したが、感動して、思わず涙ぐむような歌唱であった。

11月のフォーラムでは、セイコーエプソン株式会社と連携して「ファンタスカー」による夢水族館の催しがあった。映像により解像度の高い水族館の動画を視聴するものであるが、映像を視聴するだけでなく、

映像を投射するスクリーンに触れることもできて、単なる映像の鑑賞を越える体験になった。

以上のように社会教育資源と連携することで、新たな体験を用意できて、学習を広げることにつながったといえる。今後は第二第三のピッカを探す必要がある。

そのためのヒントとして、委員から次のような事例の報告があった。「生涯学習センターに配架した11月のフォーラムのチラシを見てフォーラムに参加した方が、地域で障害のある人向けの造形教室を開催した」とそうである。このことは、障害のある人に提供したいものを持っている人、提供したいと思っている人が存在すること、また、チラシを見るなどのきっかけがあれば、行動につながるということを示唆している。

まず、訪問カレッジの存在と、そのカレッジで人財を必要としていることをそのような方々に伝えることによって、カレッジ生が社会教育資源にアクセスする機会を増やすことにもなると考える。

(d) 自治体との連携(協働事業へ)

この連携協議会の最も検討すべき事項は「自治体が民間団体と組織的に連携して障害者の生涯学習支援に取り組むための組織体制づくりや連携方法」である。

民間団体であり、事業主体である我々が、自治体に期待するのは関連する制度に関する情報提供と、金銭的な支援である。

まず、情報提供であるが、様々な関係自治体と協議をする中で、有益な情報を得ることができ、課題と解決の方向性を検討把握できた。今後も継続することで、さらに協議を深めることができると考える。福祉制度に精通している行政の担当者を今年度は依頼していなかったため、今後もこの連携協議会を継続するならばお招きしたいと考える。そのためにも「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」について、来年度も実施できるように申請することが必要である。

金銭的な支援については、事業主体の「フュージョンコムかながわ」は、神奈川県政策局が実施している基金21の支援を受けている。この助成金は、支援員の主な交通費等に充当されている。しかし、今年度で終了であり、今後の目途はたっていない。

カレッジ生も徐々に増えるであろうし、同時に支援員さんも増やす必要がある。「フュージョンコムかながわ」が持ち出す費用にも限界がある。行政による支援が強く望まれる。

委員から「医療的ケア児支援センター」を活用し連携していくとよいのではないか。」という助言があった。成田フュージョンコムかながわ理事長が参加しているということであるので周知とともに、何らかの示唆を得てくることが期待される。

その際、第2回の連携協議会で報告があったカレッジ紹介リーフレットが活用できるだろう。リーフレットは、カラー印刷なので、多くの人の目に留まるだろう。その際に、生涯学習センターや公民館に来られる一般の人が障害への関心の有無に関わらず手に取るような訴求力のあるデザインなどについてさらに工夫したい。

「学びのかたちは無限大」とあるように、訪問カレッジの可能性は、今後もさらに広がっていくことだろう。否、広げていかなくてはならない。そのためにも、訪問カレッジについてリーフレットとともに機会をとらえて周知して、行政と連携した組織体制づくりや連携方法を構築して確立することが不可欠である。

4. 理解啓発

(1) 「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」の概要

- 1 期日 令和4年11月25日(金)～27日(日)
- 2 会場 パシフィコ横浜 ノース2F ガーデンラウンジB・A・C
(〒220-0012 神奈川県横浜市 西区みなとみらい1-1-1)
- 3 主催 重度障害者・生涯学習ネットワーク ※文部科学省委託事業
- 4 後援 神奈川県 神奈川県教育委員会 横浜市教育委員会 川崎市 川崎市教育委員会 相模原市
- 5 対象 どなたでも参加できます
- 6 参加費 無料

7 目的

- (1) 国の障害者の生涯学習に関する施策の理解・啓発を推進する。
- (2) 学校卒業後の学びの機会と場の実際について周知し、その意義について理解を広める。
- (3) 学校卒業後の訪問型生涯学習の制度創設に向けた発信を行う。

8 開催日程と会場

日付	会場	午前(10:00-12:00)	午後(13:00-16:00)
1日目 11月25日(金)	ガーデンラウンジB		展示・支援機器
2日目 11月26日(土)	ガーデンラウンジB	展示・支援機器	展示・支援機器
3日目 11月27日(日)	ガーデンラウンジB	展示・支援機器	展示・支援機器(-15:00)
	ガーデンラウンジA	フォーラム第1部	フォーラム第2部(-15:30)
	G214	ファンタスカー体験会(11:00～15:00)	
	ガーデンラウンジC	休憩室	

9 内容

(1) 展示部門:定員なし・事前申込み不要

訪問型生涯学習支援等に取り組む会員団体の紹介と学生の学びをポスターと作品等で紹介します。

(2) 支援機器体験部門:定員なし・事前申込み不要

学生が学びの中で使用している支援機器、教材や玩具等を、会場で体験できます。

<出展業者、団体等>

日付	午前(10:00-12:00)	午後(13:00-16:00) 3日目(-15:00)
1日目 11月25日(金)		アップイット、ダブル技研、ライフハック、ICT 救助隊、スマイリングホスピタルジャパン学びサポート、おおきなき、山ねこ工作室
2日目 11月26日(土)	アップイット、オフィス結アジア、ダブル技研、ライフハック、ICT 救助隊、あっきーの教材工房、ST@、スマイリングホスピタルジャパン学びサポ-	アップイット、オフィス結アジア、ダブル技研、ライフハック、ICT 救助隊、あっきーの教材工房、ST@、スマイリングホスピタルジャパン学びサポート、おおきなき、山ねこエ

	ト、おおきなき、山ねこ工作室	作室
3日目 11月27日(日)	アップイト、オフィス結アジア、ダブル技研、ユープラス、ライフハック、ICT 救助隊、あっきーの教材工房、ST@、スマイリングホスピタルジャパン学びサポート、おおきなき、山ねこ工作室	アップイト、オフィス結アジア、ダブル技研、ユープラス、ライフハック、ICT 救助隊、あっきーの教材工房、ST@、スマイリングホスピタルジャパン学びサポート、おおきなき、山ねこ工作室

(3) オンライン参加部門

1. オンライン見学(バーチャル・ウォーク):定員 ①~⑤の各時間帯 3名募集します。要事前申込み。
外出困難や遠方のために会場への参加が困難な障害児者に対してオンラインで自宅等と会場を結び、イベント会場を散策していただきます。(PC やタブレット、スマホ等で Zoom 可能な方限定。)

日付	午前(11:00-12:00)	午後(13:00-15:00)
1日目 11月25日(金)		①13:00-13:30 ②14:00-14:30
2日目 11月26日(土)	③11:00-11:30	④13:00-13:30 ⑤14:00-14:30

2. オンラインお仕事体験:定員①~④の各時間帯 1名募集します。要事前申込み。
分身ロボット「OriHime」を用いて遠隔から会場に来られた方の受付や案内のお仕事を体験します。(iPad をお持ちの方限定。事前に iPad の設定の方法をお知らせします。)

日付	午前(10:00-12:00)	午後(13:00-15:00)
2日目 11月26日(土)	①10:00-12:00	②13:00-15:00
3日目 11月27日(日)	③10:00-12:00	④13:00-15:00

(4) 第3回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム

会場とオンラインのハイブリッド開催。会場参加もオンライン参加も事前に申し込みください。定員は会場参加 30名、オンライン参加 300名。お申込の方には Zoom ミーティング URL をお知らせします。
<第1部>学生発表と体験会:学生の学びの発表と映像音楽等を用いた重度障害者が楽しめる企画

1. 日時 11月27日(日) 午前 10:00~12:00

2. 内容 司会 成田裕子(FC かながわ 県肢体不自由協会・理事長)

①オープニングビデオ:ネットワーク会員団体の学生の学びの様子のダイジェスト

②挨拶 飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク代表)

鈴木規子様(文部科学省 総合教育政策局 障害者学習支援推進室長)

③来賓紹介

④学生紹介①オンライン西から東へ(リレートーク):各地で学ぶ学生がオンラインで自己紹介

学生紹介②会場から :会場に来られた学生の紹介

⑤ファンタスカー体験会(11時に G214 へ移動)(12:00~15:00 は申込み不要)

ファンタスカーは移動できるプロジェクションカー。ゆめ水族園の会場に移動することが難しい方々のお部屋に「ゆめ水族園」をお届けしています。どこにでも移動ができて、電源を入れてスイッチを押すだけで、いつものお部屋がゆめの世界に。ファンタスカーがずらりと勢ぞろいするのは、初の試み。

<第2部>シンポジウム:訪問型学習支援事業の持続可能な制度創設に向けたディスカッション

コンセプト: 制度化するためには、何よりも訪問型学習支援事業を広げることが大前提です。ニーズは、全国にあります。そのニーズにこたえる事業の立ち上げの参考になるように、神奈川モデルを発信します。

司会 山口秀子(明治学院大学) ※以下敬称略

1. 日時 11月27日(日) 午後 13:00~15:30 150分(休憩含む)

2. テーマ 訪問型生涯学習支援事業の制度創設に向けて

~持続可能な訪問型生涯学習支援するために「かながわモデル」の提案~

3. 神奈川モデルの発表

(1) 本人の想い 家族の想い 朝比奈和子(カレッジ生家族)

(2) 創設者 成田裕子(FC かながわ 県肢体不自由協会・理事長)

(3) 支援者 奥野康子(神奈川県立スポーツセンター・専門員)

(4) 大学 新井雅明(田園調布学園大学人間福祉学部心理福祉学科・教授)

<10分休憩>

4. 基調講演 「訪問型生涯学習支援の意義と制度創設に向けた課題」 松田 直(元群馬大学教授)

5. シンポジウム 「訪問型学習支援『かながわモデル』の特徴と課題」

(1) セイコーエプソン株式会社 ゆめ水族園担当

(2) 名里晴美(社会福祉法人訪問の家・理事長)

(3) 岡安 玲(NPO 法人あいけあ・理事長)

(4) 以上3名と発表者4名による協議

(2) 「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」開催結果

(a) 参加者数

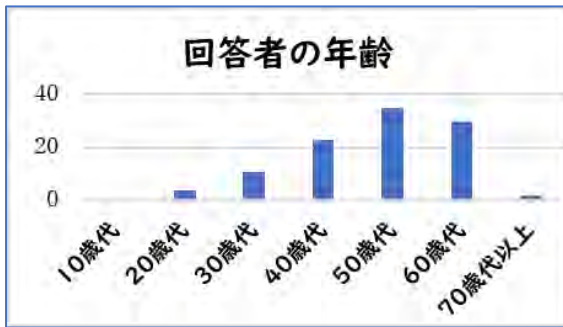
日付	参加形態	参加者数
1日目 11月25日(金)	会場対面	障害児者3 保護者・付添5 関係者27
2日目 11月26日(土)	会場対面	障害児者4 保護者・付添5 関係者52
3日目 11月27日(日)	会場対面	障害児者30 保護者・付添40 関係者76 ボランティア18
	オンライン	70
合計		330名(会場対面のべ260 オンライン70)

(b) 「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」参加者アンケート結果

11月25日(金)から12月3日(土)の期間、Google フォームを利用して回答。開催期間中はアンケート用紙による回答も受け付けた。回答数 103。

問1 回答者についてお答えください。

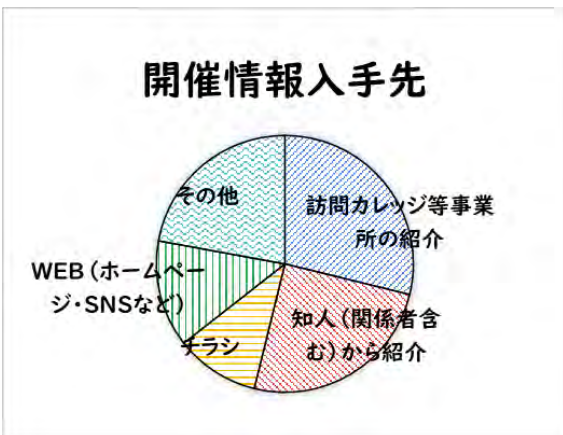
(1) 年齢 (n=103)



(2) 所属(ひとつ選択) (n=103)

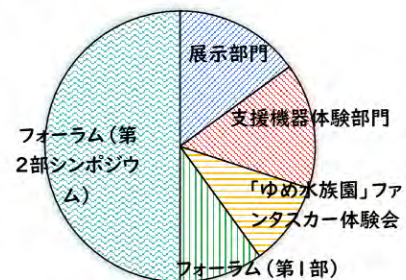
訪問カレッジの学生	1
訪問カレッジ生の家族	10
訪問カレッジ関係者(支援者等)	12
学生(中学生)	0
学生(高校生)	0
学生(大学生等)	3
教員等学校関係者(小学校)	0
教員等学校関係者(中学校)	0
教員等学校関係者(高等学校)	0
教員等学校関係者(特別支援学校)	23
教員等学校関係者(大学等)	3
支援機関関係者	18
行政機関関係者	6
企業関係者	0
一般市民	7
その他	22

問2 本イベントの開催をどのようにお知りになりましたか。あてはまるもの全てを選んでください。(n=102)



問3 本イベントで、参加・見学・体験(直接・間接を問わず)したものを全て選んでください。(n=101)

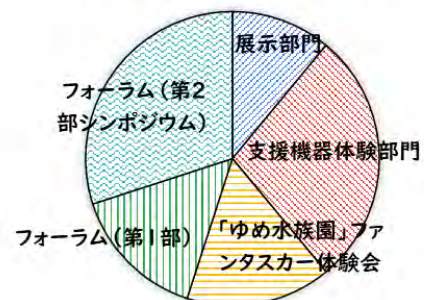
参加したイベント



問4 本イベントで、「一番興味をもった内容」は何でしたか?(参加、不参加問わず。一つ選んでください。)

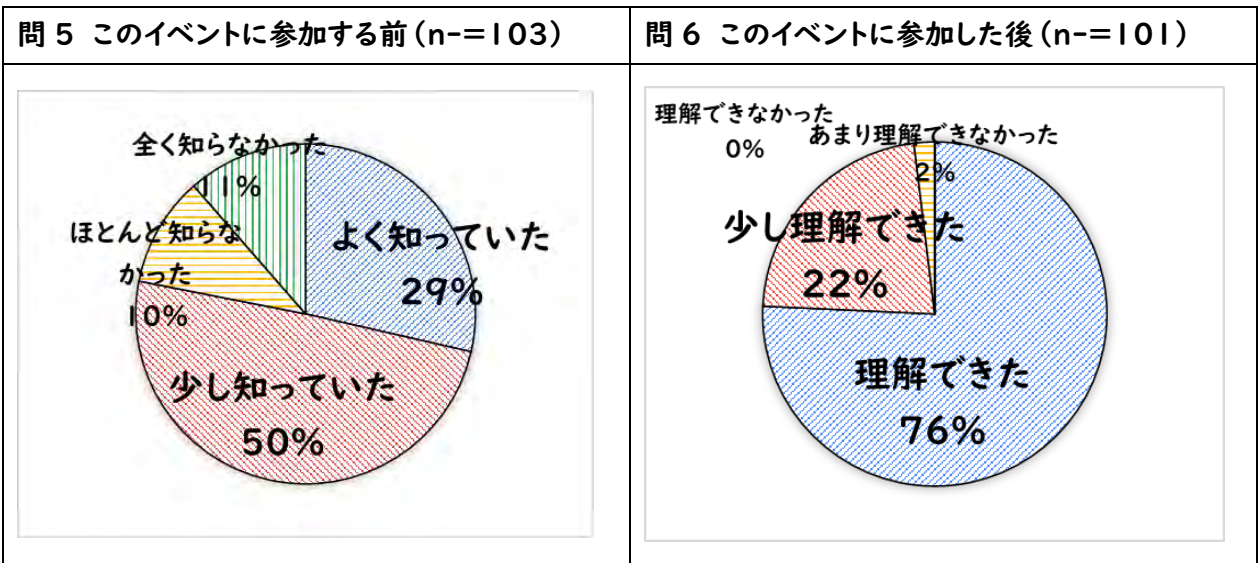
(n=100)

興味を持った内容

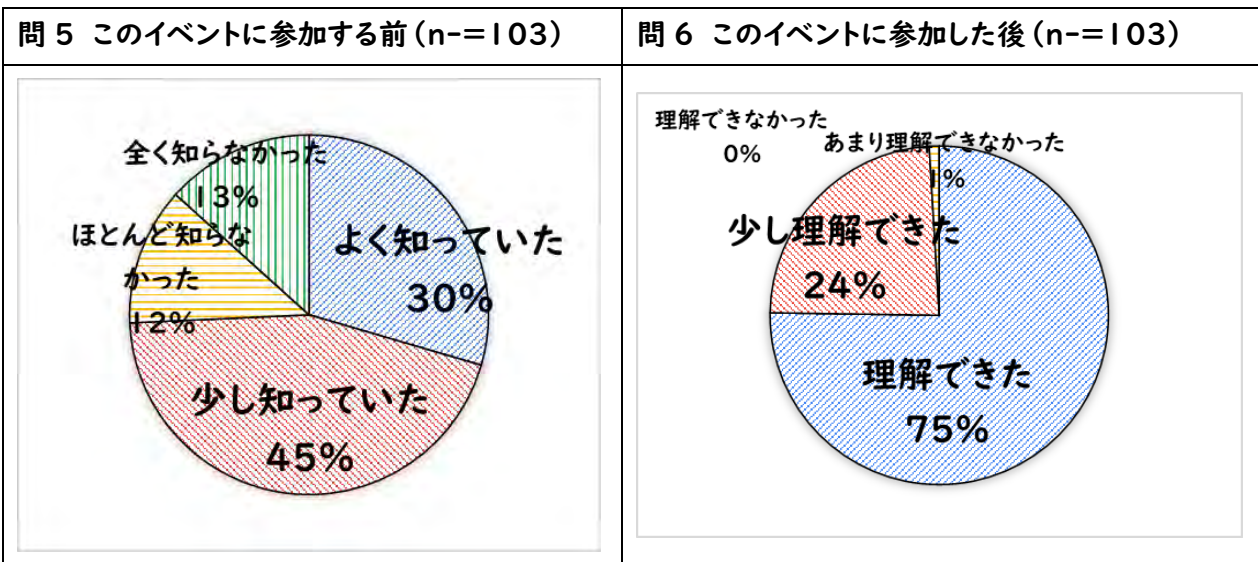


問5・問6 このイベントに参加する前と参加後における違い

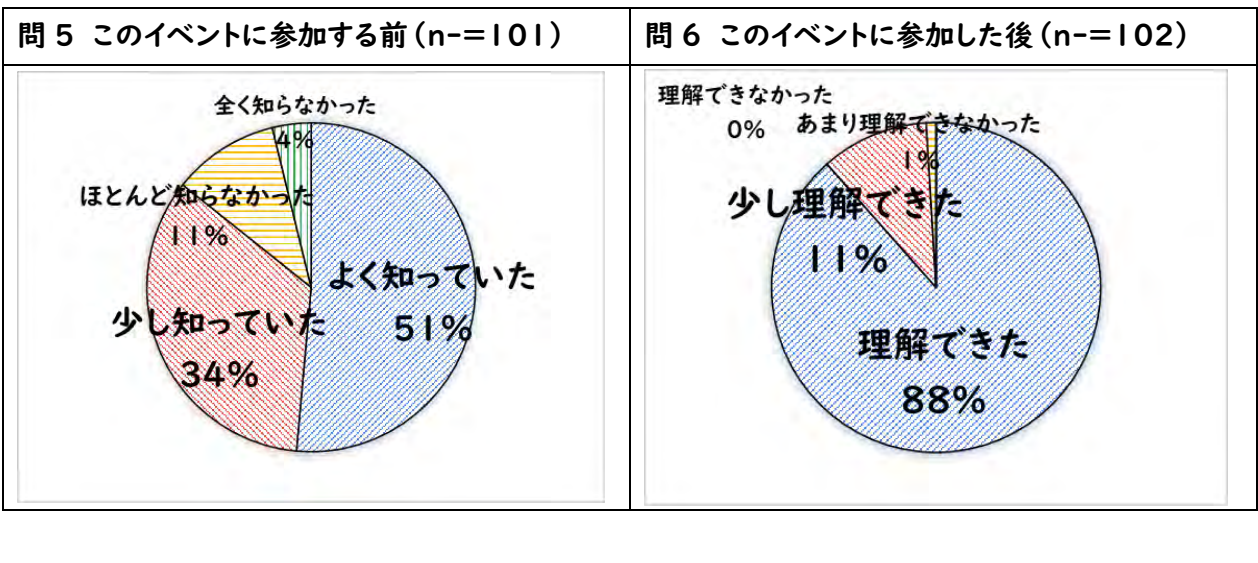
(1) 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)について



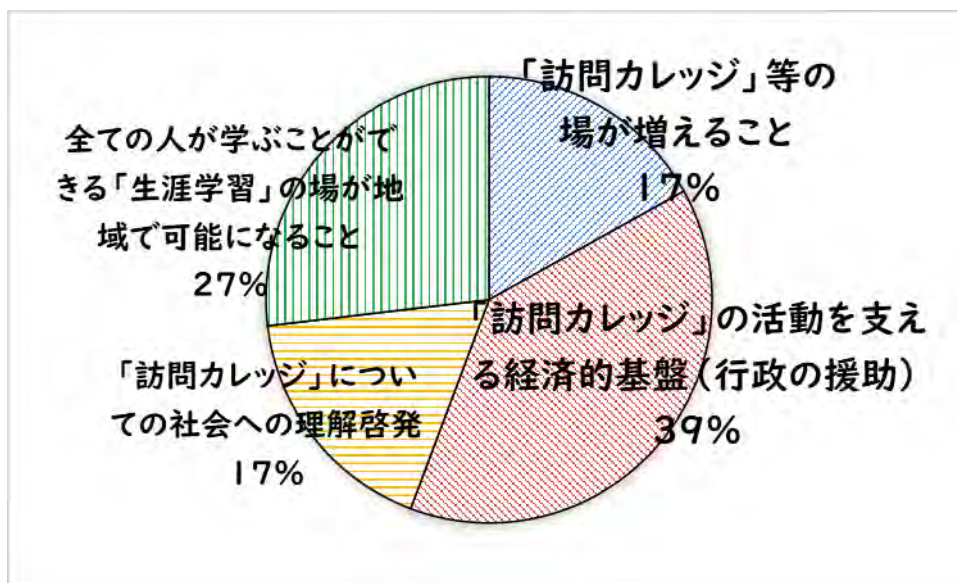
(2) 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)での「生涯学習」の取り組みについて



(3) 医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」の必要性について



問 7 医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」が、さらに充実するためにお聞きします。必要だと考えることを2つ選んでください。(n=103)



問 8 『医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」』という視点で、「ゆめ水族園」「ファンタスカー」などが役立つ場面・アイデアがあれば教えてください。(n=52)

- ・生活介護施設が実施する地域交流のお祭りなどで実施すると、施設の利用者と地域の子どもたちの両方が楽しめたりしそう。肢体不自由児者協会などのイベントとしても呼びできればと思う。
- ・色々な分野の支援者が家庭に入っていますが、生活そのものを支える視点が中心です。体調が厳しくなり、外出もほとんどできない在宅で過ごす方々にもファンタスカーがやってきたらいいなあと思います。また、映像の貸し出しや家庭で簡易的にできる方法の伝達などあればいいなあと思います、
- ・エプソンさんの「ゆめ水族園」に、感動をいただいた生徒さんは全国に数多くいらっしゃると思います。「生涯学習」という視点から、何年かに一度、リアルとオンラインで今回のように全国展開(配信)していただくことも素敵ですね。サテライト会場をつくるなどもありでしょうか。
- ・社会貢献活動の様子をEテレハートネットTVで紹介してほしい。「ゆめ水族館」や「ファンタスカー」に来てもらいたい特別支援学校等はたくさんあると思うが、全部を回るのは難しいので、ゆめ水族館のノウハウを特別支援学校等に広めてほしい。
- ・新たなアイデアは分からないのですが、支援学校でもゆめ水族館のような取り組みができるように研修があるのは素晴らしいと思いました。自校でもできないか、考えたいです。
- ・支援学校や福祉事業所、病院等へ積極的な体験活動をすすめていただけると嬉しいです。それから、今回行ったリレートークが手軽にできるような援助等がしていただけるといいなあと思いました。
- ・保健所での母親学級、予防接種や健診の時の待ち時間や事後に体験してもらい、医療的ケア児の生涯学習について、周知、啓発を図る。
- ・同様に、市民祭りなどで展開し、一般市民に対しては啓発を図り、医療的ケア児がいる家庭には社会参加を促す(必要に応じてオンラインも併用しつつ)。

- ・特別支援学校児童・生徒と交流をしている小中学校で、授業の一環で体験してもらう(医療的ケア児の、地域の同年代の児童生徒との交流への参加も促せるのでは?)
- ・特別支援学校における遠足、校外学習の代替活動としての活用。順延できなかった雨天時等。
- ・地域の小中学校などで、重症心身障害児者も参加して当たり前のイベントとして開催していただく。地域との交流、誰もが一緒に暮らす社会へのきっかけとしての役割を期待します。
- ・大きなディスプレイでも臨場感が掴みにくいせいか、なかなか集中してくれませんでした。スマホを使うVRゴーグルも登場していますし、そういったアプリがあるといいなと思いました。
- ・コロナ禍が落ち着いたら、学校等の夕涼み会や暗い時間のお祭り等、いろいろな人が参加できる形で屋外にコーナーを設置して、楽しい気持ちを共有できたら、素敵ですね。
- ・弱視や全盲の方でもプロジェクターの光の世界観の中なら、光を感じ『見た』ように感じる感覚刺激を増やす体験ができるかも知れない、という可能性が垣間見られた
- ・認知症の方、末期の方、精神疾患の方、などの在宅でも病院でも自力で外の世界に行けない方、または心を閉ざしているかたなど
- ・児童デイサービスや家庭でも活用できると良い。
- ・レンタルの仕組みの構築、対象者の近接の公的施設:図書館・児童館・公民館等の会場活用
- ・バーチャルでの世界旅行など。砂漠や山、歴史上の建築物、音楽会などにも参加できたら。ロボット操作での学習会への参加、接客などで、空間を映し出すことができれば、介助者と共感しながら疑似体験ができるかと。観客を映し出してもらっての発表会や、表彰の機会があると気持ち違うかも。
- ・定期通院が唯一のお出かけという方も結構いらっしゃると思います。定期通院は待ち時間が長かったり、検査が色々あったりして大変ですが、通う病院にこんな楽しいごほうびがあったら楽しいかと思いました。
- ・体調等によって、外出が難しい方でも、体験できるので、出張や長期貸し出しなどに対応できるのはとても良いと思いました。コンディションにより、規模を柔軟に対応できることが嬉しいです。3学期に学校で取り組む予定ですので、よろしく願いいたします
- ・在宅でも楽しめるよう例えばオンラインで配信や機器等の貸出。訪問カレッジとコラボ等して頂くと嬉しい。
- ・素晴らしい取り組みです。ベッドサイドでも手軽に体験できる等、既にお取り組みかと思いますが、あれば嬉しいです。生涯学習は全ての人に当てはまるもの。いずれはみんな高齢者。これからも続けてください。
- ・近くの公園で遊ぶような感覚で、公民館などがあると、障害があっても無くても地域の子供達皆で交流するきっかけになる。
- ・ゆめ水族園は年齢を問わずいろいろな対象が楽しめる内容だと思った。ファンタスカーを操作する人(セイコーエプソン社社員)付きで貸し出すことで互いのことが知り合え、啓蒙的な活動になる。内容はいろいろなものが用意できるといい。自然界だけでなく、創造的なアート、舞踊、などそこに参加することができない人が、ファンタスカーでたくさん経験できるように、各種のプログラムを一緒に考えていくというのはどうだろうか。
- ・エプソン様が、こんな素晴らしい取り組みをしているとは知りませんでした。児童発達支援事業、特別支援学校、生活介護事業の場に訪問するとかでしょうか～?

- ・一般的な水族館に出掛けていくことが困難でも、バリアフリーの会場であれば出掛けやすい。他者と感動を共有するという体験が乏しいので、機会を作りたい。
- ・医療的ケアが必要な方たちや支援されている方たちは生涯学習の必要性をご存知だと思いますが、一般の方たちには充分浸透していない現状があると思います。「ゆめ水族園」の体験は医療的ケアが必要な方たちだけでなく、一般の方たちも楽しめると思います。地域の公民館や市民センターの文化祭などで体験できる機会があれば、一般の方たちが楽しむ体験を通して、医療的ケアが必要な方たちのことや生涯学習の必要性を「知る」「理解する」「応援する」といったきっかけになるのではないのでしょうか？！
- ・事業所主体(児発と放デイ)のイベントにぜひ来て欲しいです！オンラインにて希望のご家庭に繋ぐこともできるため、訪問生や感染懸念のある方にも楽しんでいただけたらと思います。
- ・一般のお祭り&イベント等の場で、一般の人と一緒に同じ「ゆめ水族館」を楽しむということもいいと思います。
- ・入所施設、生活介護事業所等で行って欲しい
- ・公立の養護学校・特別支援学校や県立のこども病院だけでなく、全国のこどもホスピス等や、医療ケアがある障がい者の入所施設などにもその活動の場を広げて欲しいと思います。普段外出が出来ない人達には、すぐ五感を研ぎ澄ます経験になると思う。中途障がい医療ケアが必要な難病患者となり、外出が出来ない人にも、希望を与える生涯学習は必要だと思うので、エプソンに小型化で持ち運びやすい機種の開発と事業提供も願っています。
- ・放課後等デイサービスでも非日常のファンタジー良いかもしれませんね(経費が心配なだけ)
- ・感覚的な刺激の面だけでなく、魚の動きの観察にも役立つような気がします。魚だけでなく、動物等、移動の難しい方の生物の観察の機会、学びになるかもしれないですね。
- ・カレッジ生の合同授業、行事(スクーリング)などの共通経験の場として
- ・ファンタスカーなどは通常の活動(スヌーズレン)や行事での使用はできるかと思います。映像や音はあるので、さらに香り(映像に合わせて香る等)や振動、温度など本物に近いものができると、視覚・聴覚が弱い方も楽しめるなと思いました。
- ・重症心身障害児者入所施設でのイベント、学校(特別支援学校含む)、日中生活介護事業所などのイベント、自治体のイベントとして。
- ・「ゆめ水族園」は地域で気軽に呼べるようになるとありがたい。「ファンタスカー」は生活介護事業所などで気軽に体験できるようになること。
- ・訪問して行く、どこでも水族館
- ・健常者との交流にも使えると思いました。
- ・啓発イベントにおいて、関係者だけでなく、兄弟、家族すべての人が楽しめる場所の提供ができ、共に楽しみ参加できる。
- ・他者が、活動内容をよく知り、学び、自分のテリトリーで、実践すること
- ・当事者の学びに応じて仮想空間を展開できる。

- ・動物園等もなかなか行く機会がないので、動物園等もあると良いかなと思いました。我が子は目が悪いのですが、音や声にはとても興味を持っています。鳴き声や自然の音を聞くことで、目の見えている方々とも同じ空間で楽しむことができたなら楽しいのではないかなと思いました。
- ・事業所でのレンタル(行政の補助があればなお良い)
- ・ゆめ水族館は、アートの意味合いがコンセプトで、方向性が違うかも知れませんが、さかなの名前や生息など説明書きがあったら勉強になるかなと思いました。本物の画像ただただに本当の水族館のように。
- ・今回よりも小規模でよいので、オンライン配信をしていただけると嬉しいです。全国各地で行っているゆめ水族園の場所で、10分～15分くらいの映像を送っていただき、「今日は、沖縄から配信です。」という、全国各地とつながる感じがします。また、その時々で、例えば「海の生き物」「魚」「風」「春」「夏」「秋」「冬」などテーマが変わるのも素敵です。はじめと終わりに視聴者に言葉かけがあると、見ている人も応答できるので、少しは双方向の場になるのではないかなと思います。夢が広がります。
- ・医療的ケアが多かったり、人工呼吸器が付いていたりするとトイレを含めケアができる場が少ないので病院の講堂などを借りて出来ると安心感があるかなと思いました。その他大がかりかもしれませんが車椅子・ストレッチャーが入れる車体で個人宅に出向き体験できたら外出困難な方も体験できるかなと思いました。
- ・家庭への貸出し。家のリビング等での実施。
- ・体育館等での利用をお願いしたいと思いました。
- ・ゆめ水族館、支援学校のみではなく地域の子供達と一緒に楽しめるようユニバーサル教育を意識した介入があると良いと思います。居住地校交流をやっている支援学校は多いと思うので、両校の生徒が一緒のタイミングで中に入れるような企画をお願いしたいです。(居住地校交流では課外活動への参加を希望しても一緒に行けない等出来ない背景があります。楽しい事を一緒に経験させてやりたいという思いがあります)
- ・学んでいる学生のアイデアを映像にして、現実投影し可視化により、学生が学習の成果を見て楽しむ。

問9 このイベントをとおして、あなたの気持ちの変化があればお聞かせください。(自由記述)

(n=66)

- ・表出が難しい子への熱い思いが伝わってきました。出来ないとききらめはだめなんだなと思いました。
- ・オンラインで参加しました。皆様の活動に敬意を表します。また、このような活動が持続できるようなスキームがないか、考えていきたいと思っています。
- ・もっと、訪問事業がスムーズに好きな時に受けられるようになればいいなと感じる。そのために、かかわってくる人が多くいなくてはいけないなと痛感した。
- ・自分の地域に訪問カレッジを作りたいという気持ちがさらに強くなった。回を重ねるにつれて、色々な取り組みが広がっていることにも希望を感じる。
- ・学び続けたいこの気持ちを大切にしていきたい。その子のコミュニケーションについて引き継ぎができるように学校で指導していかななくてはと強く思いました。

- ・「学ぶ」事がこんなにもワクワクし、たとえどんなに重い障害があっても学び続けることが生きていく上で大切なことなのだと実感しました。オンラインでしたが、今日のイベントに参加して本当によかったです。主催の方々、関係者の方々、本当にご苦労様でした。
- ・「学習」という言い方に違和感がありますが、現状ではやむを得ないのではと思うようになりました。卒業後の生活を豊かにすることに「学習」と言わなければならないというのは、「健気な障害者のイメージ」に添った表現で、推進するためには現状では仕方がないと思いました。
- ・広域な地域性がありますが、ぜひ、地元地域にも訪問型学習支援機関が立ち上がっていくことを期待します。現在活動しているカレッジ機関に、訪問クラス・部門の併設...といった道もあるでしょうか。
- ・現在再任用で特別支援学校に勤めていて、退職後自分にどんなことができるのかを模索しています。訪問カレッジや生涯学習の取組はとても参考になりました。
- ・これまで少しか訪問事業に関わっていましたが、今回のイベントを経て、訪問カレッジはとても可能性にあふれた取り組みだと感じました。
- ・これまで以上に、いろいろな人の手を借りながら、カレッジ生の学びや生活が充実するよう支援していきたいと思えます。
- ・以前、特別支援学校で進路担当をしていました。当時、その地域には医療的ケアのある方が通所できる進路先がほとんどなく「選択肢」すらない状態でした。高等部で通学してた生徒ですらその状態で、訪問籍の方の進路先は見当たらず頭を抱えていました。いろいろな人の思いがつながって、その方は訪問カレッジにつながることができ、それが後輩の進路の「選択肢」になり、今日につながっていることを、再確認できた1日でした。今回は現役教員の姿をあまり見かけなかったのもっと現役の教員にも知ってもらえたらいいな、と思いました。また、退職されてから精力的に活動されてる大先輩方を見て、日々の活動だけでなく、もっと広い視野でフォーラムを創っていることに、率直にすごいな、と思いました。
- ・松田先生がおっしゃっていた、日本人は人権意識に欠けるのではないか、というコメントがその通りだと思った。なぜ日本の障害児者福祉は欧米等の他の先進諸国と比べて遅れているのだろうか。それはやはり予算の付け方に大きな違いがあるのだと思う。教育費も OECD 諸国の中で最低水準だと言われている。今こそ、競争ではなく、松田先生がおっしゃっていたように共創にシフトチェンジしていく時だと思う。誰一人として学ばなくてよい人はなく、自己決定、自己実現から除外されてよい人はいないと思う。そういった意味で、医療的ケア児者の生涯学習は保障されていくべきだし、そこから社会は競争から共創へと変わっていくと思う。
- ・障害が重い方にとって学びは、初めてを作り出すものだと感じました。やりたい人、やれる人がいても、お金の不安定さで継続が危ういことも感じました。学校卒業後の学びを、保護者としては生活介護施設でも強く望んでいます。多くの実践を紹介していただき、素晴らしさを感じた分だけ、1日も早い制度化を望む気持ちが強くなりました。
- ・はじめての参加でしたが、長い歴史を経て今があることを理解しました。あらためて感謝いたします。またバーチャル・ウォークにて各々の団体様が思っていた以上に多様な生涯学習や取り組みをされている様子を見ることができ、希望がさらに高まりました。

- ・自分の居場所がないということは、尊厳の喪失なのだとすることを重く受け止めました。また、「生涯学習」その人らしく生きるために、生涯にわたる自由な学びであり、学ぶ楽しさ・世界が広がることですべてのひとのQOLはあがっていくのだと伝えたいです。
- ・全国訪問教育研究会に卒業後の部会や、シンポジウムの機会を設けて一緒に考える機会をつくりたい。
- ・カレッジに関わる機会があれば関わってみたい。
- ・展示会の方で、指先の数ミリの意思表示や感情の表出をもっと、多く可能性を秘めているツールがあることを、沢山の方に知ってほしい(支援学校で終わり、ではない生涯にわたるツールとして)、生きていいんだ、という「訪問カレッジ・Enjoy かながわ」を立上げられた方の心の叫びに共鳴して涙が出ました。参加して良かった。また機会があれば参加したいです。ありがとうございました
- ・1部では実際に生涯学習を体験している方やそのご家族からのお話や実践が観れて良かったです。「ありがとう」の文字を1つ1つ入力することの大変さや、文字を通して気持ちを確認出来ることは大切な事で、学ぶことで世界が広がり、人との繋がりも出来る事なんだと感じました。まだ医療が必要な人の生涯学習は歴史が浅いことや、受け皿が少ない事など現場で感じている事なので、学べることの選択肢を増やせるようにしていかなければいけない事だと思います。
- ・訪問カレッジの成果をどう全国に発信するかの大切さを感じました。
- ・障がいを理解し支えてくれようとしている人達がたくさんいることを知り未来が明るくなりました。息子も楽しんで参加する事ができ、またこの先の息子の意思表示の手段が少し見えて気持ちが明るくなりました。
- ・何らか、新しいことにチャレンジし続けられる安定した場を、私の地域でもと思いました。
- ・つい数年前までは、卒後の在宅訪問なんて、制度もないしそんなことできるの？という感じの周りの反応でした。色々な方が今回のイベントに参加されていて、関心がある人の広がりを感じました。もしかしたらさらに数年後は、普通の選択肢の一つとなるのかもしれないと思いました。
- ・学びたいという気持ちを持っていれば、学びに終わりはないと思いました
- ・今回参加させていただいて、息子に機会を作ってあげたいと思った。
- ・生涯学習が、いつでもどこでも誰にでも可能な世の中になるよう、この事実をみんなに伝えていきたいと考えるようになりました。
- ・みんなに知ってほしい内容でした。
- ・自分の子供は出来ない、わからないと思っていたことが、意外にも理解をしていたことに気づかされた。
- ・バーチャル・ウォークで展示の様子や会場の様子などを見ることができ、すごく楽しかったです。
- ・必要とする人への平等な支援が必要と思う。望んでも受けられない現実が多いと思う。
- ・遠隔地の為、訪問は無理でもオンラインだけでもカレッジに参加出来ないでしょうか？学生さんたちの姿を見て是非参加したいと思いました。
- ・「卒業式はないほうがいい」という先生たちの話にハッと気づくものがあった。これまで高校までお付き合いし、その後は通所、通園という形での継続ができていたものと思ったが、現実的には単にお預かりというものが多く、個々人のこれまで積み上げてきたもの、学習内容はほとんど引き継がれないか、引き継がれてもそれを

やるスタッフがいないという現状にそれほど問題意識を持っていなかった。家庭を選択した方々にはさらに課題があったということに気づいた。私ももうすぐ70歳になるが、母を看取るという経験から、高齢者の行くところも同じようなもので、その方のこれまでの生き方を継承し、尊厳を守るようなところは皆無に近いと知った。これは厳しい現実だが、人は生涯学習できると思う。今日のシンポジウムで、なんとかしたいと思った。私は神奈川県相模原市でも仕事(月に1回)をしているが、神奈川での取り組みは全く知らなかった。早速来週その事業所に行ったときにスタッフやご家族に確認してみようと思った。

- ・NPO 法人東京こどもホスピスプロジェクトの OriHime によるお仕事体験で受付の挨拶のお仕事をさせていただきました。あらかじめ、挨拶のアプリを用意して、タップするだけで複数のあいさつをできるように用意しておきました。知らない人から名前を呼ばれて挨拶され、体験した娘もとても喜んでいました。寝たきりの娘にとって、かけがえのない経験となりました。体験中の家での写真を撮影しました、宝物のひとつとなりました。
- ・高校一年生の息子は呼吸器児ですが、週5日通学しています。小学校入学当時は週に1~2日程度しか通学できませんでしたが、たくさん通えるようになってからは息子の表出スキルはどんどん伸びました。他者とコミュニケーションも取れるようになり、家族以外の人と関わることもたやすさを、その大切さを実感しています。訪問カレッジについては、私(母親)はオンラインで情報を収集しある程度の把握はしておりましたが、本人と父親にも理解を深めてほしいと思い、家族で参加させていただきました。2人ともイメージが掴めたようなので連れて行ってよかったです。母親1人が卒後の心配をしがちですが、やはり本人と家族も一緒になって考えていく必要があると改めて思いました。
- ・相澤さんからの依頼を受けて「ブース出展」という形で参加させていただきました。出展すると他のブースの方たちと交流する時間が取りにくい現状がありますが、準備時間に余裕があったこともあり、他のブースの方たちとお話できる時間が持てました。「訪問カレッジ」や「訪問学習支援」など「名前」として知ってはいても、詳しいことはわかりませんでした。みなさん、ホームページなどで紹介されていますが、ネット上で読んだり、見たりするより、直接お話を伺う方がよくわかります。私たちは「ものづくり」を中心に活動していますが、障害や病気があるために学習できる場が持ちにくかったり、生活がしにくかったりされている方たちと共に、ご本人の好きなこと、やりたいことを叶えるためにできることを考えていくという点は共通していると思います。ご縁をいただき、参加できたことで、私たちもあらためて、「生涯学習」の重要性を再認識できました。私たち自身も3日間の中で、たくさん学ばせていただきました。「生涯学習」は私たち自身にも必要、そして、重要だということを実感できました。参加させていただき、ありがとうございました。
- ・支援学校に在籍していた時に校長からコミュニケーションアプリ「指伝話」があれば私たちの子供の世界が広がるのではないかと言われたがコロナで忘れていました。今回のイベントで改めて考える機会を頂きました。ありがとうございます。過去に入院中、学習するには支援学校を転校すれば訪問学習可能と言われたが、転校はかなり負担で断念しました。その当時カレッジがあったら入院中も充実したのかなーと思います。
- ・以前より、卒後の生活において訪問学習の必要性を感じていましたが、より一層の必要性を感じました。在宅の活用は、重心かつ医療的ケアを要する方にとっても同じ事です。社会が在宅ワークを進めたように、また児

童分野において訪問型事業があるように、通所事業所の送迎の課題解決のためにも、訪問学習に何らかの支援制度が創設される事を願います。

- ・全国のどこに住んでいても訪問カレッジを活動の場として、その必要性をあらためて認識を深められました。
- ・特別支援学校の定年退職された先生方の次の職場として考えていただけるよう進めていただきたい。
- ・障がい者が通学する専門カレッジは、以前聞いたことがあったが、訪問カレッジがこのような生涯学習の位置づけで、ずっと学び継続してける事は、当人にとっても家族にとっても自己表現の場が増えて、嬉しいことであり、素晴らしいことだと思います。より一般化し継続していくためには、運営する側の活動資金を安定化する事とこの活動が社会資源の財産である事を認知してもらう事が必要と思います。訪問カレッジが増えていくと、ニュースでも認知されやすい。しかし、現在の放課後デイの乱立のようなサービスの低下している事業所も問題化されています。そうならない為にも、訪問カレッジの位置づけが、障害者権利条約に基づいて、医療ケアがあって外出がままならない子ども達にも生涯学習を保障する教育であるとなってもらいたいものです。
- ・地道に継続されていることに。特に神奈川モデル!!同じ神奈川です。とても力強く感じました。
- ・支援学校に勤めて長いですが、医療的ケアの必要な方の支援は経験がほとんどないので、“生涯学習”という視点も含めて勉強になりました。
- ・個別性を求められている時代でICT関係も大切な手段の1つになりますが、まだ環境や社会の支援など追いついていないなと思っています(施設で働いていて)。利用者のためにと自分達スタッフの知識や技術(現在、勉強していますがもっと必要かと。その為の情報)、物品の準備(置く場所や費用等)の必要性を感じます。
- ・生涯学習支援の必要性を理解してくれる人の輪が、大きく広がってきていることに驚き、とても嬉しく思いました。これからは行政が積極的に生涯学習支援に関わってくれるよう思いを伝えていこうと思いました。
- ・地方ではまだまだ取り組みが少ないのではないだろうか。また、在宅の方々自身がニーズを感じておられない方もおられる現状もあり、今後、機会をとらえて取り組みたい。また生活介護事業所内での学びについてもスタッフ全体への啓発の必要をあらためて感じた。
- ・報告にあったような、大学校に参加できるような実態の方々だけでなく、イベント会場に参加できないような状況の方々の暮らしぶり、そこに関わる皆さんの取り組みを知りたいです。もしかしたら、私にもお手伝いできることもあるかなと思います。
- ・知ること学ぶことに喜びがあるから生きていけるのは障害の有無に関わらず共通して言えることだと再確認。
- ・私も仲間として、支援をしていきたい。
- ・支援について学ぶ機会が少なく、孤独感もあったが、同じ志がある方々がこれだけいて、温かく受け入れてくださっていることが心強かった。
- ・外部に発信していくことは、大きな意味があるが、技術面、金銭面、人を動かすことはなかなか難しい。けど、上手く運営してると思いました。動かすスキルを身に付けたいと思いました
- ・『学び』を観点とした展示の開催は新鮮なアイデアでとても良いと思いました。
- ・高等部卒業後の、とにかく行き先(ケアがあっても通える場)の確保が必須と考えていた。豊かに生きるためにいろいろな形で学ぶことの重要性を実感した。

- ・重い障害があっても学びの場があることは人生を豊かにするのだと改めて感じました。通所等が難しい人だけでなく、通所や入所している人でも継続して学べる場が制度化されてほしいと思いました。
- ・オンラインでも福祉機器の見学ができるのかな？と聞いていましたが、意外とわかりました。
- ・何らか、制度の活用ができないか検討したい。
- ・生涯学習は誰も当てはまることで、仕事に就いても、別途習い事をしたり資格を取ったり、学校年齢を越えても頭にはいることはいくらかでもあります。障害あるなしに関わらず自分も勉強しなければと思いました。
- ・医療的ケアが必要な方とその家族の願いは、社会が求める人々の生きる力の基であることを実感しました。
- ・他の方の学びを知れた事で我が子への可能性を考える機会になりました。
- ・ご家族や先生方の熱い思いを伺うことができ、支援員として気持ちを新たに頑張ろうと思いました。
- ・カレッジ生が楽しみにするイベントになるとよいと思います。
- ・支援機器やファンタスカーの利用場面を想像することができました。
- ・訪問カレッジ学生自身のプレゼンがとても興味深かったのですが、電波の問題なのか音が途切れてしまい聞きづらくとも残念でした。また、ゆめ水族館のビデオが何度も流れてしまい、入り直しても同じビデオが流れて復旧出来ず残念でした、後日 YouTube 配信等があると助かります。学生達の様子を具体的に教えていただいたことで、我が子(医療ケア有)の将来、大学聴講でも良いから参加できないか等何となくの思いからより具体的に大学、生涯学習の道を探していきたいなと実感しました。貴重な機会をありがとうございました。
- ・呼吸器を付けている娘は通所先も限られていて先輩方が苦勞されて進路を探しているのを目の当たりにしていたので、高校卒業後は隠居するしかないと諦めておりましたが、訪問カレッジなら少し人生に彩りを添えられるのではと初めて前向きな将来を考えることが出来て一筋の光が見えた気がします。
- ・意思伝達装置を使用して文章を作る岩村さんにお会いし、支援の方に相談しても制度は認められないと言われて、できないと諦めていた意思伝達装置が制度を活用して購入できる可能性があること、また業者の方にもアドバイスを頂き本人が使いこなせる可能性があることがわかり、現在意思伝達装置の導入を進めることができます。
- ・元教員の方々の学習内容が素晴らしいと思いました。

問 10 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)へ期待することがあればお聞かせください。(自由記述)

(n=63)

- ・この活動が広がると良いなと思いました。
- ・医療的ケア者だけでなく、重度障害者も受けられるような、自宅への訪問のみならず、どこかの会場であったり、通所施設へ訪問したり、広がってほしいと思っています。
- ・医療的ケアがあることで、今まで通っていた通所先に断られて通えなくなった方や卒業後に通えるところが無い方々が周りに増えています。どんな状況でも主体的に学び、生きていけるような社会になればいいなと心から思います。「訪問カレッジ」を通じて 1 人でも多くの方々が社会の一員としてその人らしく生きていけるよ

うな活動となることを期待しています。学習支援者にはなれませんが、お手伝いさせていただける事がありませんでしたら参加もしてみたいです。

- ・継続は力、継続するための方策を考えていきたい。
- ・各地域での訪問型学習支援についての情報交流。各地域で活動している"カレッジ"や"大学"などとのオンラインを活用したオープンカレッジやスクーリング(合同カレッジ祭?)...そのようなこともいづれできるようになっていくとよいですね、などと想いを広げました。
- ・医療的ケア支援法により、医療的ケア児の通学が保障されるようになってきたので、これからは、卒業後の学びが継続するように生涯学習の制度を確立して、全国に広まっていくことを期待します。
- ・可能性を感じて夢を描いてしまったので期待して書かせていただきます。

【児童生徒目線で】学生さんの学びに向かう姿勢を見て、あんな大人になりたいと子どもたちに思っていて欲しい。

卒業後は自分の やりたい学習をもっとやるぞと夢見て欲しい。支援学校卒業はやっぱり新たな門出へのおめでとうなんだ!と思いたい。

【教員目線で】ベテランの講師陣の授業がとても勉強になる。また、学びに向かう学生を見て、将来あんな風に学びや人との関わりを楽しみ、人生を楽しむために、今学齢期に何が必要かを考えるきっかけにしたい。

- ・学ぶ意欲がある人と企業が結び付いたらこんなことができる、と、後輩に宣伝して欲しい。企業が協力してくれたら、全国の支援学校の財産になる!
- ・そう考えたら、本当に訪問カレッジは大学で、学生は大学生で、講師陣は大学教授、みたいです。制度として継続できる形になり、今回のように多くの人に向けて発信され、支援学校はこのような大学イベントをみんな見るといいと思いました。
- ・社会とのつながりを持つこと、学習支援を大きくとらえることが必要かと思いました。また、持続可能の為に制度化は大切と思いますが、どのような形になっていくのがよいのか考えていきたいと思います。
- ・現在のまま、高等部の学生にその活動を紹介して進路先の選択肢にしていくと、あっという間にパンクすると思います。経済基盤を作り、人材も揃える必要があると思うので、周知の意味も含めて署名活動などされてはいかがでしょうか。手始めに特別支援学校の職員向けの講座などもありかもしれません。
- ・医療的ケアの有る無しにかかわらず、特別支援学校高等部を卒業した方の生涯学習が保障されてほしい。生活介護事業所でも生涯にわたって学びを続けていくことができると思うが、本人の意向に沿ってオーダーメイドの学びもできるようになってほしい。また、「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)が確立され、充実していく過程の中で、小中学校に置かれた特別支援学級のあり方も、より当事者の実態に合ったものになってほしい。実態的に力のある方(日本で放送されている海外発のアニメを YouTube で英語で視聴し、セリフを英語でそらんじて言えたり、日本のアニメのセリフを自分で考えた英文で言えたりする方)が、三角形の内角の和が 180° であることを知らなかった時は衝撃を覚えた。また、話し声だけを聞くと、肢体不自由があり車いすに乗っていることがわからないくらい、上手にお話しができる方が、「友」を「とも」と読むことを知らなかった時も愕然とした(学習した後に、忘れてしまっただけかもしれないが)。義務教育という言葉があるが、最低限、小中学校の特別支援学級で学習してきているだろうと思い込んでいたので、そのギャップに呆然としてし

まった(自分自身が特別支援学校教員歴約6年と、まだ経験が浅いため、心の中で大きく動揺してしまっ
た)。医療的ケアがあり、訪問で学んで来た方々も、治療や手術等の関係で、学習に遅れや中断があると思
う。ゆっくり時間をかけて学んでいく方もおられるであろう。それぞれの方々のペースで、20年かかっても、30
年かかってもいいから、少しずつ自分や自分を取り巻く環境について感じたり、気づいたりして行ってほしい。
おのおのの興味関心事を、深く掘り下げて知って行ってほしい。この「訪問カレッジ」のムーブメントが大きくな
りとなり、起爆剤となって、障害児者が教育を受ける権利の全体をも力強く牽引して行ってほしい。

- ・訪問型学習を実施されている様子、受けていらっしゃる方の感想等、具体的に知ることができました。今、協
力していただける元教員などのプロの先生がいてくださるのは、とても心強いです。支えてくださる方、財源が
あり続けることが本当に大切だと実感しました。安定した継続ができるよう強く望みます。
- ・フォーラムでも述べられていましたが、オンラインでの学習支援にも期待しています。
- ・多くの方に知ってほしいですし、生涯学習・社会教育関係者は学習支援のプロですから、そうした方々と連携
され、発展して行ってほしいです。
- ・ニーズを多くの人と共有していく必要性を感じました。
- ・通所とカレッジの併用ができると、ご家族の支えがもっと強力になるように思います。関わりたい人への発信
がもっとあると腰を上げやすくなるのではと思います。よろしく願います。本日はありがとうございました。
- ・同じ市内にあって、紹介する特別支援学校の進路担当者がこの制度の中身をご存知ない様子だった。もっと
幸せが広まるよう、期待したい
- ・受け皿の拡大です。行きたくても遠くて行けない。やりたい事とは違う。など選択肢を広げて誰もが学べる環境
を整えて欲しいです。また、高等部卒業の年には生涯学習も選択肢として説明出来ることが望ましいです。
- ・カレッジ生が他のカレッジ生とのつながりやふれあいが出来るようになると良いとおもいました。
- ・この先、私たちが住む地域でも訪問カレッジを利用できると嬉しいです。
- ・誰でもが生涯発達することを、成果として発信してほしいです。それは、誰でもが自分らしく成長できる生涯教
育を選択できる社会になる一歩だと思うのです。そして、個人のつながりだけでなく継続可能な制度にしてい
くための知恵も是非シェアして欲しいです。
- ・卒業後に通所が難しい方の支援を引き受けて下さったことは、本当にありがたかったし、送り出す身としては、
ほっとしました。今後どうぞよろしくお願いいたします。
- ・学校が疲弊しているなかで、熱意から、制度を作っていくという原点を思い出させてもらいました。
- ・教育の場を年齢に限らず広げられて行っていること、とても素晴らしい取り組みだと思います。息子にもその
機会を作ってほしいと強く願いました。
- ・とても勉強になりました。今回私が得た「学び」の喜びと充実感を、さらに多くの障害をもつ方々にも届けられる
ようになることを期待しています。ありがとうございました。
- ・取り組みの道が永く続くよう、期待しています。国の制度が整うよう、みんなに広めてください。
- ・このような場所を1人でも多くやりたいと思う方が、いつでもやれる環境になることを期待します。
- ・継続可能な体制になり、支援者が増え受ける生徒の意思の表出など、生活が豊かになればいいな！

- ・オンラインでも個別の取組みをして欲しい。家にある機器を使ったり、本人に合った機器を紹介してもらい、取り入れた学びをしたい。本人だけでなく親の学びにもなります。もちろん訪問してもらるのが最高です！
- ・訪問をするチームの育成と、社会的な啓蒙が重要だと思った。卒業にむけて、就労、通所、家庭などの進路の選択とともに、訪問カレッジも併用できる、というシステムを構築し、皆さんがそれを選択できる権利を有するようになってほしい。とてもよい企画でした。スタッフの皆様お疲れ様でございました。私も微力ですがお力になれることがあったらうれしいと思いました。
- ・これからも、寝たきりでなかなか体験できないことを体験できる支援をしていただきたいです。
- ・興味や関心事み合わせて、授業を選択できると良いと思いました。基本は訪問型ですが、時には一緒にコンサートに行ったり、美術館へ行ったり、博物館へ行ったり、現地型の授業もあると嬉しいです。出掛けていく目的や目標があるのも、大切な刺激だと思いました。
- ・企画・準備・運営など主催者の方たちは大変だと思いますが、今回のようなイベントを通して、「訪問カレッジ」のを知り、理解する方たちが増えていくと思います。今回、学生さんたちがスタッフとして参加されていたのが、とても良いなと思いました。これからの社会を担う若い人たちがこういう場での実体験を通して、何らかの形で「訪問カレッジ」に関わっていただけるだろうと思うとワクワクします。各ブースそれぞれに特徴があると思ったので、学生さんたちはもちろん、来場者の方たちの中にも「これなら、自分ができそう」というものが見つけられたのではないのでしょうか？！
- ・まず、訪問してもらえる事に感謝です。先生たちに会って生活が充実して、次の訪問の時に何を伝えようか考えたり行動したり。私たちの生活の楽しみになっています。
- ・この度は、貴重なお話をありがとうございました。資料も事前に拝見でき、学びを深めることができました。また、チラシを支援学校経由で受け取りました。保護者の皆様の卒後意識も変わっていきばと思います。
- ・成人を迎え、青年期を豊かに過ごすことで大人になってゆくのですね。シンポジウムにオンライン参加の予定でしたが、現地でいろいろ見学し、モニターで聞かせていただきました。ありがとうございました。
- ・各県の大学生の単位として「訪問カレッジ」の訪問指導も入れ、多くの方がかかわるようになればと思う。
- ・これからも人材養成など大変な事はあるかもしれませんが、副業が認められてきた現代社会なので、その道のプロボノ先生を動員して、益々の発展を望んでいます。我が子は現在27歳です。医療的ケアあり、視覚障害、難治性てんかん、脳性麻痺の四肢まひ、重度の知的障害ですが、他者との交流は好きなので、現在生活介護に週5日通所しています。それでも生涯学習は必要と思っていますので、今まで学校時代に培ったものを継続して活かせる単発の訪問カレッジ(住まいが北海道なのでオンライン版)があれば嬉しいです。
- ・『居宅訪問型生活介護』できたら良いと思います
- ・「訪問の家」のケースのような形が、いろいろな所で広がっていくことを願っています。
- ・在宅の方に対して、個々に合わせたプログラムや機器など学びとして大切かと思います。長期入所の方でも(業務面など色々考慮は必要ですが)個別活動の時間とかうまく使えればと思いますが、課題も多いので、一つずつ解決できると良いものです。色々大変だと思いますが、今後の活動も期待しています。
- ・社会に広がっていくこと、経済的基盤が確立されることを期待しています。

- ・支援機器を体験する機会が増えることを期待しています。また、全国各地の訪問カレッジ生さんたちと交流もできたら楽しいだろうな...と思いました。
- ・今回の取り組みのように今後、制度化へ向けてむけて、何が必要となるか、教えていただきたいです。
- ・訪問カレッジの取り組みが、卒後の生活介護を中心とした施設への啓発活動にもつながる、仕掛けがあると良い。経済的基盤がしっかりとしないと難しいと思います。就学前から卒業までのつながりを学習指導要領でも打ち出している文部科学省からのバックアップを今回のイベントだけでなく、受けたいものですね。
- ・私も支援者として参加できるように研鑽を積みたいと思います。
- ・地域で、いつでもどこでも、誰もが学べるようにしたい。課題は、活動を持続させるための、お金と支援者。ボランティアでは続かないし、広げることは難しい。訪問型生活介護という言葉がとてもしっかりきました。スクーリングありの訪問支援という考え方も、つながりや帰属意識ということも必要であり納得です。岡山で、協力いただける在宅支援事業所に所属して、重度訪問介護ヘルパーとしての生涯学習支援を始めました。ボランティアで学習に行っているところもあります。ICT 支援として、生活介護事業所にボランティアで視線入学習を月に一度始めました。みんな学ぶ場がないのだと感じます。家族も支援者も含めてです。教員が 65 歳まで働くようになると、支援者の確保が難しい。理念だけでは動けない。ICT 支援に長けた人がまだ少ない。若い学生の協力で支援者を増やすと共に、制度化の中での資金の裏付けが欲しい。と、思いつつ、これまで理念を大切に走り続けてこられたみなさんの跡を、ゆっくりと目の前にいる人を大切にしながら、歩いていきたいです。今後ともよろしくお願いします。
- ・支援者への啓発活動、体験ワークショップなど。
- ・更なる拡充に向けて発信し続けてください。
- ・学びは自発的で自由なものだとあらためて思いました。学びたいことを本人が選ぶことが大切だと思しました。本人の意思形成の支援も(我が家でも難しい課題ですが)大切だと思しました。引き続き、楽しく、取り組みを続けていきたいと思します。
- ・通所やりハビリと同じように、障害者の生活の中で普通の存在になってほしいと思しました。
- ・コロナ禍で外出が難しいので、オンラインで体験できることや、事業所や、支援学校でファンタスカーを体験できたら楽しいだろうな、と思しました。
- ・神奈川県全域での展開。
- ・結構外に出づらいかたはいると思します。是非広げてもらいたいと感じます。
- ・多くの方々に知っていただき、関わっていただき、誰もが学ぶ喜びを知る発信基地となってほしいです。
- ・同じように学ぶ方たちとの交流が(当事者・保護者)増えるといいと思しました。
- ・手作りの支援機器も魅力的ですが支援機器の成長のためにも経済的基盤が安定することを期待しています。
- ・地域によって偏りなく、全国どこにいても当たり前のように、訪問カレッジの選択肢があるような世の中になってほしいと思します。今後の益々のご発展期待しております。
- ・アイポルトさんの『通所と訪問のいいとこどり』という言葉がとて救われました。これが当たり前の世の中になって欲しいと切に願います。

- ・学習を通して多くの方との交流、意思伝達装置を使えるようになる為の支援。
- ・訪問カレッジの場所が増えると良い。ただ、今は後ろ盾となる制度ないため、難しさがあるのだと思います。訪問カレッジを知ってもらうこと、医療ケアの必要な方や重度の障害のある方が利用を希望していることを行政にも知ってもらうことから始めたいと思います。
- ・訪問学習を受けたい方々がたくさんいらっしゃると思います。皆さんが、実りある人生を歩んでいけるように、行政が整うことを願います。

(c) アンケート結果に対する考察

「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」は、会場参加者とオンライン参加者の合計 330 名の参加があり、その約1/3の 103 名からアンケートの回収ができた。

回答者のプロフィールでは、50 歳代で特別支援学校や福祉関係・当事者が中心であった。開催情報入手先は、チラシや Web、ロコミなど散らばっており、広報活動としてはバランス良く行えたと考える。

参加されたイベントは、対面とオンラインのハイブリッドで行ったフォーラムが最も多かったが、興味関心では特に偏ることもなく、参加者の関心を得ることができた。

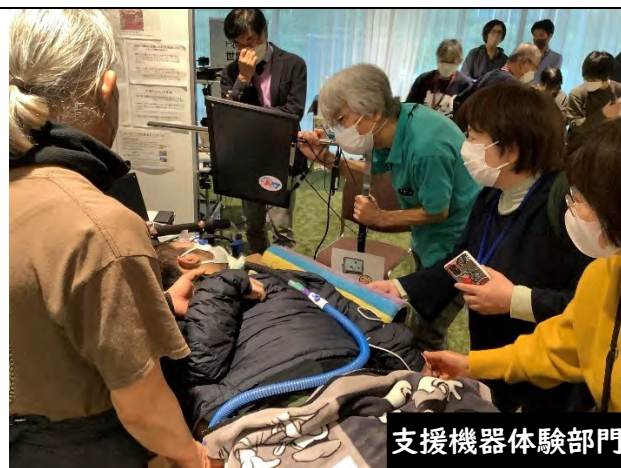
問5と問6は、本イベント参加の前後により、訪問型生涯学習支援の取り組みとニーズに対する参加者への理解啓発の効果をみる質問であるが、イベントを通じてより深い理解を図ることができたと言える。更に「ファンタスカー体験会」のように障害の有無に関わらず楽しめる活動内容は、障害のある者となないものがともに空間を共有する機会を作りだし、共生社会につながることを期待された。

以上から、本イベントの目的はおおむね達成できたと考える。

課題としては、パシフィコ横浜・ノースという会場立地が、一般の人の目につきにくい場所であり、本イベント参加を目的にした方々による参加が中心であったことである。一般の人が通りかかって、会場に寄るなどはほとんど無かったと思われる。関心のある人にとってはより深い理解につながったが、今後、一般の人々に対しての理解啓発を行うためには、マスコミなどをうまく活用していくことも課題として考えられた。

(d) 「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」写真及び動画記録

①写真





オンライン参加部門 (バーチャル・ウォーク)



オンライン参加部門 (OriHime お仕事体験)



フォーラム (開会挨拶)



フォーラム (学生紹介)



エプソン・ファンタスカー体験会



フォーラム (シンポジウム)






フォトショップコーナー



運営スタッフ

②YouTube 動画

「ネットワーク」の紹介 (3分)	「訪問カレッジ『学びの爽り アート&ミュージックミュージアム』」の全体紹介 (15分)	第3回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム (学生発表・ファンタスカー・シンポジウム) (3時間24分)
		

③展示ポスターの写真







(3) 訪問カレッジ学生・家族の満足度調査

「学生」・保護者に対して、「訪問型生涯学習支援に対する学生・保護者の満足度調査」のアンケート調査を行った。

(a) 対象

重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体の訪問型生涯学習支援で学ぶ当事者（学生・保護者）

(b) 方法

重度障害者・生涯学習ネットワーク会員団体を通じて、協力案内を配布し、Google フォームを用いて回答を集めた。

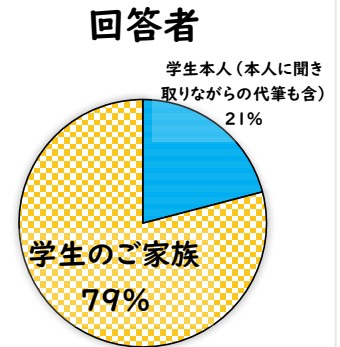
(c) 期間

令和5年1月15日から2月11日まで

(d) 結果 回答数42

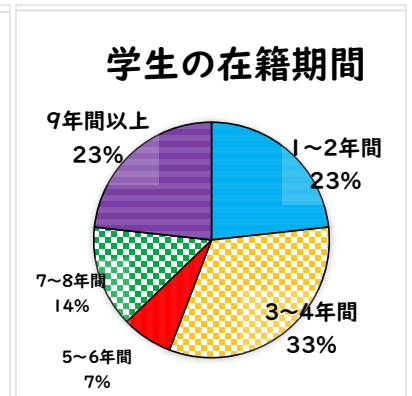
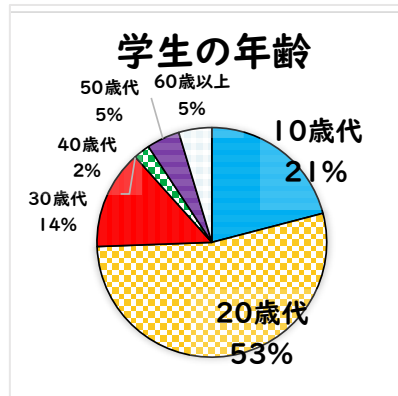
① 回答者

重症心身障害者に該当する学生が多いため、日頃学びの様子を知っているご家族からの回答が8割であるが、2割は学生本人が回答していた。

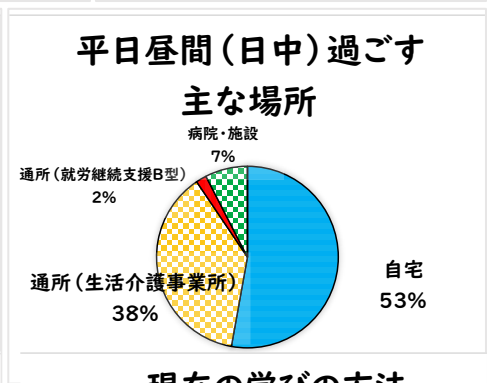
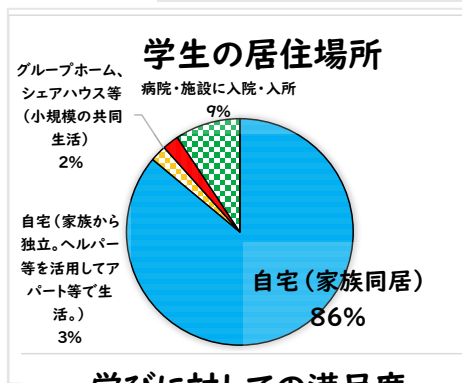


② 学生プロフィール

学生の年齢は20歳代、在籍して3～4年目が多いが、9年以上学び続けている学生も1/4近く在籍している。まさに生涯学習である。

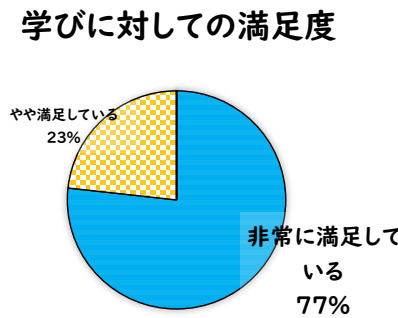


学生の居住場所は自宅が最も多く、さらに5割の方は通所系の利用が困難で在宅生活を送っていることがわかる。

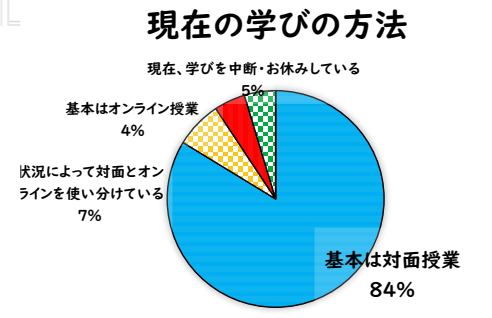


③ 訪問カレッジの学びについて

学びに対する満足度は、「非常に満足」「やや満足」をあわせて、100%の満足度であった。



コロナ禍で学びを休止中や



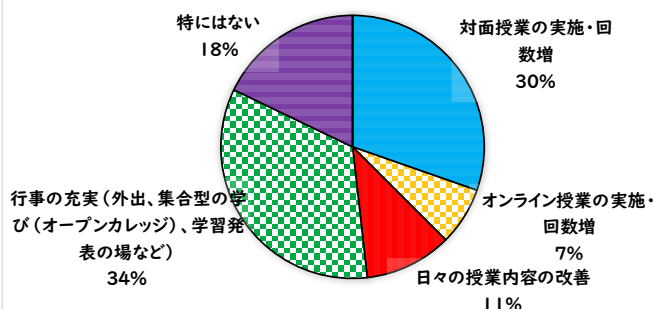
オンラインの活用も見られるが、8割以上が対面での授業を行っていた。そうしたなかで、より改善・充実して欲しいこととして、授業自体の回数増、行事の充実であった。外出が困難なための訪問型だけに、日常と異なる行事開催に対する希望が強く出されていた。

そして、次年度以降も継続して訪問カレッジでの学びを回答者全員が、望んでいた。持続可能な事業にしていくための観点として、今後のネットワークの活動の指針に位置づけていきたい。

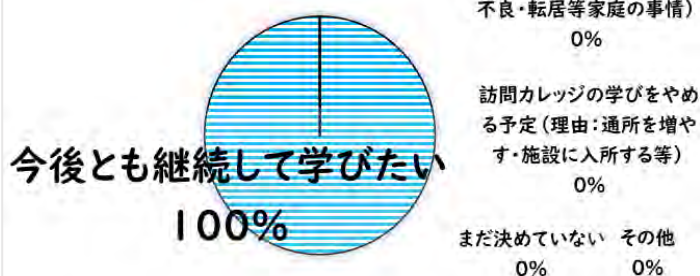
④自由意見

- ・色々な体験させて頂きました。
- ・誰とでもある程度のコミュニケーション出来る力、又は方法(機器、カードなど)を身に付けたい
- ・専門的な講師だけでなく、一般市民や学生などの社会資源が入って来て欲しい
- ・そういった一般市民と一緒に外出などして、どんな事に困っているか一緒に体験して欲しい
- ・NPO が開催している、障害児の為の映画鑑賞の活動がもっと広がって欲しい
- ・温水プールの活動がしたいが、支援学校並みの温水が少ない
- ・貴重な活動を継続してくださり心から感謝しています。私の子どもは言葉を発して自己を伝えることが難しいです。学びを通して自分の興味や意向を表出し、それをくみ取ってもらい、続く道を示してもらい、子どもの QOL がどんどん高まっていくのを感じます。なかなか予算化されず、もどかしく思います。市民の皆さんへの理解がさらに広がるよう、深まるよう保護者として努めたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。
- ・パソコンなどを使えたら YouTube などを楽しめるかな?と思うのですが、使えるまでになるには、回数、時間共にまだまだ必要です。補えるだけの補助金、人材がよりあればもっと選択の幅が広がると思います。
- ・娘が高等部卒業後からお世話になっている者です。日々過ごす時間のほとんどが、家族と医療関係者にしか会わない生活の中で、訪問で来て下さる先生方との時間は、娘にとって楽しい貴重な時間です。楽しい時間を過ごすことは、娘が元気に生きる活力にもなっていると思います。娘の出来る事、可能性を先生方との出会いからこれからも広げていけたらいいなと思っています。
- ・受講することができてとても嬉しいです、卒業後の生活が豊かになっていると思います。今まで会を維持していただいたからこそだと思います。会の維持が一番の課題かと思っています。他の人がどのよう

改善・充実して欲しいこと



次年度以降の訪問カレッジでの学びについて



な学びをしているのかを知る機会が増えると良いと思っています。

- ・体調が不安定で、呼吸器を使用している息子にとって、訪問カレッジのような生涯学習支援はとても重要です。訪問カレッジは、もっといろいろなことを学び、様々な人や体験から多くの刺激を受けて、充実した日々を送りたいと願う思いをサポートしてくれています。
- ・支援回数を増やしてもらえると嬉しいのですが、サポートを受けたいニーズに対してサポートして下さる先生方の人数が不足しているような状況だと思うので、支援を受けたい人が希望通り支援が受けられるような体制が整っていったらいいです。
- ・また、利用者負担を助成してくれる自治体がありますが、居住地ではこのような制度がないので、継続して学習できるような制度ができてほしいです。
- ・授業内容は、本人の興味を引き出す内容で、ICT 機器もしっかり活用していただけているので、本当に充実した学習時間を過ごさせています。このような素晴らしい学習支援をして下さる先生が増えていくように、サポートして下さる先生方の研修なども重要だと感じています。
- ・コロナが落ち着き、他の学生と交流できるような機会もあると嬉しいです。
- ・体調面で通学、通所できないので訪問カレッジのような取り組みはとても助かっています。
- ・このような支援が行政(財政面の支援など)と協力して行われるとさらに良いと思います。"
- ・日々の生活や本人の能力・機能向上役立つことを親子ともども学ばせていただき、大変貴重な場になっています。
- ・訪問カレッジでの学習に取り組んでからは、パソコンで様々な曲を作曲したり、電子図書でいろいろな本を読書し、感想文をまとめたりすることができるようになり、とても楽しいです。また、インターネットが使用できるようになったおかげでコロナ禍になった今もオンラインで授業を続けられることができ、すごく嬉しいです。これからも訪問カレッジでの学習を継続していきたいです。
- ・授業を受け、こんな力がついてたんだなあ等、日々の忙しさにかまけ、息子と向き合う時間をとれていない私に発見させてくれることも、多く、ありがたく思っています。アパートで息子と暮らしており、親戚も近くにはおらず、休みの日には息子とふたりで部屋にこもることが多いので、訪問学級を通して、ネットワークが広がることを期待しています。
- ・家族だけでは、してあげられない経験をさせて頂き、生活に楽しみが増えて、知らなかった好きなことを知ることも出来て、楽しみが増えました。ありがたく思っています。
- ・気管切開をした人たちと交流をしたい。若い人たちとぼっちゃなどをしながら日頃の生活について話をしたい。
- ・家が山の上で、車がないと外に出ることが難しいので、先生方には大変で申し訳なく思いながらも、来ていただけて大変ありがたく思っています。
- ・体力的に眠くなってしまうことも多いのですが、いらっしゃるといつも嬉しそうな表情をしています。それぞれの先生方が、季節のイベントを考えながらいろいろして下さり、感謝しています。"
- ・訪問授業では、それぞれの季節にちなんだ様々な歌をうたったり、たくさん曲を作詞作曲したりし、とても楽しいです。しかし、コロナ禍になってからはなかなか授業を受けることができなくなってしまった

ので、すごく寂しいです。また先生とも授業が再開できる日が早くきてほしいと思っています。

とても楽しく、ずっと続けて学びたい(本人)

- ・自力の通所が増えてきた中、コロナと本人の体調で3年余り通所が0回。色々困りごと相談先がなく、繋がって一つになることも出来ず……そんな中それぞれ訪問をして頂いています(それぞれの訪問は良くして頂いています)。各種必要な機器や生活用品なども条件が難しくなって、車椅子や姿勢保持のクッションなど高価な自費も続いている。移動も介護タクシー。主治医が大学病院から訪問医にかわった為、緊急時の受け入れ先に困る状況で安心して在宅できる状況ではない。入所についても見学や入所体験できる所もなく不安も大きい。
- ・コロナ禍や本人の体調などの理由で授業を受ける機会が極端に減ってしまいました。家から出る機会がほとんどなくなり、人との関わりが減って限られた者だけの生活になり、生活の中にもっと刺激や潤いが増えたらいいと思うので、状況が許せばこの先は以前のように授業を受けたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。
- ・いつも大変お世話になっております。去年は、訪問カレッジ「学びの実り アート&ミュージアム」の開催ありがとうございました。息子が学習支援を受け始めてから10年、大きな節目の年に参加できたこと、家族皆大変嬉しく思っています。そして、これからも「学び」のある生活を楽しみ、生きる力の支えとなってくれると思っています。
- ・学費に関して…訪問カレッジで得られる時間の対価を考えると、年間1万円は申し訳なく感じています。
- ・卒後の学びの場があることを嬉しく思っています。保護者なしで活動できたら本人の自立、保護者の負担減になり、いいなと思います。
- ・学校を卒業後も学びを継続できることはとてもありがたいことです。今後は視線入力などにも挑戦してみたいです。より充実した授業内容のためにも、利用者負担金はもう少し上げてほしいと思います。
- ・楽しい時間を過ごしているが、自分発信がまだできていない。SNSの活用など横のつながりをもちつつ日々の楽しみがひとつずつ増えていってくれたらと思う。
- ・本人は、今の授業をととても楽しみにしています。勉強が嫌いなので今の内容が良いです。親も楽しんでもらうのが一番と考えているので今の様な内容で続けていただければと思います。勉強嫌いな生徒で申し訳ないのですがよろしく願います。在籍年数が長いのでまだいいのかなと思もあります。
- ・もっと学びたい、回数を増やしてほしい。
- ・高校を卒業後も学びの継続が出来て嬉しい限りです。同世代との関わりがほぼ無くなってしまったので人との関わりが持てる場があるといいな。と思っています。カレッジでも遠足のようなみんなでお出掛けをしてみたいです。

(4)「理解啓発」に関する考察

「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」は、チラシ等にサブタイトルで「医療的ケアの必要な重度障害者の学びの成果を発表する文化祭」と載せたように、第1部は「学びの発表の場」と訪問教育のスクーリングや大学のオープンキャンパスのような「集いの場」であり、2部は社会啓発

を目的とした文化祭的イベントである。

アンケート回答に「生涯学習は誰しも当てはまることで、仕事に就いても、別途習い事をしたり資格を取ったり、学校年齢を越えても頭にはいることはいくらでもあります。障害あるなしに関わらず自分も勉強しなければと思いました。」とあるように、「生涯学習 (lifelong learning)」は年齢や障害のある無しにかかわらず全ての人々が対象であり、大学や自治体が行う市民講座やカルチャーセンターの講座など「特別な場での学び」もあれば、「日常生活の中での学び」も存在する。

しかし、アンケートの中には「学習」という言い方に違和感がありますが、現状ではやむを得ないのではと思うようになりました。卒業後の生活を豊かにすることに「学習」と言わなければならないというのは、「健気な障害者のイメージ」に添った表現で、推進するためには現状では仕方がないと思ました。」など「学習」ということばに抵抗感を感じた感想も寄せられた。また、バーチャル・ウォークに参加された施設からは次のようなコメントをいただいた。

当園は〇〇市に所在する身体障害者を主たる対象とする障害者支援施設です。昨今のコロナの関係もあり、利用者の方の社会参加の方法を模索する中で、ウェブの活用を始めたところです。

今日は多くの利用者さんが楽しみに集まっておられましたので、ご対応いただき皆さん大変喜んでおられました。見学に先立ち、チラシに記載の訪問カレッジの活動等の紹介をしたのですが、生涯学習についてやってみたいか聞いてみたところ「もう勉強はいいや」という利用者もおられ、皆の笑いを誘っていました。

展示の内容も皆様が作られた様々な作品や、最先端の機器まであり、興味深そうにご覧になっておられました。「とても楽しかったので、またやって欲しい」と感想を述べられる方もおられました。

ご案内いただいたガイドの方々も、音声がない状況で、指差し等工夫してご紹介いただき、大変助かりました。是非、お礼の意をお伝えいただけたらと思います。また何か機会があればぜひ参加したいと考えております。

この中で紹介があった障害当事者の「もう勉強はいいや」というのも本音であると考えられる。このように「学習」に対するネガティブなイメージは、「学習＝学校教育」から生まれてきていると推察する。教師から教授(教え授けられ)され、評価されてきたことが強く意識化されているのである。

一方、アンケートの中で訪問カレッジの活動に対して「学びは自発的で自由なものだとあらためて思いました。」という学びの本質を見いだした意見も見られた。「訪問カレッジ学生・家族の満足度調査」にも「子どもの QOL がどんどん高まっていく」とあるように、そこには、「生きることは、学ぶこと。学ぶことは、生きる喜び。」を感じさせる想いがあふれている。

教育基本法第3条(生涯学習の理念)「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と掲げる「生涯学習社会」を目指す牽引役に、訪問型生涯学習支援である訪問カレッジがなれるように、今後も社会への理解啓発を図っていききたい。

Ⅲ まとめ・今後の課題

見えてきた新たな可能性～訪問型学習支援事業の持続可能な制度創設に向けて～

重度障害者生涯学習ネットワーク 会長 飯野順子

この度の「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」は、訪問カレッジ生にとっては、文化祭（文化フェスティバル）です。学びの様子が映し出されているポスターには、生き生きと輝く笑顔・笑顔、笑顔が溢れています。その笑顔からは、学びは年々実っていることが伝わってきます。

この3日間を通して、新たな発見があり、今後の主体的な学びを支え、深める活動のヒントと可能性を見出すことができました。第1は、「バーチャルウォーク」です。ボランティアの大学生が、会場に来られない方に、iPadで会場案内をしました。実況アナウンスを聞きながら、リアルタイムで会場の雰囲気を実感できて、参加意識が高まり、新しい体験となりました。第2は、フォーラムの第一部で行った学生のリレートーク「オンライン西から東へ」についてです。練習を重ねて、緊張しながら発表した学生がいます。発表を聞いて刺激を受け、自分も同じことにチャレンジしたいと宣言した学生もいました。学生同士の刺激があり、友達ができた喜びもありました。今後もオンラインによる手法で交流し、つながる時をつくったり、更に社会見学などもオンラインで、学びを広げることができることも分かりました。分身ロボット「OriHime」によるオンラインお仕事体験も新鮮な活動でした。第3は、エプソンの「ゆめ水族園」です。社会貢献活動の一環ですが、海や魚の動きを間近に見たり、触れたりできるなど、その進化した仕組みは、夢見心地な空間でした。第4は、オリジナルの様々な支援機器を展示して下さったことです。「訪問カレッジ」の学生は、ほとんどの方が、何らかの形で一人一人に応じた支援機器を使用しています。会場に訪れた親子が試している場面も見受けられ、大きな成果となりました。感謝です。「訪問カレッジ」の活動は、個々の団体の単位では、一般的には弱小とみられますが、それぞれの団体には、専門性の高い支援員が多く、豊かな可能性を有しており、ネットワーク化によって大きな力を発揮できるという主宰者の自信にもなりました。

今年のフォーラムは、「訪問型生涯学習支援事業の持続可能な制度創設に向けて」と私たちのミッションそのものをダイレクトに伝えるタイトルで行いました。私たちは、カレッジ活動を持続可能にし、多くの方々の学びの実りを体験していただきたいと切に願っています。そのための方策を出し合って考えています。例えば、生活介護事業も担っているNPO法人では、訪問型生活介護の創設を!と提唱しています。「訪問療育いるか」は「居宅訪問型児童発達支援」の指定を受けて実践しています。その経験から成人後も対応できるように期限を延長してほしいと主張しています。今後に向けては、日野市や新宿区のように、行政として取り組んで下さるよう働きかけていきたいと願って、「学ぶことは 生きること 生涯にわたって学び続ける喜びを」というタイトルのリーフレットを作成しました。今後、活用いたします。

このようなイベントがあると知らされ、作品づくりに張り切ったというエピソードもあり、今後も学生主体の取組みとして、拡充していきたいと考えています。最後になりますが、この度は、「NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」の関係の方々が事務局を担当し、そのチーム力を見事に発揮し、綿密な打合せのもとに事業を推進できました。有難うございました。

令和4年度 文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」
「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究 報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和5年3月10日